

箱崎 7

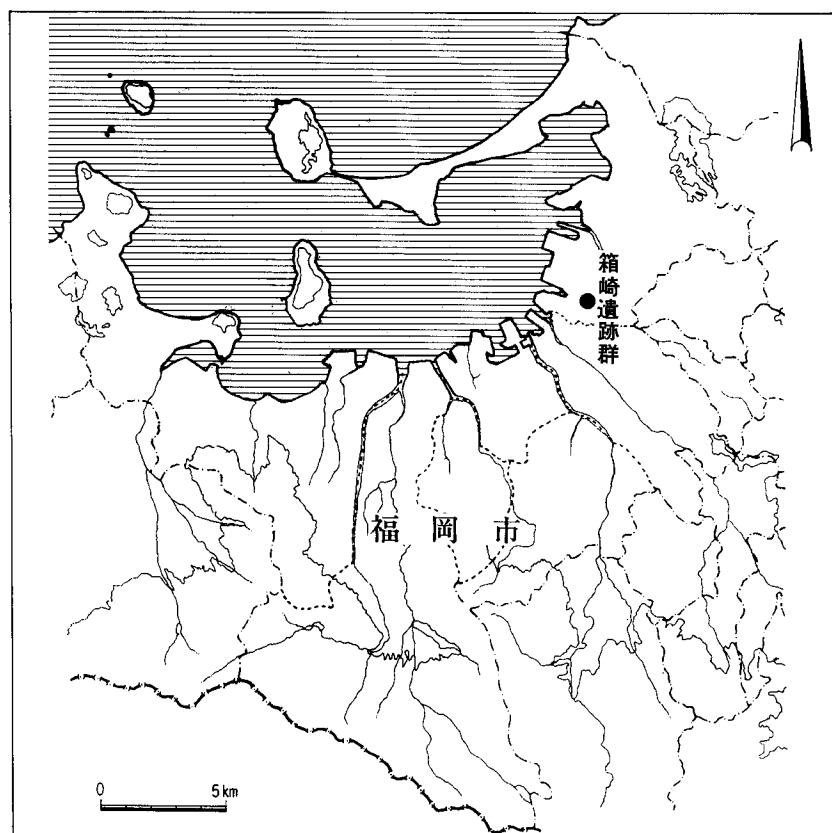
—箱崎遺跡群第8次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第591集



1999
福岡市教育委員会

はこ ざき
箱崎 7

— 箱崎遺跡群第8次調査の報告 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書第591集



調査番号 9643
調査略号 HKZ-8

1999
福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えてきた福岡市には、数多くの文化財が存在しています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努めているところです。

本書で報告いたします箱崎遺跡群は、筥崎宮を中心に発達したところで、「博多」と並ぶ、中世の国際貿易都市として知られています。それに加え、今回の調査では、箱崎遺跡群ではじめて古墳時代前期にさかのぼる集落が発見されました。当時の生活用具である壺、甕、高坏などの土器とともに飯蛸壺や石錘といった漁具が出土し、博多湾岸に暮らす人々の漁業形態を示す貴重な発見となりました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力をいただきました樋崎利幸様をはじめとする関係各位の方々には、心から謝意を表します。

平成11年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 町田英俊

例　　言

1. 本書は、福岡市東区箱崎1丁目2549-1、2549-6、2584-4の個人住宅兼共同住宅建設に伴い、福岡市教育委員会が1996（平成8）年10月1日から11月14日にかけて発掘調査を実施した箱崎（はこざき）遺跡群第8次調査の報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、竪穴住居→S C、溝→S D、井戸→S E、土坑→S K、その他→S X、ピット→S Pとした。遺構番号はピット以外を種類に関係なく連番とした。なお、29、37、43は欠番である。ピットは別に番号を付けた。
3. 本書に使用した遺構実測図は瀬戸啓治、中野美穂子、田上勇一郎が作成した。遺物実測図は久住猛雄、西山めぐみ、山口とし子、中村智子、上野裕子、田上が作成した。また、製図には久住、本田浩二郎、田中克子、西山、藤野雅基、伊藤健太、大神真理子、田上があたった。
4. 本書に使用した写真は田上が撮影した。
5. 本書に使用した標高は海拔高である。
6. 本書に使用した方位は磁北である。本地域では真北に対し $6^{\circ} 18'$ 西偏する。
7. 出土した陶磁器の分類は「博多出土貿易陶磁分類表」（福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV－博多－福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊 福岡市教育委員会 1984）による。
8. 本書の執筆はIII-2を久住が、Tab.2・3を久住・西山が行ない、他は田上が行なった。編集は田上が行なった。
9. 本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・公開される予定である。

調査番号	9643		遺跡略号	HKZ-8	
調査地地籍	東区箱崎1丁目2549-1、2549-6、2584-4		布地図番号	箱崎 34	
開発面積	486.32m ²	調査対象面積	250m ²	調査面積	225m ²
調査期間	1996年（平成8年）10月1日～1996年（平成8年）11月14日				

目 次

I	はじめに	1
1.	調査にいたる経緯	1
2.	調査の組織	1
3.	調査地点の立地と環境	2
II	調査の記録	6
1.	調査の経過	6
2.	調査の概要	9
3.	近世の遺構と遺物	10
(1)	溝	10
(2)	井戸	16
(3)	土坑	18
(4)	その他の遺構	21
4.	中世の遺構と遺物	23
(1)	溝	23
(2)	井戸	23
(3)	土坑	30
5.	古墳時代の遺構と遺物	38
(1)	竪穴住居	38
(2)	土坑	56
6.	ピットと遺構外の遺物	63
III	まとめ	64

挿図目次

Fig. 1 箱崎遺跡群の位置	3	Fig.23 S E 4 1 実測図	28
Fig. 2 箱崎遺跡群調査地点位置図	5	Fig.24 S E 4 1 出土遺物実測図	29
Fig. 3 調査区域図	6	Fig.25 中世の土坑実測図 1	31
Fig. 4 遺構分布図	7	Fig.26 中世の土坑実測図 2	33
Fig. 5 近世遺構分布図	10	Fig.27 中世の土坑実測図 3	35
Fig. 6 近世の溝実測図	11	Fig.28 中世の土坑実測図 4	36
Fig. 7 近世の溝出土遺物実測図 1	14	Fig.29 中世の土坑出土遺物実測図	37
Fig. 8 近世の溝出土遺物実測図 2	15	Fig.30 古墳時代遺構分布図	38
Fig. 9 S E 3 3 実測図	16	Fig.31 S C 3 6 実測図	39
Fig.10 S E 3 3 出土遺物実測図	17	Fig.32 S C 3 6 出土遺物実測図 1	42
Fig.11 近世の土坑実測図 1	19	Fig.33 S C 3 6 出土遺物実測図 2	43
Fig.12 近世の土坑実測図 2	20	Fig.34 S C 3 6 出土遺物実測図 3	44
Fig.13 近世の土坑出土遺物実測図	20	Fig.35 S C 5 8 実測図	48
Fig.14 S X 6 4 出土遺物実測図 1	21	Fig.36 S C 5 8 出土遺物実測図 1	51
Fig.15 S X 6 4 出土遺物実測図 2	22	Fig.37 S C 5 8 出土遺物実測図 2	52
Fig.16 中世遺構分布図	23	Fig.38 S C 5 8 出土遺物実測図 3	53
Fig.17 中世の溝実測図	24	Fig.39 S K 0 8 · 0 9 実測図	56
Fig.18 中世の溝出土遺物実測図	25	Fig.40 S K 4 4 実測図	57
Fig.19 S E 1 0 実測図	25	Fig.41 S K 4 4 出土遺物実測図 1	60
Fig.20 S E 1 0 出土遺物実測図	26	Fig.42 S K 4 4 出土遺物実測図 2	61
Fig.21 S E 3 0 実測図	27	Fig.43 ピット・遺構外の出土遺物実測図	63
Fig.22 S E 3 0 出土遺物実測図	28	Fig.44 博多湾沿岸の飯蛸壺出土遺跡	66

図版目次

PL. 1 西側調査区全景	8	PL.14 S E 4 1 出土遺物	29
PL. 2 東側調査区全景	9	PL.15 S K 0 1 · 0 2 · 0 3	30
PL. 3 西側調査区 S D 1 1 · 1 2	12	PL.16 S C 3 6 1	40
PL. 4 S D 1 2	12	PL.17 S C 3 6 2	41
PL. 5 東側調査区 S D 1 1 · 1 2	12	PL.18 S C 3 6 出土遺物 1	45
PL. 6 近世の溝出土遺物	13	PL.19 S C 3 6 出土遺物 2	46
PL. 7 S E 3 3	17	PL.20 S C 5 8 1	49
PL. 8 S E 3 3 出土遺物	17	PL.21 S C 5 8 2	50
PL. 9 S X 6 4	21	PL.22 S C 5 8 出土遺物 1	54
PL.10 S D 4 5	25	PL.23 S K 4 4 1	58
PL.11 S E 1 0	26	PL.24 S K 4 4 2	59
PL.12 S E 3 0	27	PL.25 S K 4 4 出土遺物	59
PL.13 S E 4 1	29		

表目次

Tab. 1 箱崎遺跡群調査一覧	3	Tab. 3 SC58出土土器觀察表	55
Tab. 2 SC36出土土器觀察表	46	Tab. 4 飯蛸壺計測表	62

I はじめに

1. 調査にいたる経緯

1996年（平成8年）4月25日、樋崎利幸氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市東区箱崎1丁目2549-1、2549-6、2584-4における個人住宅兼共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前調査願が申請された。申請地は、古代末から中世にかけての筥崎宮の門前町であり、貿易都市である箱崎遺跡群の範囲にかかるため、埋蔵文化財課では、1996年5月30日に試掘調査を実施した。その結果、現地表下80cm程の黄褐色砂層上面で中・近世の井戸や土坑といった遺構や輸入陶磁器などの遺物が発見された。工事には杭打ちや深い基礎が予定されており、遺構に与える影響は大きいと考えられるため、申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもち、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。調査は1996年10月1日より11月14日まで行なった。また、整理作業と報告書の刊行は1998年度（平成10年度）に行なった。

2. 調査の組織

発掘の調査・整理にあたっての組織は以下の通りである。

調査委託 樋崎利幸

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊

調査総括 埋蔵文化財課 課長 荒巻輝勝（調査年度）

柳田純孝（整理年度）

第2係長 山口譲治

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 内野保基（調査年度）

文化財整備課 河野淳美（整理年度）

調査担当 埋蔵文化財課第2係 松村道博

池田祐司（試掘調査）

埋蔵文化財課第2係 田上勇一郎（本調査）

調査補助 瀬戸啓治

調査作業 石橋テル子 今別府序子 岡部静江 金子國雄 金子澄子 唐島栄子 境フジ子

酒井康恵 坂田武 杉村百合子 高崎秀巳 辻美佐江 中野美穂子 布江孝子

整理補助 田中克子

整理作業 木村良子 丸井節子 西山めぐみ 藤野雅基 伊藤健太 山口とし子 中村智子

上野裕子 大神真理子

その他、発掘調査にいたるまでの様々な条件整備、調査中の調整などについて施主の樋崎利幸氏やそのご家族、施工の九州建設株式会社をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し、無事終了することができた。また、資料整理においては、韓式系土器について東京国立博物館の白井克也氏に、陶磁器について森本朝子氏にご指導をいただいた。古墳時代の土器については久住猛雄（福岡市教育委員会埋蔵文化財課）、報告書の作成においては本田浩二郎（同）の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

3. 調査地点の立地と環境

箱崎遺跡群は博多湾東岸に形成された南北に長い砂丘上に立地する。この砂丘は中世末に石堂川を開削するまで、博多遺跡群が立地する砂丘と一連のものであった。この古砂丘上には博多遺跡群と箱崎遺跡群の間に堅粕遺跡、吉塚遺跡、吉塚本町遺跡、吉塚祝町遺跡が知られている。これらの遺跡群は砂丘の微高地に発達したものである。堅粕遺跡では博多湾に面する北側に古墳時代前期の方形周溝墓や集落が認められ、南側では古代の集落が検出されている。吉塚遺跡では弥生時代中期から中世に及ぶ遺構がみられる。貨泉・銅鏡など注目すべき遺物が出土している。吉塚本町遺跡は弥生時代後期から古代の集落遺跡である。また、旧国鉄時代のプラットフォームなどの近・現代の遺構も調査された。吉塚祝町遺跡では弥生時代中期から古墳時代・古代・中世の遺構が検出されている。博多遺跡群は弥生時代中期から生活痕跡がみられ、特に古代から中世にかけての莫大な量の輸入陶磁器の出土は、我が国最大の対外貿易の港であったことを物語っている。

今回調査した箱崎遺跡群は砂丘の北端にあたり、旧糟屋郡に属する箱崎から旧那珂郡に属する馬出にかけての東西500m、南北1,000mの範囲に広がっていると考えられている。中心には923年創建の筥崎宮が鎮座する。西は博多湾に臨み、東を多々良川の支流、宇美川により画されている。北側は多々良川の河口があるが、かつてはここから筥崎宮の東側まで海が深くはいり込み、「箱崎ノ津」と呼ばれる筥崎宮の私港があった。

現在の微地形をみると、箱崎遺跡群は標高3.5m～4.5mにあり、その頂部は筥崎宮から600mほど真北にのび、そこから緩やかに標高を減じている。西側は標高2.5m付近で平坦になる。このあたりが旧海岸線であろう。元寇防壁推定線もこのあたりである。東は宇美川に向かってある程度の傾斜をもつて下っている。

箱崎の地は筥崎宮を中心に発達してきた。筥崎宮は延喜式神明帳に記載された式内社で、921年（延喜21年）、大宰府觀世音寺の巫女に八幡大菩薩の託宣があり、それによって、923年（延長元年）に、穂波郡にあった大分宮を現在の地に遷座・創建したものである。その理由として、八幡大菩薩の重要行事の一つ放生会の最適地であること、新羅の来寇を防ぐことなどがあげられている。1140年（保延6年）、筥崎宮・香椎宮などの神人らが大宰府以下屋舎数十家屋を焼き払う事件が発生し、筥崎宮は香椎宮とともに大宰府の府領となった。1151年（仁平元年）には大宰府官人による筥崎・博多の大追捕があり、宋人王昇の後家をはじめ千六百家の資材物を運び取り、筥崎宮にも乱入している。これらは筥崎宮と大宰府、日宋貿易との関係を物語る事件である。その後、筥崎宮は1185年（文治元年）11月には石清水八幡宮の別宮となった。1274年（文永11年）には、蒙古襲来により筥崎宮は焼失している。翌年再建された社殿も、その後幾度か焼失し、1546年（天文15年）、大内義隆が現在に残る本殿および拝殿を再建している。1587年（天正15年）、豊臣秀吉は島津氏攻略の帰途、筥崎宮を本陣とし、千利休らと箱崎松原で茶会を催している。

このように筥崎宮や箱崎は古くから日本史上をにぎわす事件や人物に関わりがあるが、考古学的な調査が行なわれたのは比較的最近で、1983年の地下鉄2号線（箱崎線）建設に先がけて実施されたのが最初である。その後現在まで16次にわたり調査が行なわれている。

これまでの調査で時期的に遡るのは6次調査で出土した石斧で、縄文時代晚期から弥生時代初頭に属するものと考えられるが、中世の遺構から出土しているため、この時期から人々が生活していたかどうかは確実性に乏しい。

確実に生活痕跡が認められるのは今回報告する8次調査で発見された古墳時代前期の竪穴住居と土

1. 箱崎遺跡群
2. 吉塚本町遺跡群
3. 吉塚祝町遺跡群
4. 吉塚遺跡群
5. 堅粕遺跡群
6. 博多遺跡群

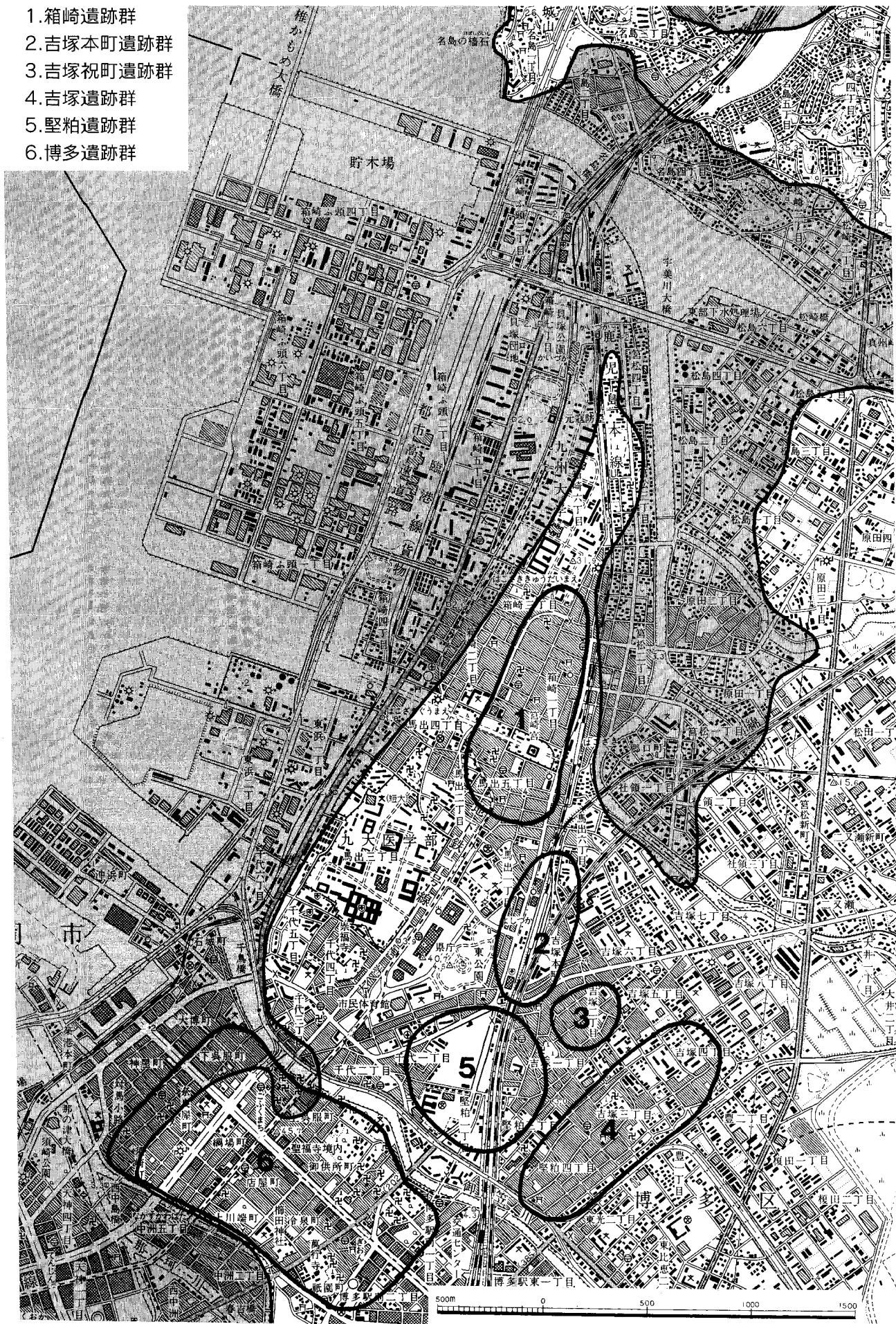


Fig.1 箱崎遺跡群の位置 (1/25,000)

坑である。飯蛸壺が多数出土しており、博多湾で漁業を営む集団が生活していたようである。そのほか10次、15次調査で古式土師器を確認している。

奈良時代の遺構・遺物は10次調査で土師器の甕が出土しているにとどまる。これは近代の井戸の掘方から出土したもので、明瞭な生活痕跡を示すものではない。

筥崎宮の創建のころの遺構としては、2次調査で検出した10世紀後半の溝くらいで、現在のところ不明である。

11世紀後半ごろから遺構・遺物が増加する。多量に出土する輸入陶磁器から、博多とともに箱崎が対外貿易の拠点であったことが裏付けられている。

12世紀後半から13世紀にかけて、2次、3次、5次調査地点など筥崎宮周辺では一時的に遺構が減少する。それに対して6次、10次、11次調査地点の、遺跡の北端部では12世紀後半からの遺物が目立つ。特に6次、10次調査地点では12世紀後半から13世紀初頭の時期の短期間に遺構、遺物が爆発的に増加し、以後急激に減少している。

10次調査地点では12世紀後半の遺構から鍋の鋳型、青銅の付着した取瓶、轍の羽口、炉壁などが多数見つかっており、鋳造工房が存在したと考えられる。

2次調査地点では1274年の文永の役による火災の後の整地と見られる整地層が発見されている。

14世紀から15世紀の頃、筥崎宮周辺の1次、2次、3次調査地点などでは定型化した集落が形成されはじめ、この頃から筥崎宮の門前町として栄えたようである。

近世の遺構、遺物はどの調査地点でもみられ、現在まで連綿と生活痕跡が残されている。

さて、今回の第8次調査地点は筥崎宮の北方約400mの地点で、箱崎遺跡群の東端にあたる。現標高は3.2mで、東側を通る県道浜新建・堅粕線（妙見通り）はこのあたりで南から北へ1mほど標高を減じている。

Tab.1 箱崎遺跡群調査一覧

調査次数	調査年	所在地	調査原因	文献
第1次調査	1983年	馬出2丁目、5丁目地内	地下鉄建設	市報193集（1988）
第2次調査	1986年	箱崎1丁目18-32外	福岡県粕屋総合庁舎建設	県報79集（1987）
第3次調査	1990年	箱崎1丁目2731-1、4	共同住宅建設	市報262集（1991）
第4次調査	1989年	箱崎1丁目2761	筥崎宮放生池掘削	市年報Vol.4（1991）
第5次調査	1991年	箱崎1丁目25、27	共同住宅建設	市報273集（1992）
第6次調査	1994年	箱崎3丁目8-31	共同住宅建設	市報459集（1996）
第7次調査	1994年	箱崎1丁目2711外4筆	共同住宅建設	市報459集（1996）
第8次調査	1996年	箱崎1丁目2549-1外	共同住宅建設	本書
第9次調査	1996年	箱崎1丁目1935-1	共同住宅建設	市報550集（1998）
第10次調査	1996年	箱崎3丁目地内	道路建設	市報551集（1998）
第11次調査	1997年	箱崎3丁目3264-3	病院建設	市報592集（1999）
第12次調査	1997年	箱崎1丁目2606-3-1	個人住宅建築	整理中
第13次調査	1997年	馬出5丁目520、521	共同住宅建設	市報592集（1999）
第14次調査	1998年	箱崎1丁目28-15	共同住宅建設	整理中
第15次調査	1998年	箱崎1丁目2615	個人住宅建設	整理中
第16次調査	1999年	箱崎1丁目2725	共同住宅建設	整理中

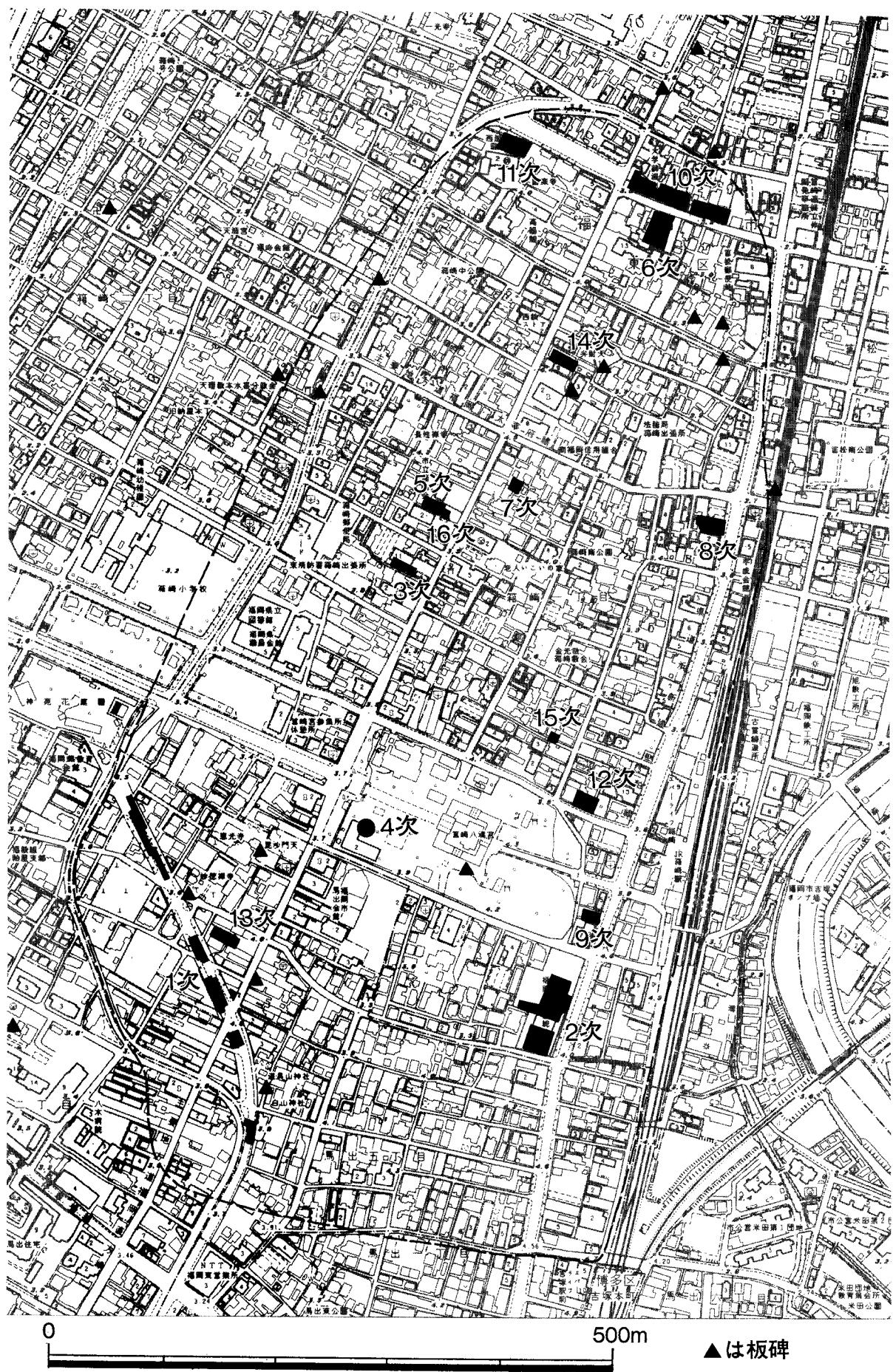


Fig.2 箱崎遺跡群調査地点位置図 (1/5,000)

II 調査の記録

1. 調査の経過

調査は1996年10月1日、表土除去と外柵の設置から開始した。表土除去はバックホーにより西側から行ない、排土は場外に搬出した。道路に面した東側はダンプの出入りとバックホーの作業スペースのため掘ることができなかつたので、この部分は排土置き場とし、西側調査終了後調査を行なうこととした。2日まで表土除去を行ない、3分の2程度をまず調査することになった。また、同日より壁の清掃や攪乱除去の作業を開始した。3日から遺構検出を行ない本格的な調査を開始した。4日、グリッド設定。発掘区にあわせた2m四方のグリッドを設定し、北から南へアルファベットのAからGまで、西から東へ数字の1から13まで記号をふった。5日、標高を箱崎小学校から移動。29日、西側調査を終了し、同日午後から翌30日まで西側を埋め戻し、東側の表土を除去した。31日、グリッド設定と遺構確認を行ない、東側の調査を開始した。11月11日には調査を終了し、次の箱崎10次調査地点へ機材搬出。14日埋め戻しをしてすべての作業を終了した。

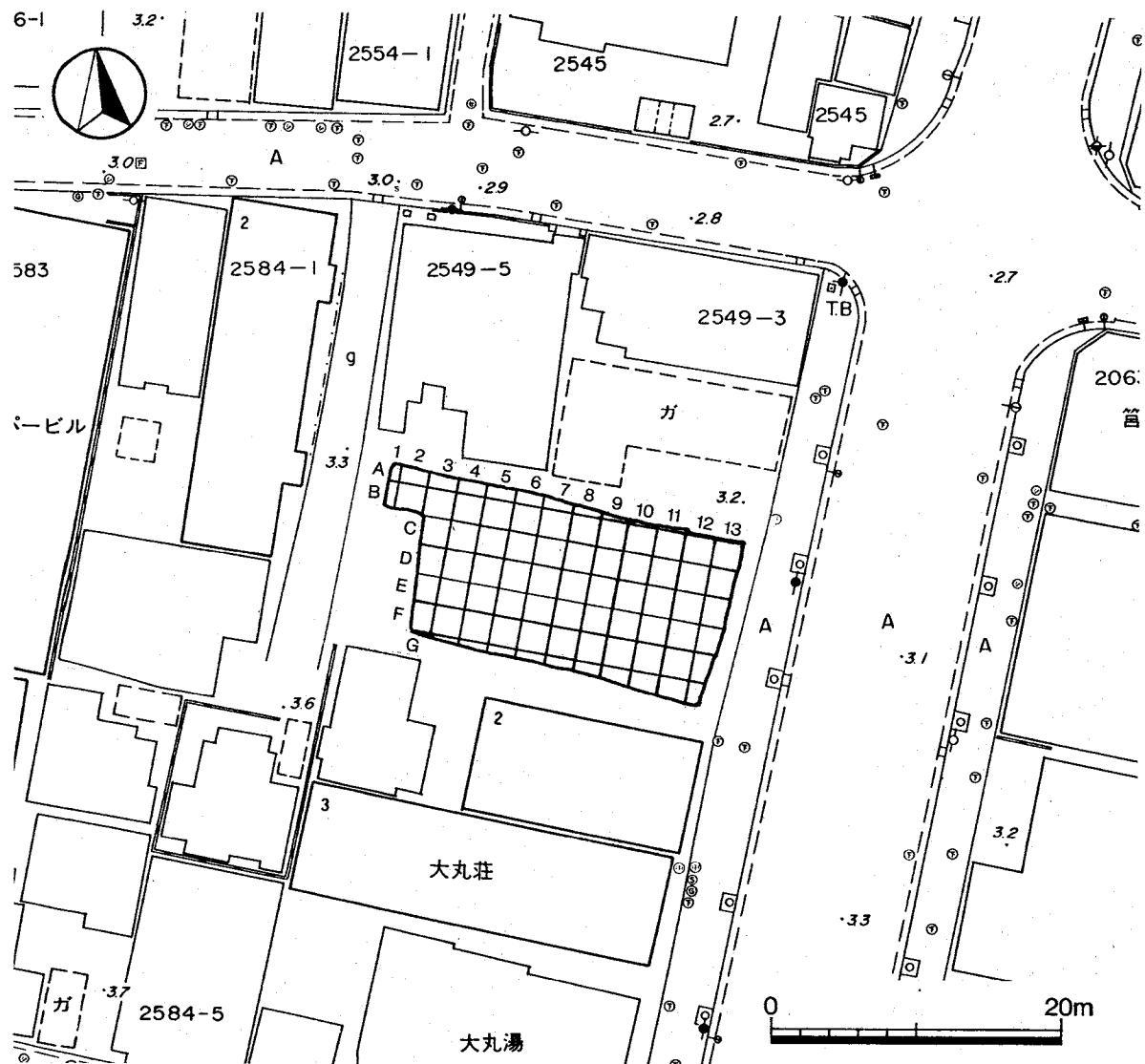


Fig.3 調査区域図 (1/500)

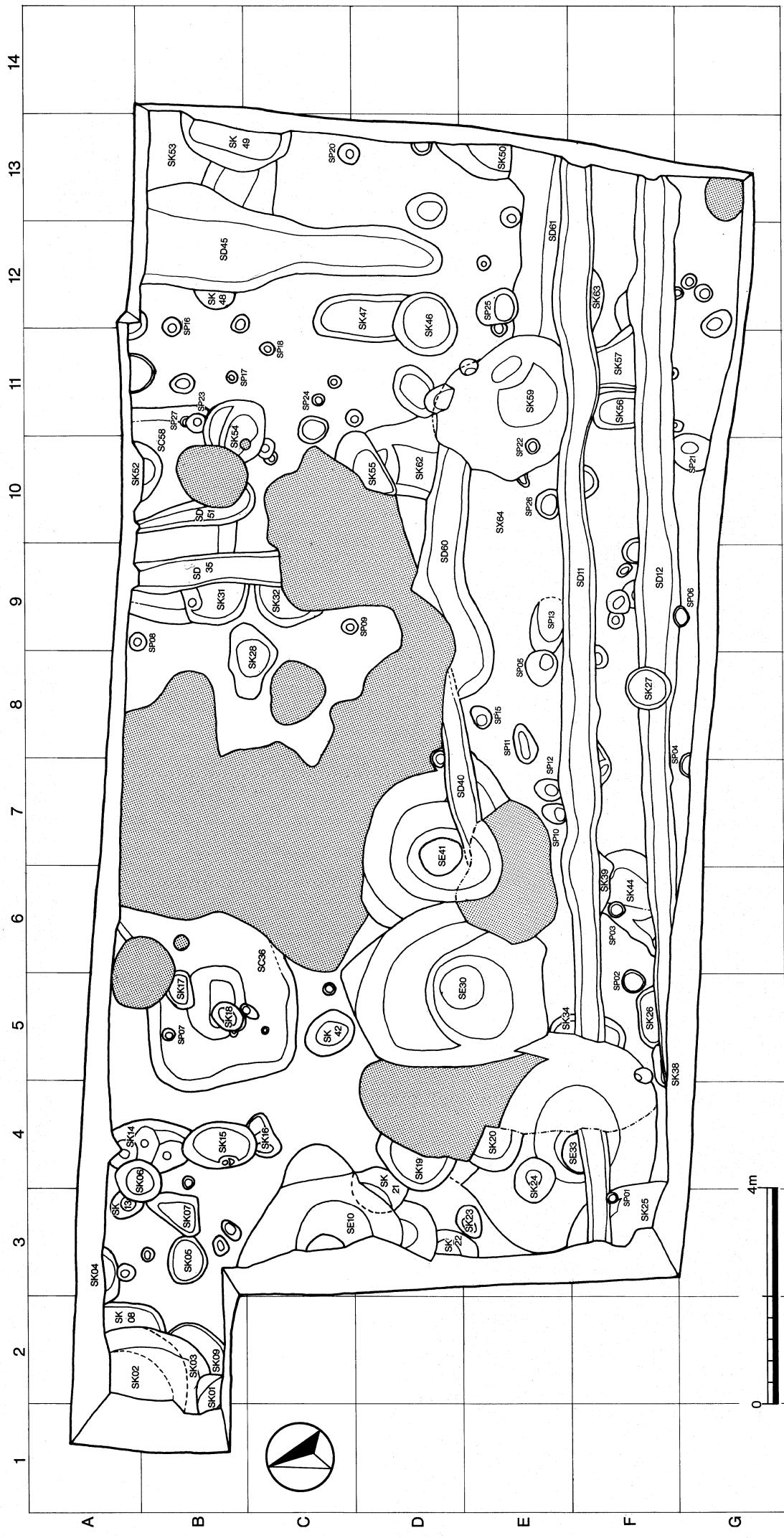


Fig.4 遺構分布図 (1/100)



PL. 1 西側調査区全景（上：西から・下：東から）

2. 調査の概要

遺構確認面の黄褐色砂は地表下60~70cmで現れた。標高は2.2~2.4mである。竪穴住居2軒、溝8条、井戸4基、土坑46基、ピット多数を調査した。攪乱が多かったものの、中世から近世にかけての遺構のほか、箱崎遺跡群では初めての古墳時代の遺構が発見された。

古墳時代の遺構は前期の竪穴住居2軒と土坑3基がある。住居は攪乱を受けたり、発掘区外に伸びたりして、全容は明らかでないが、方形プランである。

中世の遺構は井戸、溝、土坑など調査区全面に広がり、今回検出した遺構の多数を占める。井戸は調査区西側に集中しており、当時の屋敷地の空間利用を示すものであろう。

近世の遺構は南側に多く分布する。発掘区南端では現在の地割とほぼ同方向の溝2条が平行に伸びている。

遺物は古墳時代の2軒の竪穴住居からまとまった量の古式土師器が出土した。中には畿内や瀬戸内さらには韓国南部からの搬入と思われるものもある。飯蛸壺の出土も多く、当時の生業の一端を示す遺物として注目される。また、1つの土坑から20個体以上の飯蛸壺がまとまって出土している。底部に孔がある博多湾岸では珍しいタイプが多く、口縁下に2孔を穿つ特異なタイプもある。そのほか東側発掘区の浅い落ち込みから多くの近世陶磁器が出土した。箱崎遺跡群の中心時期である中世の遺物は今回の調査では出土量が少なく、また、近世の遺構に混入するものが多かった。発掘区東側の近世遺構からは磁州窯系白地鉄絵壺が出土している。



PL.2 東側調査区全景（南から）

3. 近世の遺構と遺物

溝3条と井戸1基、土坑10基、浅い落ち込み1基を調査した。溝はSD11とSD12が1.5mの距離で平行しており、何らかの地割りがあったと考えられる。

(1) 溝

SD11

E-6～13、F-3～13で20m確認した東西方向の溝である。東西両方向とも発掘区外へ伸びる。SK25、SE33、SK34、SK39、SK44、SK56、SK57、SK59、SD61、SK63、SX64を切る。幅0.4～0.8m、深さ0.3～0.6m。覆土は黒色の粘質土である。

肥前染付、備前擂鉢ほか国産陶磁器、龍泉窯系青磁碗I類、II類、白磁碗IV類、磁州窯系白地鉄絵壺、瓦、土鍋、火鉢、瓦器碗、高台付土師器甕、土師器坏、硯、古墳時代の土師器、飯蛸壺が出土した。**1**は龍泉窯系青磁III類の小鉢である。復元口径14.2cm、器高3.7cmで青緑白色の釉が厚くかかる。見込みには段がある。**2**は肥前の染付碗である。復元口径8.6cm、器高3.0cmである。外面に淡く雨降り文を描く。見込みは釉を搔き取る。17世紀末から18世紀の製品。**3**は瓦質の火鉢である。口縁下に菊花のスタンプを施す。**4**は陶器の擂鉢である。復元口径34.4cmである。口縁を外側に折り返し、その直下に2条の沈線を施す。擂目は15本を単位とする。**5・6**は備前の擂鉢である。口縁の平坦面を幅広く作り、口縁部断面が三角形になる15世紀頃の特徴を持つ。**5**は復元口径32.4cmである。**7**は古墳時代前期の布留系甕である。復元口径15.2cm。胴部に波状文がある。**8**は古墳時代の陶質土器の破片である。外面に格子目タタキがみられる。接合痕が残る。**9**は硯である。幅6.2cm、厚さ1.2cmである。あずき色の緻密な石材である。**10**は磁州窯系の鉄絵壺である。白化粧土を施した後、透明釉をかけている。胴部の破片であるが、正確な上下、傾きは不明。壺の絵柄を区切る二本線が描かれている。これと同一個体と思われる破片がSD12、SK49、SX64、B-13で出土したのであわせて説明する。実測図は他の磁州窯系の壺の形態を参考に復元した。**11**はSD12出土の肩部から胴部上半の破片で鳳凰の翼と思われる部分と渦巻き文が描かれる。**12**も肩部から胴部上半の破片で、肩部に横線を引き、その上部に花文、下部に絵柄を区切る二本線と渦巻き文が描かれている。B-13より出土した。**13**も**12**と同じく、横線とその上下が描かれており、**12**の裏側にあたる部分であろう。SX64

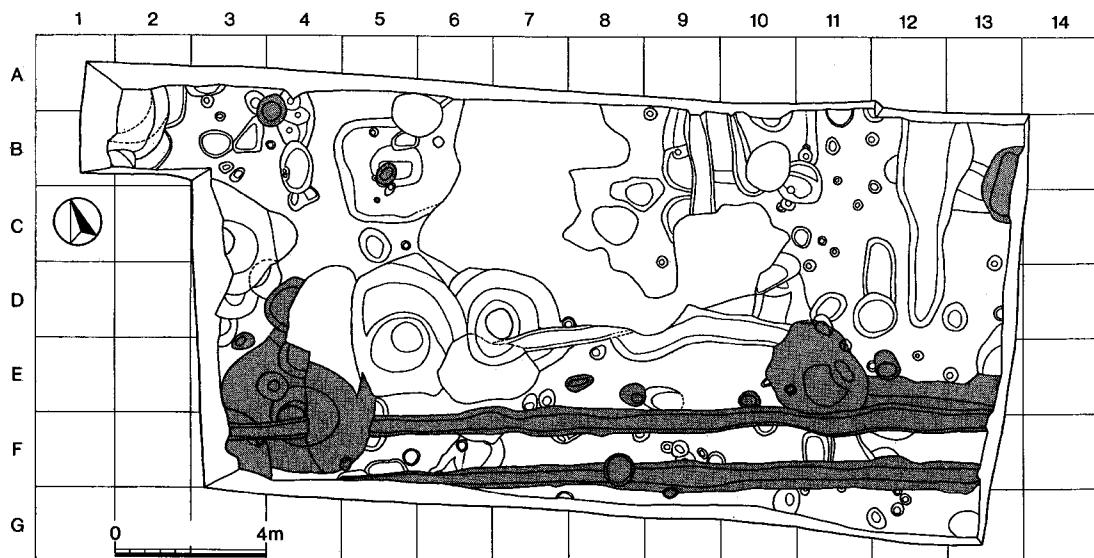


Fig. 5 近世遺構分布図 (1/200)

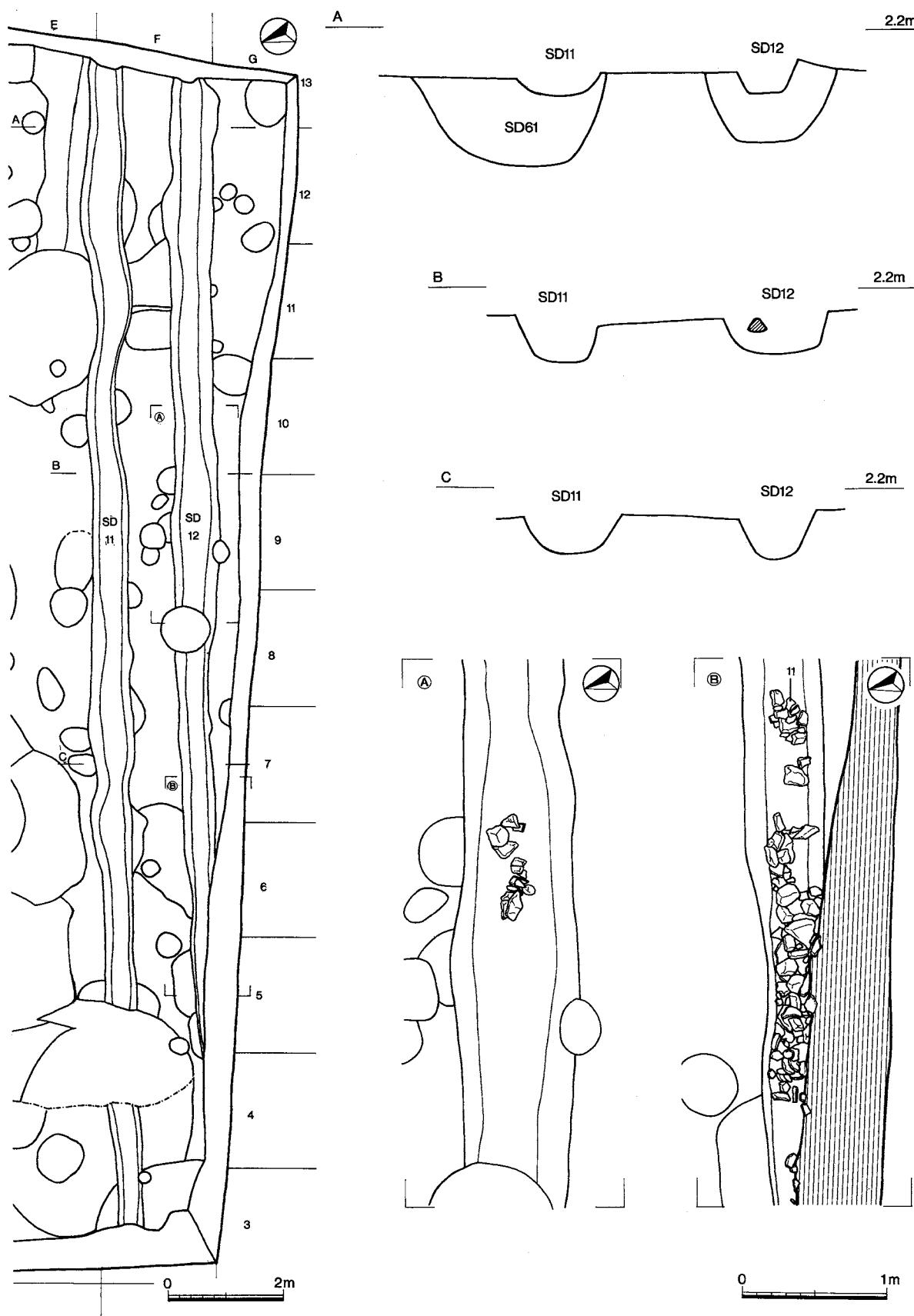


Fig. 6 近世の溝実測図 (1/100 · 1/40)



PL .3 西側調査区 SD11・12（東から）



PL .4 SD12（東から）



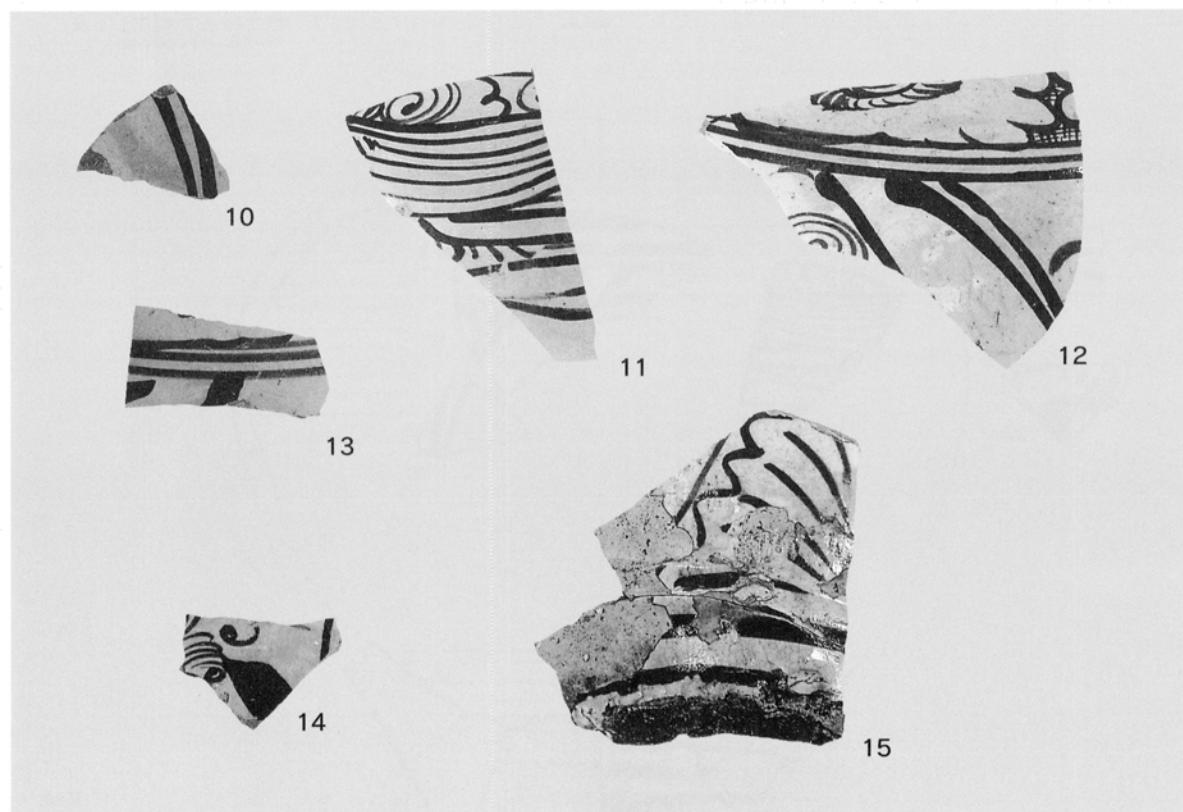
PL .5 東側調査区 SD11・12（西から）

出土。14は胴部の破片である。小片ではっきりしないが葉と茎が描かれている。11に鳳凰が描かれているので、その対面の絵柄であろう。SX 6 4出土。15はSK 4 9から出土した底部の破片である。復元底径は13.5cmである。

SD 12

F-4~13、G-8~13で17m確認した、SD 1 1に平行する東西方向の溝で、両側とも発掘区外へ伸びる。SK 2 6、SK 3 8、SK 4 4、SK 5 6、SK 5 7を切り、SK 2 7に切られる。幅0.5~0.8m、深さ0.3~0.5m。覆土はSD 1 1と同じく黒色の粘質土である。発掘区の東では、黒色粘質土の下層と両岸に暗褐色の砂質土がある。

2ヶ所で礫を中心とした遺物の集中部がみられた。出土遺物は肥前染付、唐津陶器ほか国産陶磁器、龍泉窯系青磁碗、白磁碗IV類、磁州窯系白地鉄絵壺、瓦、土鍋、火鉢、土師器坏（糸切り・ヘラ切り）、古墳時代土師器高坏がある。16~20は肥前の染付である。16は皿である。復元口径13.6cm、器高4.2cm、復元高台径7.6cm。内面は側面を四区画し、松と唐草の文様を交互に配する。外面は唐草文を描く。17世紀後半から18世紀前半の製品。17は碗で外面に丸文を描く。復元口径12.2cm。18も丸文を描く碗で、見込みに二重圈線とコンニャク印版の五弁花を施す。高台内には銘がある。復元高台径5.0cm。17と18は接合しないが同一個体の可能性がある。18世紀後半の製品。19は碗。復元口径9.2cm。外面にコンニャク印版で菊散らし文を施す。18世紀前半の製品。20は蓋物の蓋で、橋摘みを貼りつける。径は6.8cm、器高2.3cm。21は陶器の受け皿で、復元口径21.2cm、復元底径14.0cm、器高2.7cm。22は土師質の壺かと思われる底部片である。底部はヘラ切り。復元底径8.0cm。23~25は土師器の坏である。23は復元口径16.2cm、復元底径11.7cm、器高3.1cm、底部は糸切りで板目圧痕が残る。24は口径14.4cmで底部はヘラ切りである。25も底部はヘラ切りである。26・27は高台付土師器である。



PL.6 近世の溝出土遺物（約1/2）

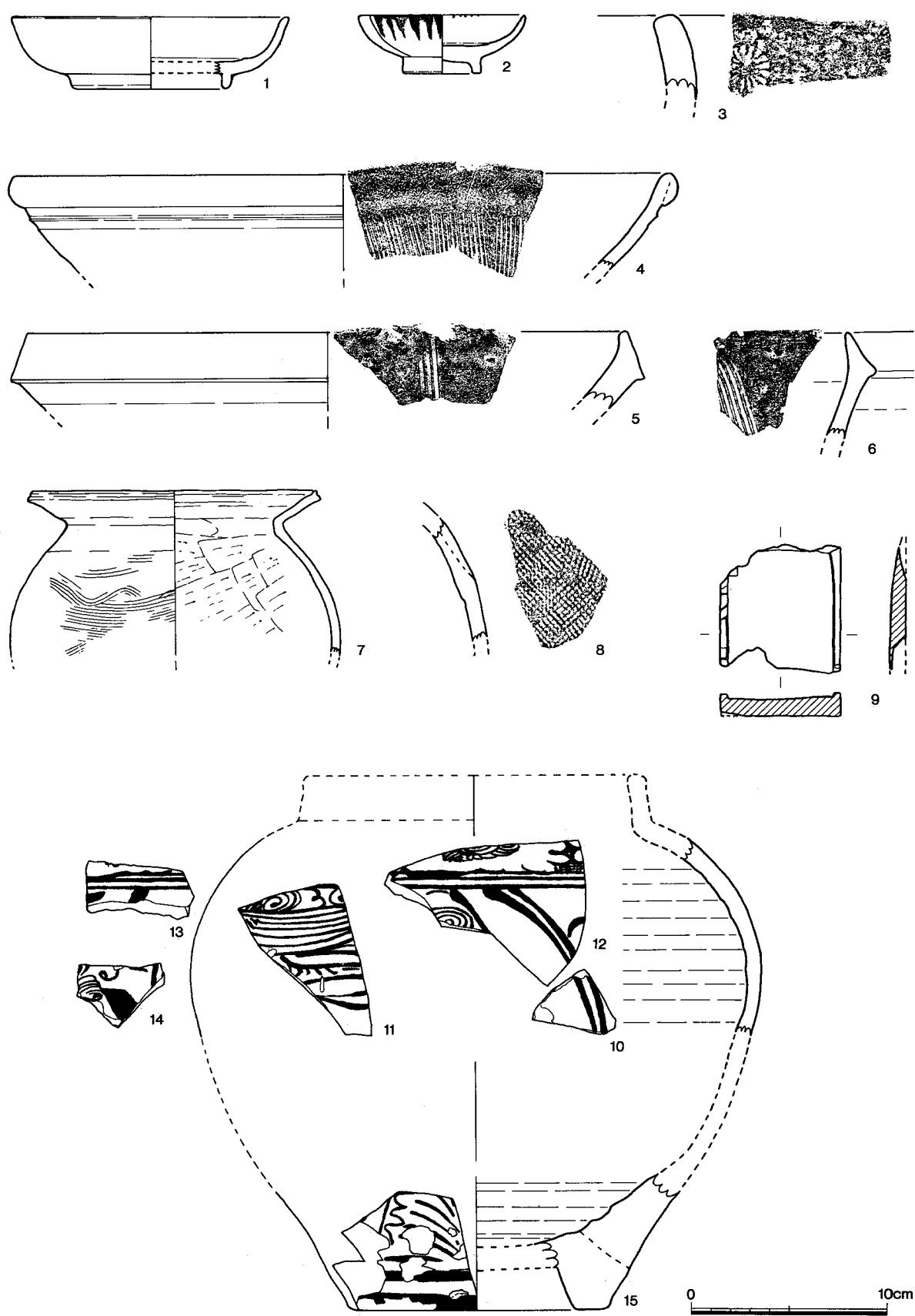


Fig. 7 近世の溝出土遺物実測図 1 (1/3)

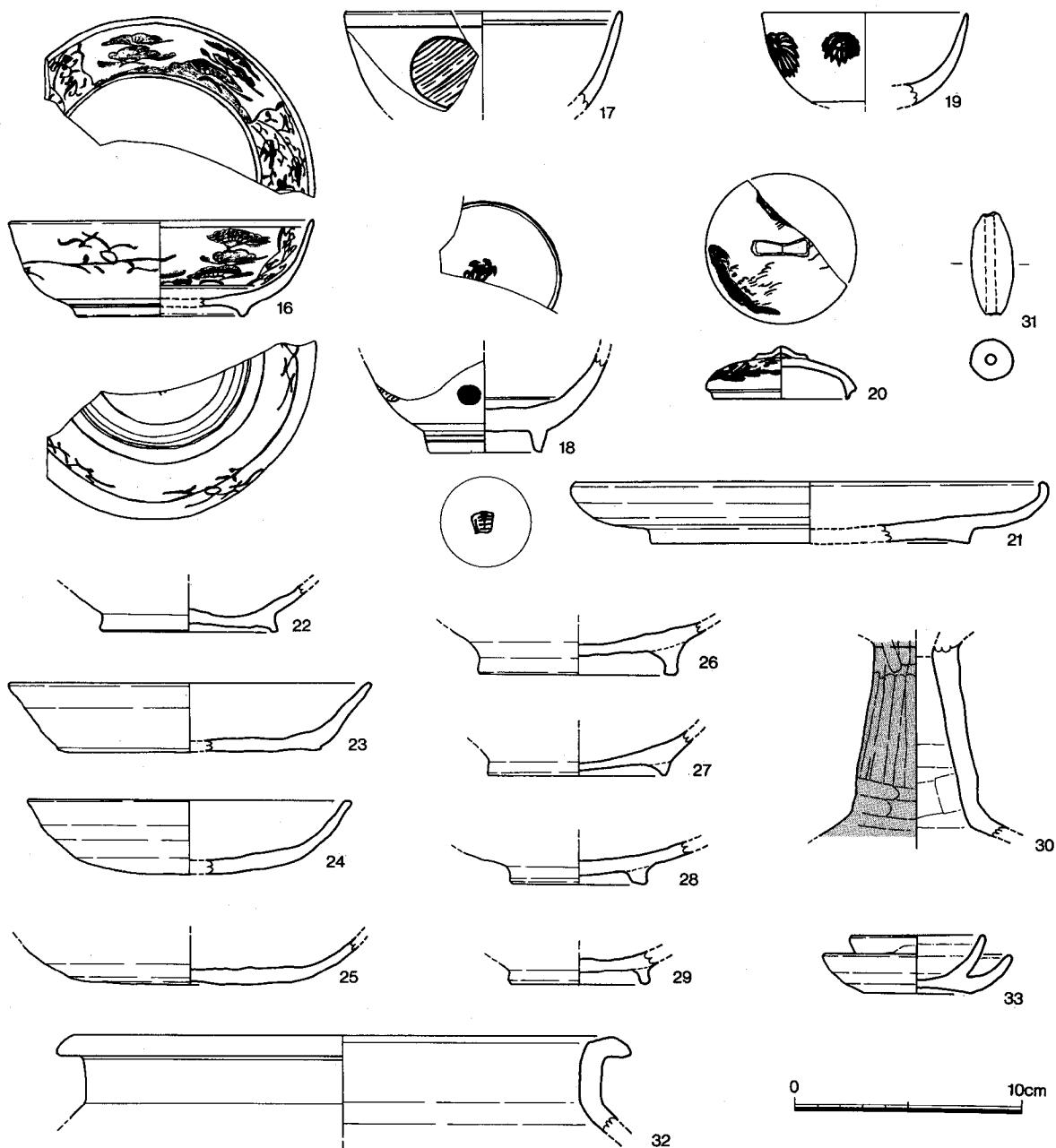


Fig.8 近世の溝出土遺物実測図 2 (1/3)

復元高台径は26が8.0cm、27が8.8cm。28・29は黒色土器である。内面が黒色で、ヘラミガキを施している。高台径は28が6.4cm、29が6.2cm。30は古墳時代の高坏の脚部である。外面朱塗りで関東地方の和泉式に似る。31は土錘である。長さ4.3cm、幅1.8cm、重量15 g。

S D 6 1

E・F-11~13で東西方向に4 m確認した。東側は発掘区外に伸びる。西側はSK59に切られ、その先は不明である。幅1.0~1.5m、深さ0.6m。覆土は暗褐色砂質土である。SK50、SK63を切り、SD11、SK59に切られる。

肥前陶磁ほか国産陶磁器、白磁碗、瓦、土鍋、須恵質甕、土師器坏（糸切り）が出土した。32は陶器の甕で、復元口径は25.5cm。33は陶器のひょうそくである。内側の径が6.0cm、外側の径が8.4cm、底径4.8cm、器高2.6cmである。底部は糸切り。深緑色の釉がかかるが、外面と口縁部は露胎である。

(2) 井戸

SE33

E・F-3~5で検出した円形井戸である。東側は攪乱を受け、SD11、SK20、SK24、SK25に切られる。掘方径は4m程である。井筒は一部しか残っていなかったが、径0.7mの円形の桶である。覆土は掘方部は黄褐色粗砂で黒色土のブロックを含む。井筒部は黒色土である。

国産陶器甕、青磁碗、白磁碗・皿、土鍋、須恵質甕、瓦器椀、高台付土師器、土師器壺・皿（ヘラ切り・糸切り）が出土した。**34**は龍泉窯系青磁碗I-9類の底部である。暗緑色の釉がかかる。高台径5.3cm。**35**は白磁碗の底部である。高台内側に墨書がある。花押と思われる。高台径6.0cm。**36**は白磁高台付皿I類の底部である。くすんだ白色の釉がかかる。細かい氷裂がある。高台径5.6cm。**37**は白磁平底皿IV類の底部である。底径3.8cm。見込みに沈圈線がある。灰白色的釉がかかる。底は削って露胎としている。**38~41**は土師器の皿である。底部は回転糸切りで、**40**を除き板目压痕がつく。**38**は復元口径9.0cm、復元底径6.6cm、器高1.0cm。**39**は復元口径9.0cm、復元底径6.8cm、器高1.1cm。**40**は復元口径10.0cm、底径7.0cm、器高1.1cm。**41**は完形で口径10.4cm、底径8.8cm、器高1.1cm。**42**は土師器の壺である。底部は回転糸切りで板目压痕がつく。復元底径10.6cm。**43**は弥生時代後期前半の甕の底部である。弥生土器の出土は箱崎遺跡群では初めてである。調整は内外面ともハケ。かなり摩滅している。**44**は施釉陶器の甕である。復元口径36.0cm、器高16.0cm。茶色の鉄釉の上に茶褐色の釉をかける。肩部に2条、体部のやや下方に8条の沈線を施す。SE33からは底部が出土し、体部、口縁部はSD12、SX64やE-11付近から出土している。

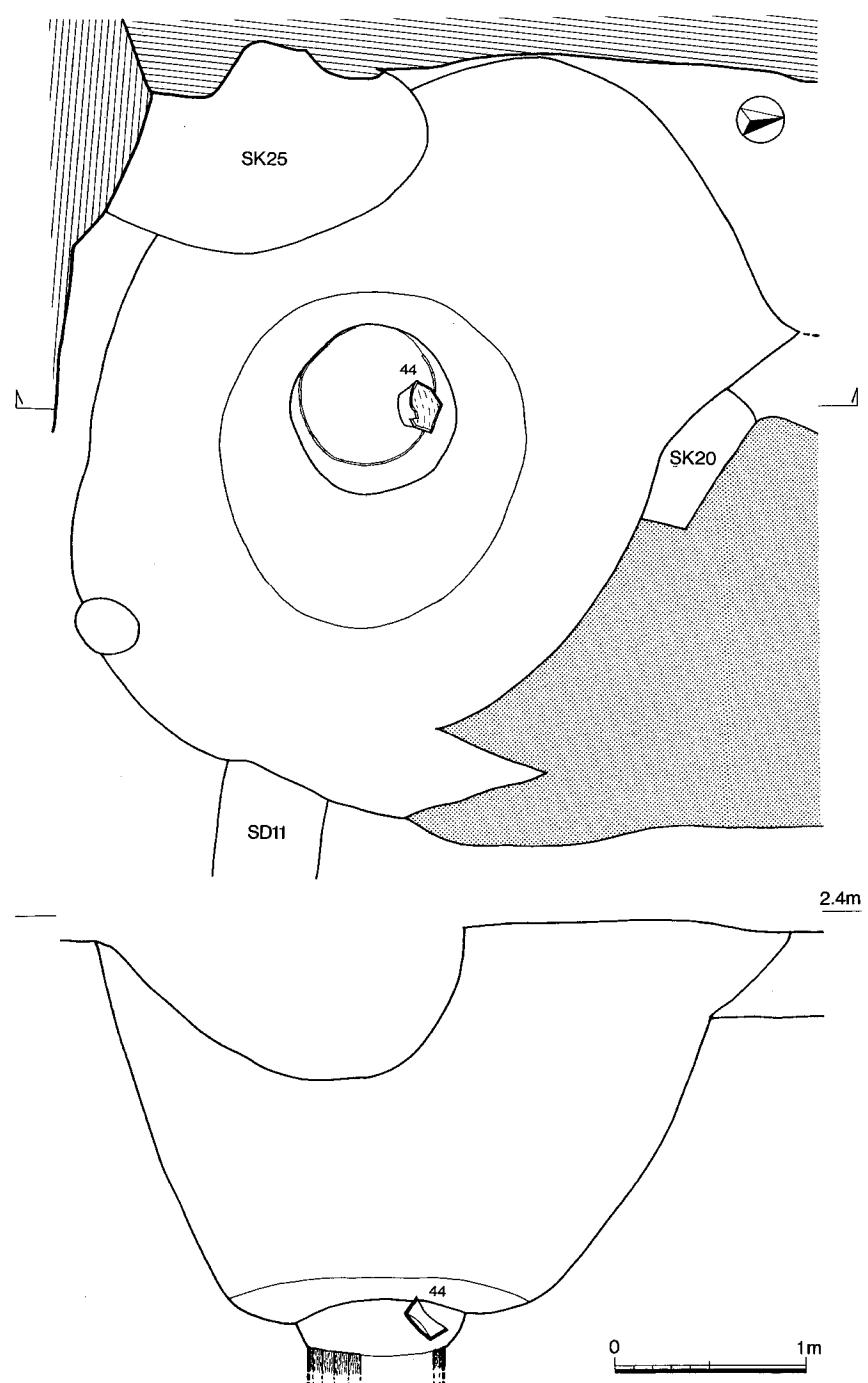
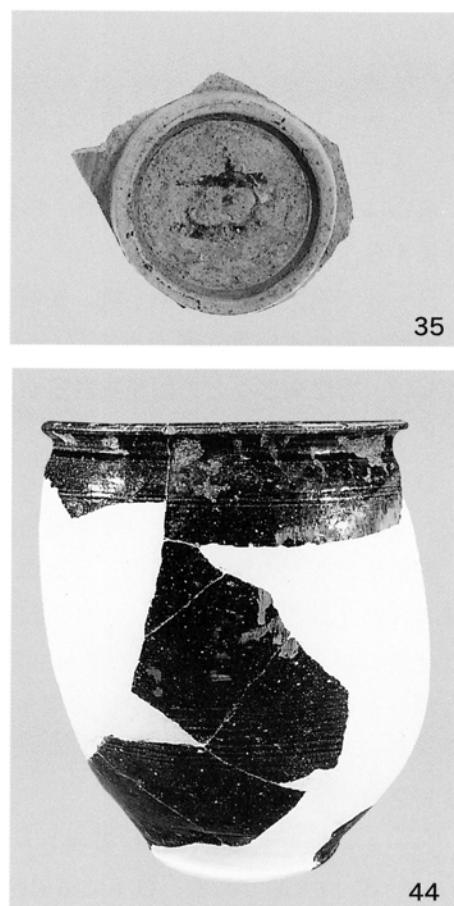


Fig.9 SE33 実測図 (1/40)

る。底部は回転糸切りで、**40**を除き板目压痕がつく。**38**は復元口径9.0cm、復元底径6.6cm、器高1.0cm。**39**は復元口径9.0cm、復元底径6.8cm、器高1.1cm。**40**は復元口径10.0cm、底径7.0cm、器高1.1cm。**41**は完形で口径10.4cm、底径8.8cm、器高1.1cm。**42**は土師器の壺である。底部は回転糸切りで板目压痕がつく。復元底径10.6cm。**43**は弥生時代後期前半の甕の底部である。弥生土器の出土は箱崎遺跡群では初めてである。調整は内外面ともハケ。かなり摩滅している。**44**は施釉陶器の甕である。復元口径36.0cm、器高16.0cm。茶色の鉄釉の上に茶褐色の釉をかける。肩部に2条、体部のやや下方に8条の沈線を施す。SE33からは底部が出土し、体部、口縁部はSD12、SX64やE-11付近から出土している。



PL.7 SE33 (東から)



PL.8 SE33出土遺物(35:約1/2・44:約1/6)

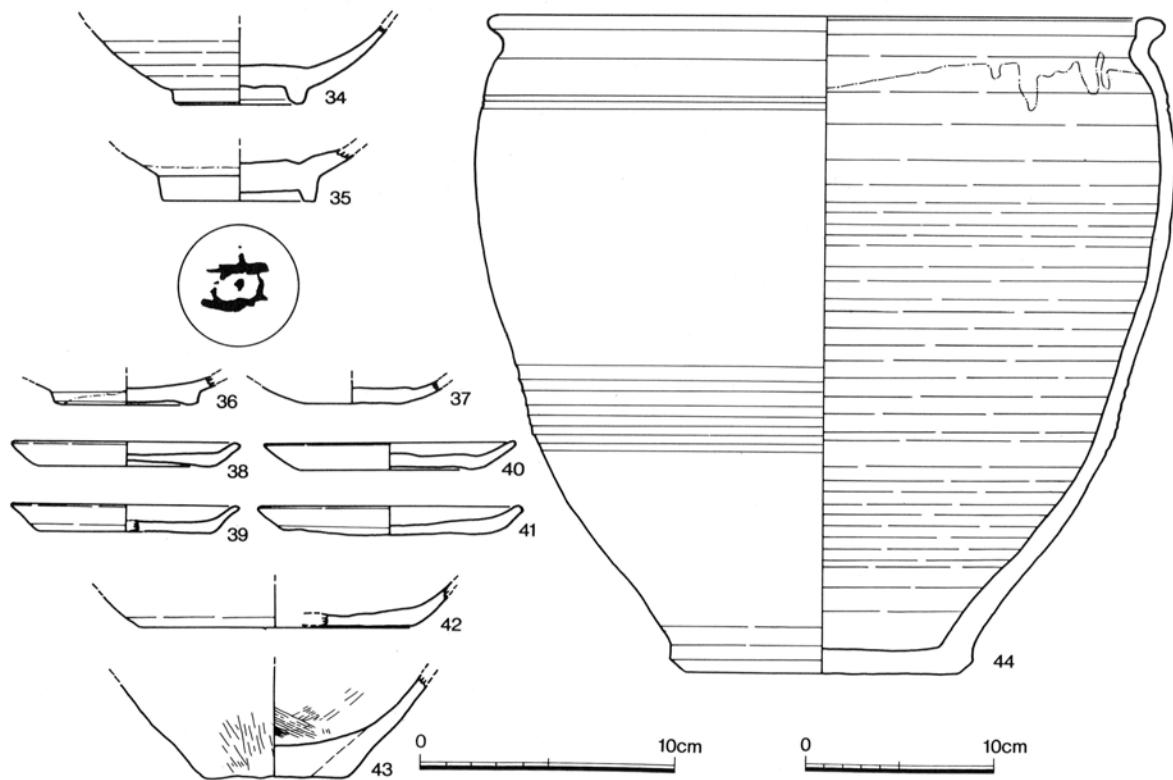


Fig.10 SE33 出土遺物実測図 (44:1/4・他:1/3)

(3) 土坑

S K 06

A・B-3・4で検出した円形土坑である。直径0.9m、深さ0.2m。覆土は黒褐色土である。S K 07、S K 13、S K 14を切る。

遺物は少ない。肥前染付、火鉢、白磁碗、中国陶器A群盤が出土した。

S K 18

B-5で検出した楕円形土坑。長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.2mである。S C 3 6を切る。

古墳時代の土師器が多く出土したが、これはS C 3 6を掘り込んだときに混入したものである。肥前染付、唐津陶器などの国産陶磁器が出土した。

S K 19

D-3・4に位置する。円形土坑と思われるが、東側を攪乱に切られており不明。直径は1.5mである。深さは計測忘れ。覆土は暗茶褐色砂である。S K 2 1を切る。

肥前染付などの国産陶磁器、青磁皿、瓦器椀、高台付坏、土師器坏（ヘラ切り）・皿（糸切り）、古墳時代の土師器甕が出土した。**45**は肥前の染付碗である。外面に格子文を描く。復元底径3.2cm。19世紀代の製品。**46**は肥前系と思われる陶器碗で復元口径14.3cm、器高4.1cm。少し緑がかった灰白色の釉がかかる。見込みの釉を広く搔き取る。17世紀後半から18世紀ぐらいの製品か。**47**は土師器の坏である。復元口径17.6cm、残存器高2.7cm。底部はヘラ切りである。中世の遺物の混入である。

S K 20

E-4に位置する。攪乱に破壊されているが、円形もしくは楕円形の土坑であろう。残存部の径は0.8m、深さ0.2mである。覆土は黒褐色土。

白磁碗、瓦器椀、土師器坏（ヘラ切り・糸切り）などの中世の遺物が出土したが、近世の井戸S E 3 3を切っているため、近世の遺構である。**48**は土師器の坏である。底部ヘラ切りで、丸底にする。復元口径15.6cm、残存器高3.1cmである。器壁は厚い。中世の遺物の混入である。

S K 23

D・E-3で検出した楕円形土坑である。長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.2m。

肥前染付、龍泉窯系青磁碗、中国産陶器、高台付土師器、土師器坏、古墳時代土師器甕が出土した。**49**は土師器の坏である。復元口径14.6cm、復元底径10.5cm、器高2.7cmである。底部は糸切りで板目圧痕が残る。中世の遺物の混入である。

S K 24

E-3・4に位置する楕円形土坑である。長軸0.8m、短軸0.7m、深さ1.0m。

須恵器、土師器坏（ヘラ切り）が出土した。近世の井戸S E 3 3を切っており、近世の遺構である。

S K 25

F-3・4に位置する。大半が発掘区外なので全容不明。径1.8m、深さ1.7mまで確認した。深さはさらにありそうで、井戸の可能性がある。S E 3 3を切り、S D 1 1に切られる。

白磁碗IX類、青白磁、瓦、須恵器、高台付土師器、土師器坏（糸切り）が出土した。**50**は土師器の皿である。復元口径9.2cm、底径6.4cm、器高1.2cmである。底部は回転糸切りで板目圧痕が残る。中世の遺物ばかりだが、近世の井戸S E 3 3を切っているので近世の遺構である。

S K 27

F-8で検出された円形土坑で、直径0.8m、深さ0.9m。S D 1 2を切る。覆土は黒色土である。

肥前染付、国産陶器壺、白磁碗VI類、高台付土師器、土師器坏（ヘラ切り）が出土した。

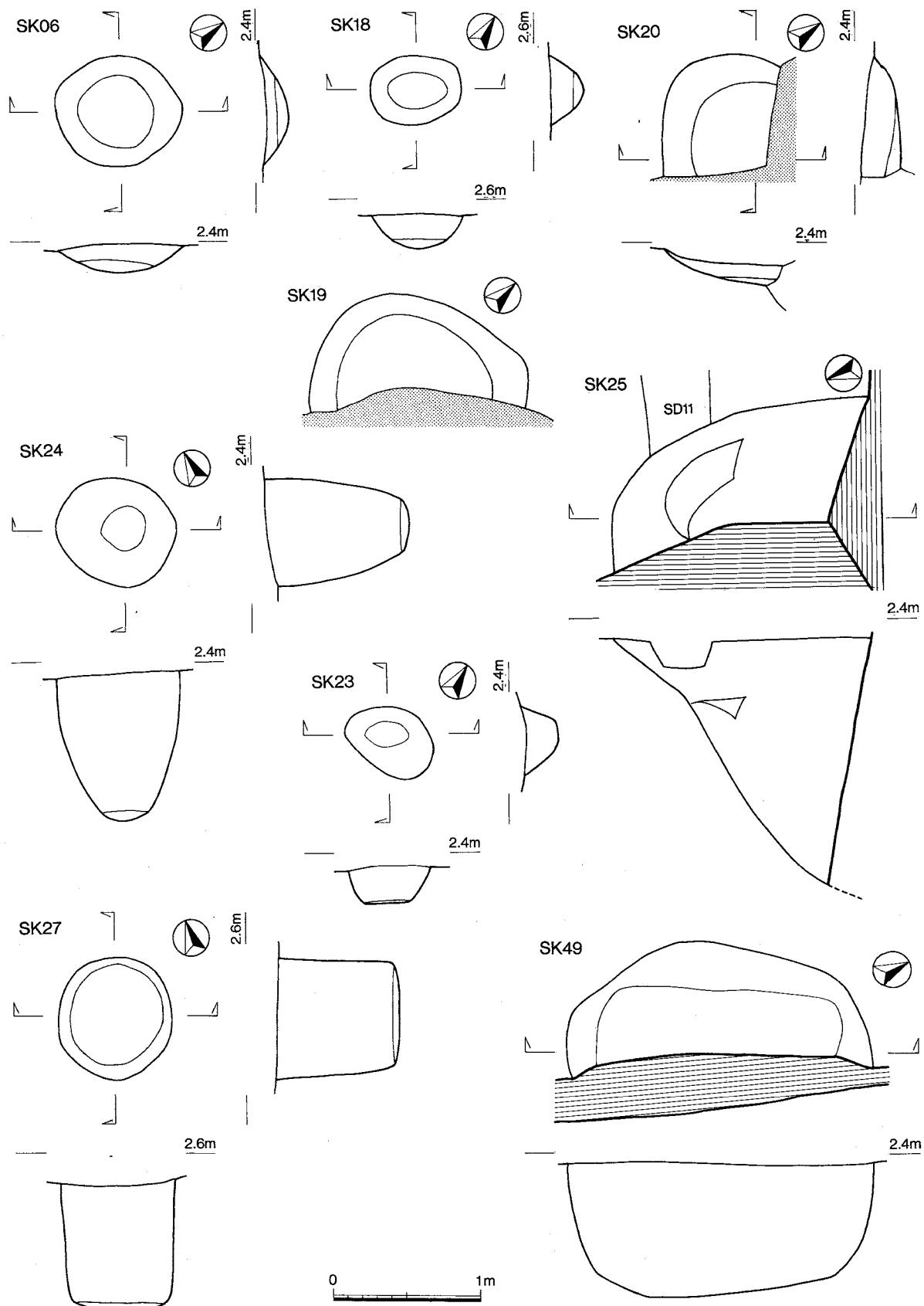


Fig. 11 近世の土坑実測図 1 (1/40)

SK49

B・C-13に位置する。東側は発掘区外に伸びるため形態は不明であるが、上端は円形、底部は長方形を呈する。残存部で、径2.1m、深さ1.0mである。覆土は上層が暗灰褐色土、下層が黒色土と黄褐色砂の互層である。SK53を切る。

最下層から洋食器の皿が出土した現代の遺構である。そのほか青磁碗、備前擂鉢、瓦質擂鉢、火鉢、土鍋、須恵質甕、土師器坏(糸切り)が出土した。また、SD11で説明した磁州窯系白地鉄絵壺の底部15が出土している。

SK59

D～F-10・11のSX64の下部で検出した楕円形土坑である。長軸3.0m、短軸2.3m、深さ0.8mである。覆土は黒色土である。SD60、SD61、SK62を切り、SD11に切られる。

青磁碗、陶器碗、陶器甕、土鍋、土師器坏が出土した。51は陶器の無頸壺である。復元口径11.0cm。口縁下に段をつけ、その下は縦方向に沈線を入れる。黒褐色の釉がかかる。52は陶器の仏花瓶か。盤口形の口縁をもつ。口径は6.6cmである。褐色の釉がかかる。53は同安窯系青磁碗II類の底部である。畳付部分を砥石代わりに使用している。

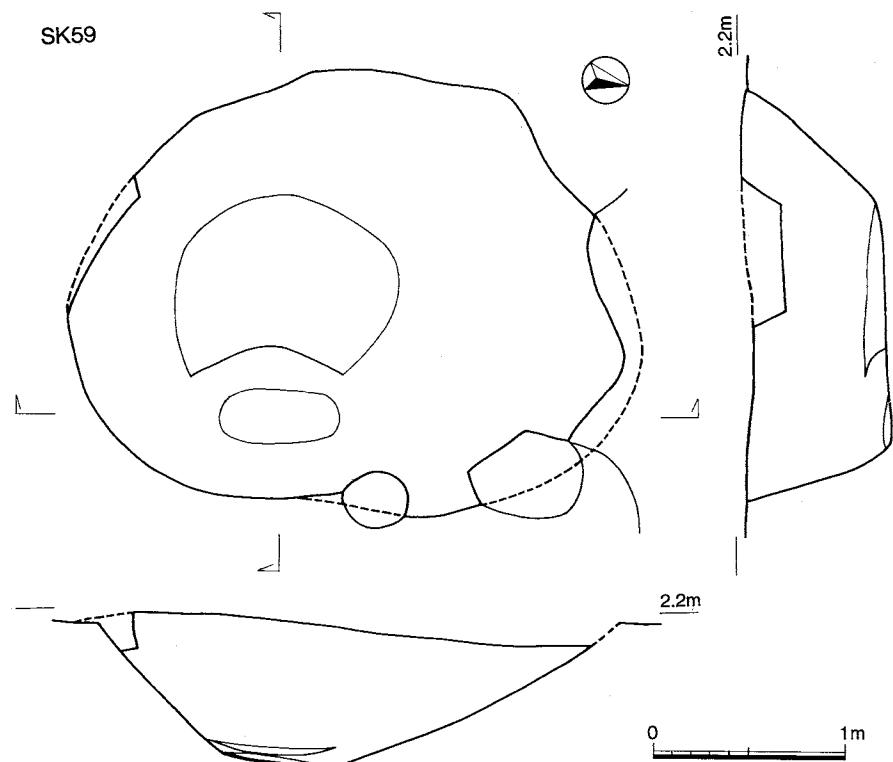


Fig. 12 近世の土坑実測図 2 (1/40)

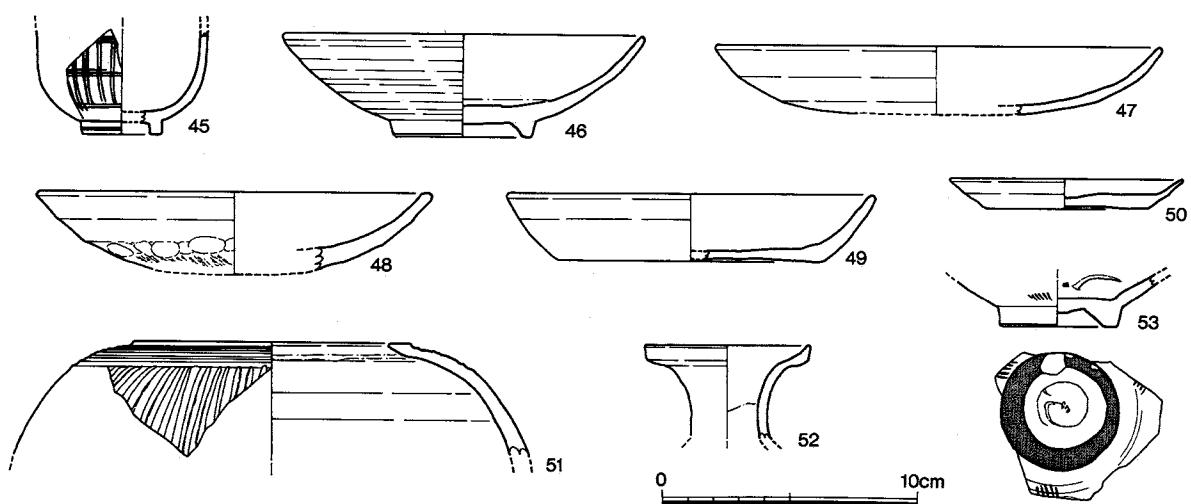


Fig. 13 近世の土坑実測図 (1/3)

(4) その他の遺構

S X 6 4

遺構検出時、D・E-5~13では、暗茶褐色の砂質土が広がった。西側の調査区では遺物包含層として、きつめに掘り下げ遺構検出を行なった。東側の調査区でははっきりとした落ち込みとみられたので、S X 6 4として遺物を取り上げた。S D 1 1、S D 1 2に切られる。

肥前染付など国産陶磁器、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、白磁碗IV類、V類、白磁平底皿、中国陶器A群



PL.9 SX64 (南から)

盤、瓦質の捏鉢・擂鉢、須恵質甕、常滑焼甕、土鍋、瓦、黒色土器、高台付壺、土師器壺（ヘラ切り・糸切り）、土師器皿（糸切り）、土錘などの多くの遺物が出土した。54~60は肥前の染付である。54は復元口径8.0cm、器高4.8cm、復元高台径3.5cmの碗で、外面に花文を描く。見込みに何か描かれているが、欠損しており不明。55は復元口径7.2cm、器高5.0cm、復元高台径3.8cmの碗である。外面に絵柄がある。「寿」の字か。56は碗で復元高台径3.6cm。外面に竹籠文を描く。見込みに銘が入るが、欠損のため不明。焼きが悪い。57は皿で、復元口径15.6cm。口縁部を輪花にする。内面上方には四方櫛文、下方はいくつかに区画し、松竹梅文を施すものと思われる。外面は唐草文を描く。58・59は広東碗。見込みに「寿」の字。高台径は58が6.5cm、59はやや小ぶりで5.4cmある。60は壺である。底径8.6cm。61~64は肥前の白磁である。61は盃で復元口径6.8cm、器高3.0cm、復元高台径2.6cmである。62は鉢で見込みの釉を蛇の目に搔き取る。復元口径13.0cm、器高4.3cm、高台径4.0cm。63は皿で内面の釉を広く搔き取る。復元口径11.0cm、器高3.1cm、復元高台径4.4cm。64は壺である。底径10.7cm。65は肥前の青白磁の鉢である。復元口径22.4cm、器高7.3cm、復元底径12.4cm。口縁端部は

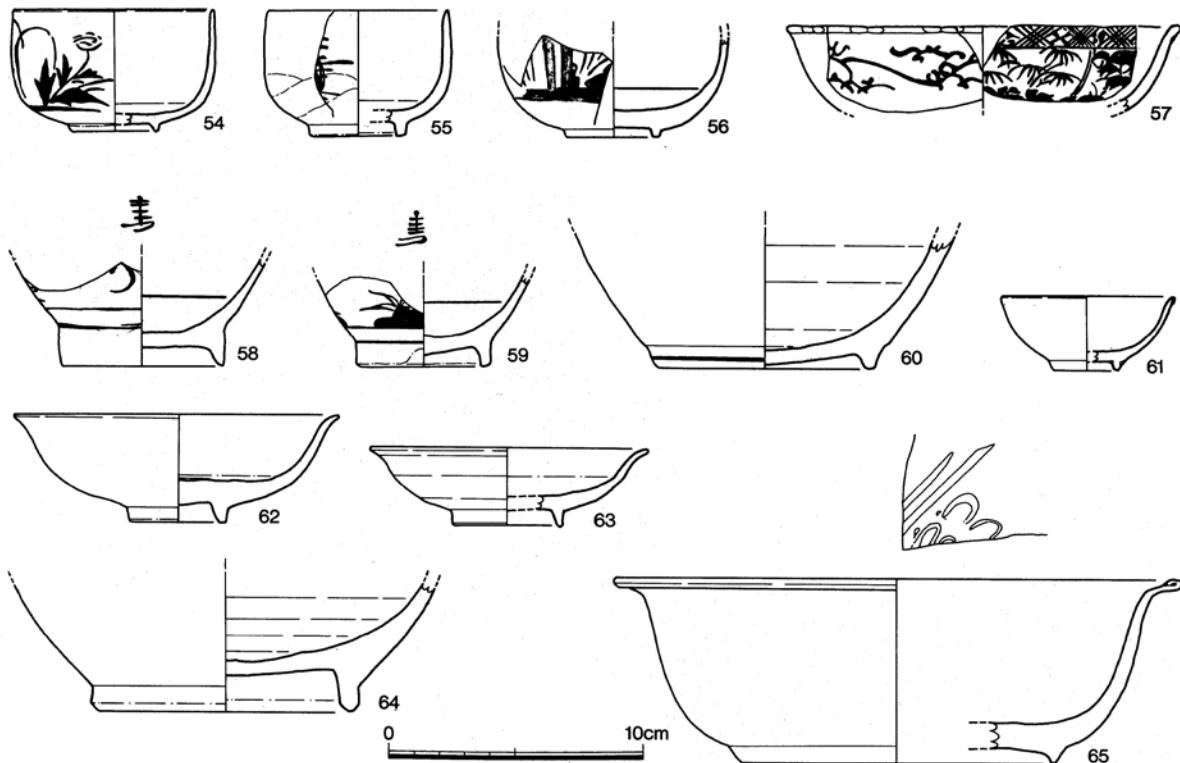


Fig. 14 SX64 出土遺物実測図 1 (1/3)

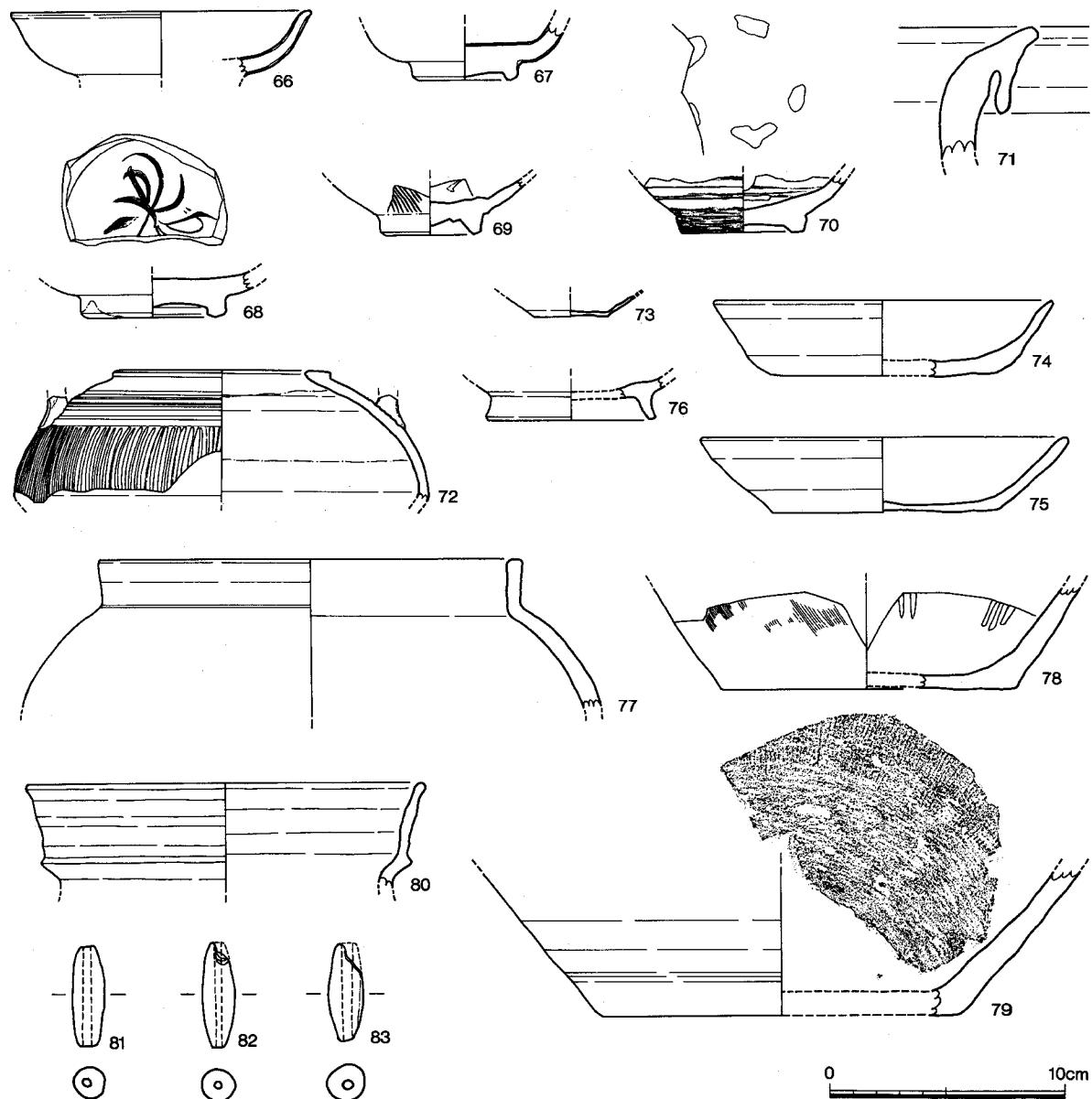


Fig. 15 SX64 出土遺物実測図 2 (1/3)

内側に巻いて丸くつくる。内底面に篦彫りで文様を描く。66～68は龍泉窯系の青磁である。66はⅢ類の小鉢である。復元口径12.8cm。67はI-9類の無文の碗で高台径4.6cmである。68はI-5類の碗で高台径6.2cm。69は同安窯系青磁碗Ⅱ類である。高台径4.4cm。70は粉青沙器の碗である。見込みに重ね焼きのための砂目が5ヶ所残る。高台径5.4cm。71は常滑の甕である。口縁部の縁帯が広く、13世紀末～14世紀前半の製品。72は施釉陶器の無頸壺で、SK59出土のものと同タイプである。耳がつく。復元口径9.6cm。73は土師器の皿である。底径3.2cmと小さく、極めて薄いつくり。底部は糸切りである。74は土師器の高台付壺である。復元高台径7.6cm。75・76は土師器の壺。底部は糸切りである。75は復元口径14.6cm、器高3.3cm、復元底径9.8cm。76は口径15.8cm、器高3.3cm、底径9.8cm。77は土師質の湯釜である。復元口径18.4cm。78・79は土師質の擂鉢である。摩滅が著しい。78は復元底径12.8cm。79は復元底径15.8cm。80は古墳時代前期の山陰系の二重口縁壺である。復元口径17.2cm。81～83は土錘である。81は長さ4.4cm、幅1.4cm、重量8g。82は長さ4.6cm、幅1.4cm、残存重量8g。83は長さ4.2cm、幅1.5cm、残存重量8g。

4. 中世の遺構と遺物

溝5条、井戸3基、土坑33基を調査した。近世遺物を含まない遺構をとりあげたが、遺物の少ない土坑の中には近世遺構が含まれているかもしれない。中世の遺構からの遺物の出土量は少ない。

(1) 溝

SD35

A～C－9に位置する南北方向の溝である。北側は発掘区外に伸び、南側は攪乱に破壊されている。2.8m確認した。幅0.5～0.7m、深さ0.3～0.4m。SK31、SK32、SC58を切る。覆土は黒褐色砂である。

陶器、高台付土師器、土師器坏（ヘラ切り）、古墳時代の土師器甕が出土した。84は高台付土師器である。高台径は7.4cm。85は古墳時代前期庄内式の甕である。復元口径14.6cm。播磨からの搬入品の可能性がある。SC58の遺物が混入したものと思われる。

SD40

D・E－7・8に位置する東西方向の溝である。両端とも攪乱で破壊され、3.5mしか確認できなかった。幅0.5m、深さ0.1mである。SE41、SD60を切る。覆土は暗茶褐色砂である。

瓦器碗、高台付土師器、その他土師器の小片が出土した。

SD45

B～D－12・13に位置する南北方向の溝である。5.5m確認し、北側は発掘区外へ伸びる。北側は幅が広く、1.8m前後、深さは0.3m、南側は狭くなっており、幅1.0m、深さ0.1m。SK48、SK53を切る。覆土は黒色土である。礫が多数廃棄されていた。

龍泉窯系青磁碗I類、白磁碗IV類、中国陶器A群盤、C群捏鉢、瓦、瓦質捏鉢、瓦質擂鉢、土鍋、瓦器碗、土錘が出土した。86は土錘である。長さ4.5cm、幅1.8cm、重量13g。

SD51

B・C－10に位置する南北方向の小溝である。2.3m確認し、北側は発掘区外へ伸びる。幅0.2～0.5m、深さ0.1m。SC58を切る。覆土は黒色土である。

陶器とSC58からの混入と思われる古墳時代の土師器甕が出土した。

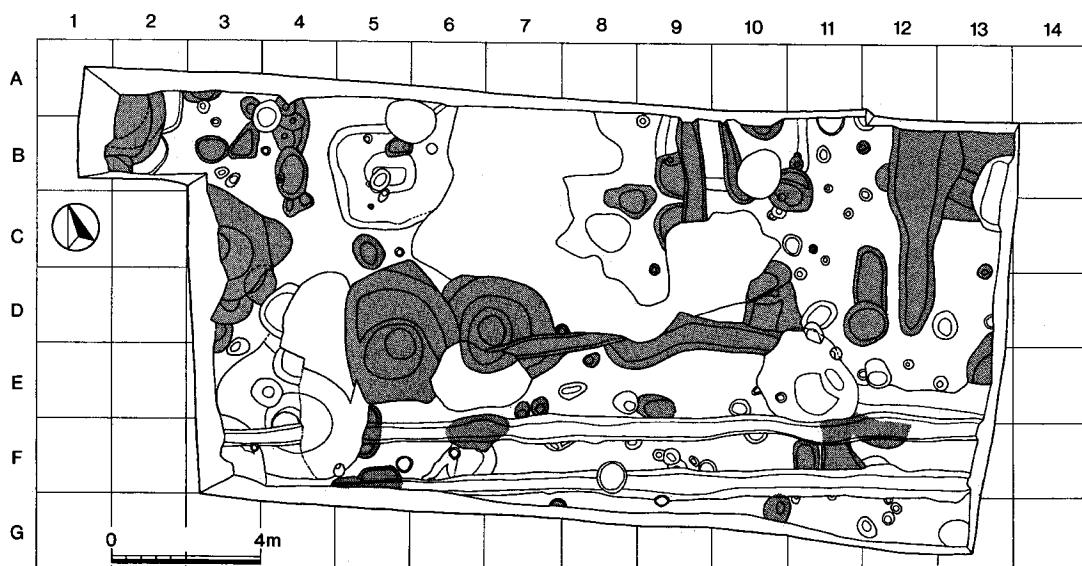


Fig. 16 中世遺構分布図 (1/200)

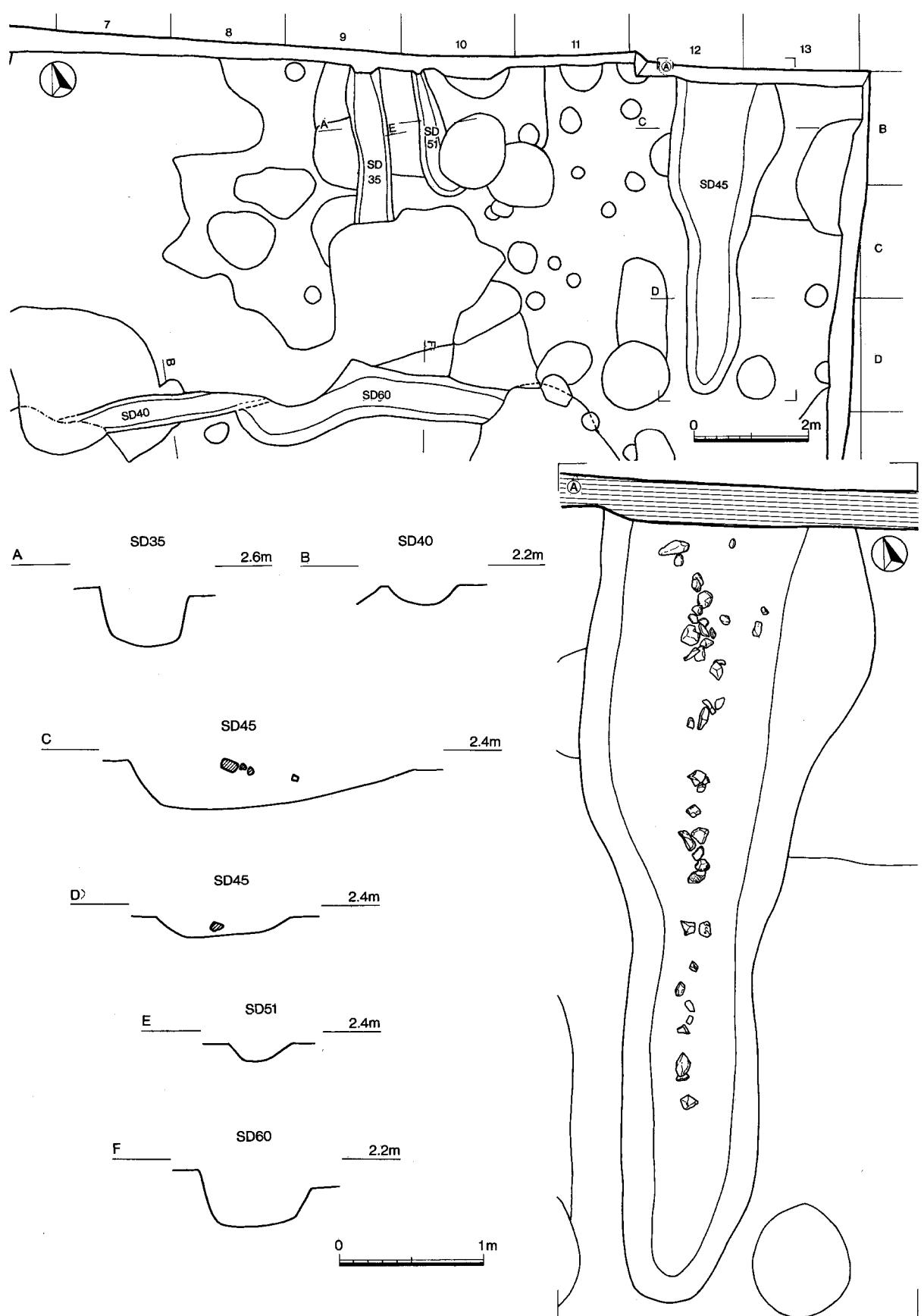


Fig. 17 中世の溝実測図 (1/100・1/40)



PL.10 SD45 (南から)

SD60

D・E-8~10に位置する東西方向の溝である。西側が少し蛇行している。西側は攪乱とSD40に切られ、東側はSK59に切られ4.6mしか確認できない。幅0.7~1.0m、深さ0.4m。SK62、SX64を切る。覆土は黒色砂質土である。

青磁、白磁、土鍋、土師器壊が出土した。

(2) 井戸

SE10

B~D-3・4で検出した。西側は調査区外に伸び、半分しか調査できなかった。掘方は径1.5m程の円形で、ところどころ外に広がる部分がある。井筒は径0.7mの円形の木桶である。SK22を切り、SK21に切られるが、判断ミスによりどちらも逆に調査してしまった。土層は1層が表土で、2~

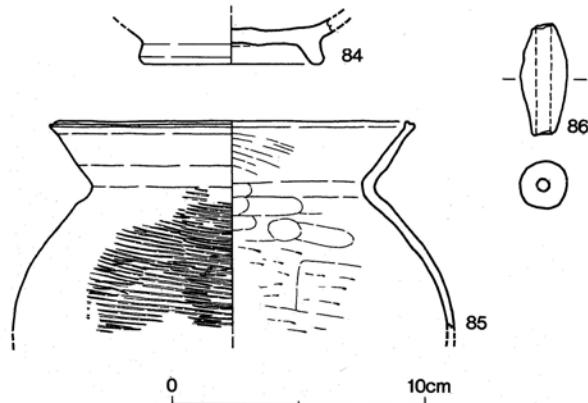


Fig.18 中世の溝出土遺物実測図 (1/3)

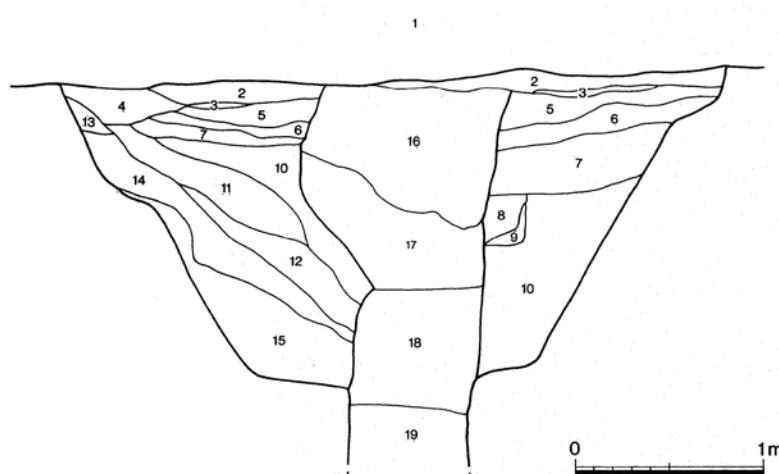
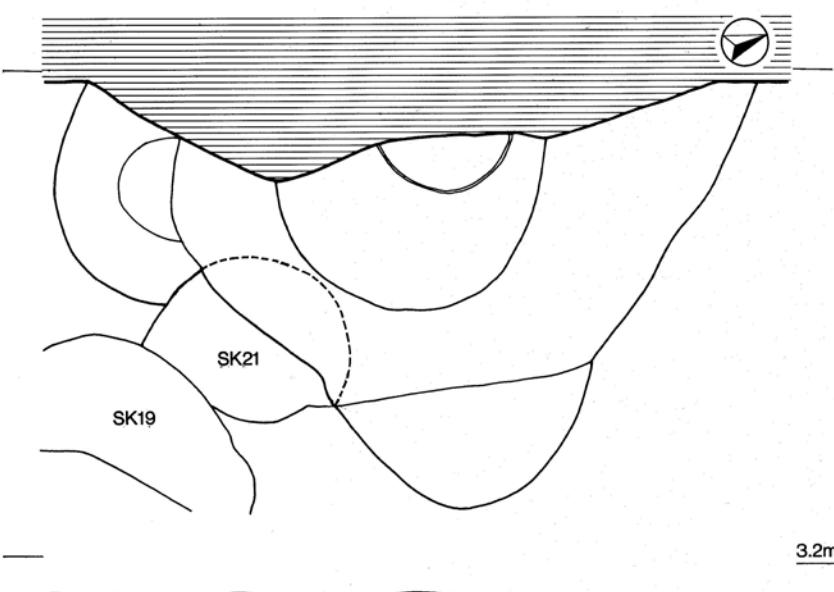
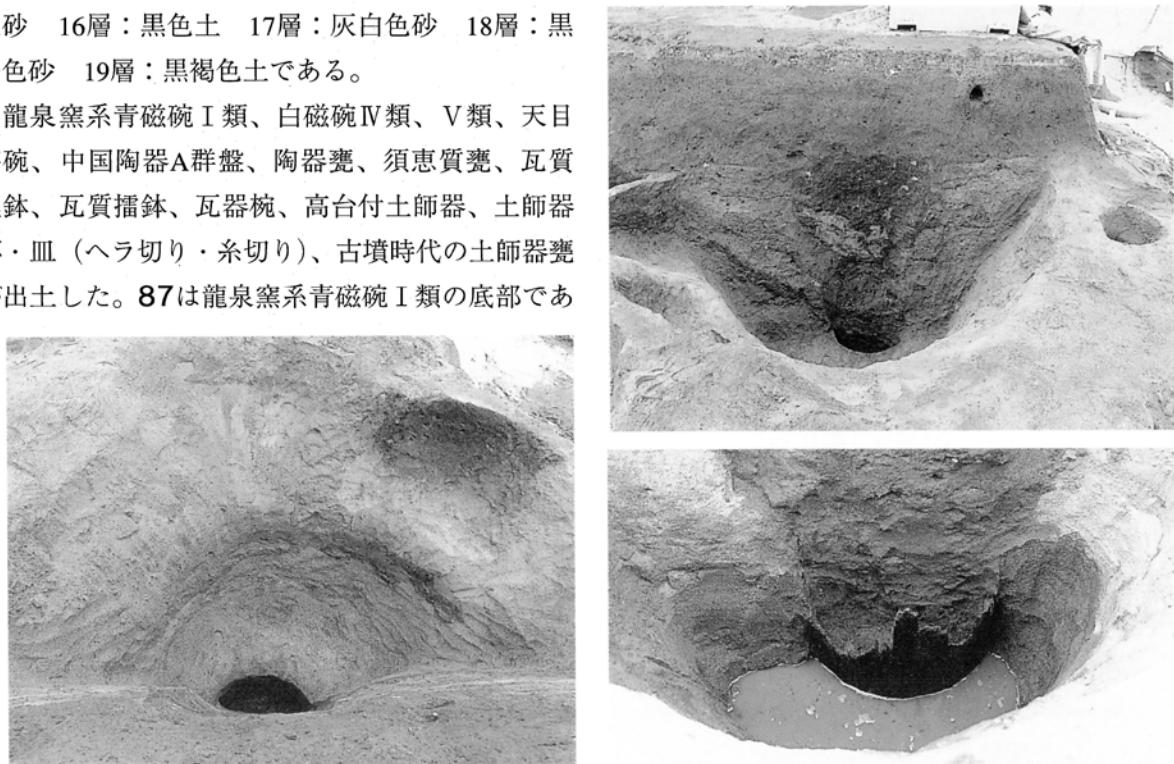


Fig.19 SE10 実測図 (1/40)

15層が掘方、16~19層が井筒である。1層：灰暗褐色土 2層：黒褐色土 3層：黄褐色砂 4層：黒褐色土 5層：黒褐色砂 6層：黄褐色砂 7層：黒褐色砂 8層：黄褐色砂 9層：黒褐色土 10層：黄褐色砂 11層：黒褐色砂 12層：黄褐色砂 13層：黄褐色砂 14層：黒褐色砂 15層：黄褐

色砂 16層：黒色土 17層：灰白色砂 18層：黒褐色砂 19層：黒褐色土である。

龍泉窯系青磁碗 I類、白磁碗IV類、V類、天目茶碗、中国陶器A群盤、陶器甕、須恵質甕、瓦質捏鉢、瓦質擂鉢、瓦器椀、高台付土師器、土師器坏・皿（ヘラ切り・糸切り）、古墳時代の土師器甕が出土した。87は龍泉窯系青磁碗 I類の底部である。



PL.11 SE10 (左：西から・右上：東から・右下：井筒 東から)

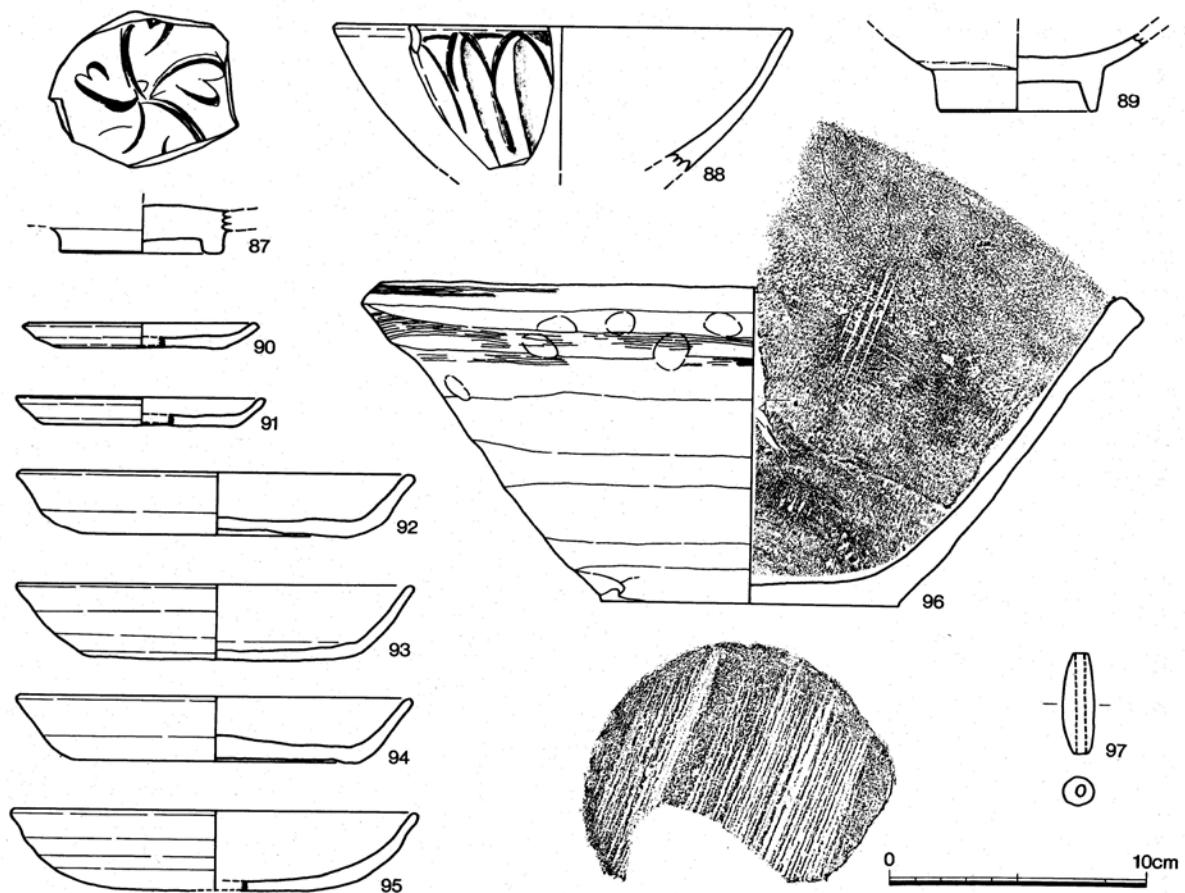


Fig.20 SE10出土遺物実測図 (1/3)

る。高台径は6.4cm。青灰色の釉がかかる。88は龍泉窯系青磁碗II-1類の口縁部である。復元口径は18.0cm。暗緑色の釉がかかる。89は白磁碗VもしくはVI類の底部である。高台径は6.2cm。灰白色の釉がかかる。90・91は土師器の皿である。底部は糸切り、板目圧痕がのこる。90は復元口径9.2cm、復元底径6.7cm、器高1.0cm。91は復元口径9.8cm、復元底径7.5cm、器高1.1cm。92~95は土師器の壊である。93が底部ヘラ切りのほかは糸切りである。92・94は板目圧痕がのこる。95は丸底にする。92は復元口径15.6cm、復元底径10.5cm、器高2.5cm。93は口径15.6cm、器高3.0cm。94は復元口径15.6cm、底径11.1cm、器高2.6cm。95は復元口径16.0cm、器高3.2cm。96は瓦質の擂鉢である。復元口径は30.8cm、底径は11.6cm、器高は12.5cmである。擂り目は6本単位の櫛状工具で間隔をあけて刻む。内面は摩耗が激しく擂り目がかなり消えている。底部には板目圧痕がつく。97は土錘である。長さ4.0cm、幅1.2cm、重量5g。

SE30

C~E-5・6に位置する。西側と東側一部が攪乱により破壊されている。掘方は4m程の円形になろう。井筒は確認できなかった。SE33に切られ、SE41を切る。土層は1層：暗褐色土 2層：黄褐色砂 3層：黒色土 4層：黄褐色砂 5層：黒褐色土 6層：黄褐色砂混じりの暗褐色土 7層：黒褐色土 8層：黄褐色砂 9層：黒褐色土 10層：黒褐色土と黄褐色砂の互層 11層：黄褐色砂 12層：黄褐色土混じりの黄褐色砂 13層：黒色土 14層：黄褐色砂である。1層はSX64へつづく近世の遺

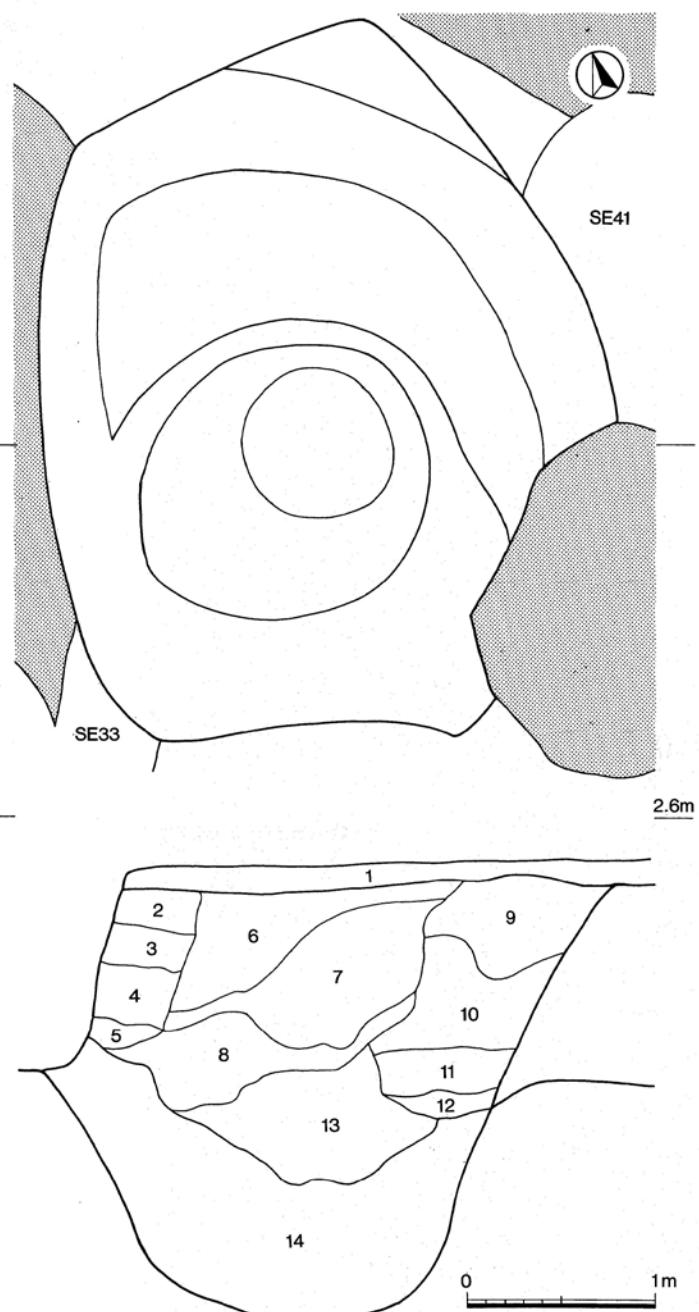


Fig.21 SE30実測図 (1/40)



PL. 12 SE30 (西から)

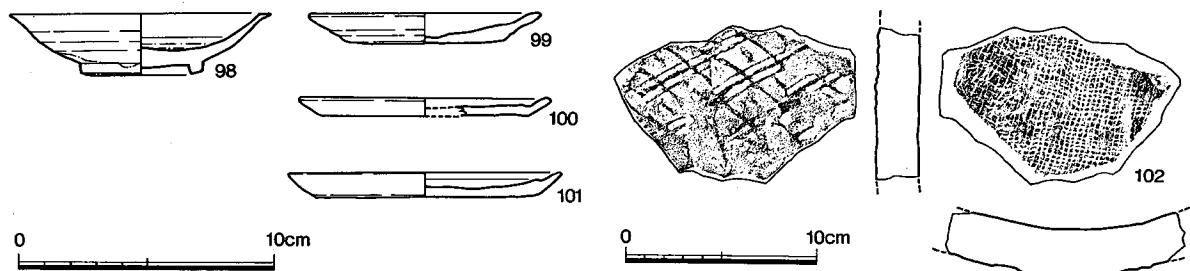


Fig.22 SE30 出土遺物実測図 (102: 1/4・他1/3)

物を含む層である。

龍泉窯系青磁碗 I 類、白磁碗 IV 類、V 類、VI 類、IX 類、中国陶器 A 群盤、瓦質捏鉢、瓦、高台付土師器、土師器坏（ヘラ切り・糸切り）が出土した。

98は白磁高台付皿 II 類である。復元口径10.2cm、高台径4.8cm、器高2.4cm。灰白色の釉がかかる見込みは釉を輪状に掻き取る。99～101は土師器の皿である。底部は99・101がヘラ切り、100が糸切りで、99・100に板目压痕が残る。99は復元口径9.2cm、器高1.3cm。100は非常に平べったいつくりで、復元口径10.0cm、復元底径8.0cm、器高0.7cm。101は復元口径10.8cm、器高1.0cm。102は古代の瓦である。布目、格子目叩き跡が残る。

SE41

D・E-6～8に位置する。北側と南側が攪乱により大きく破壊されている。SE30、SD40に切られる。径3.5m程の円形の掘方に、径0.7mの円形の木桶を井筒に据える。木桶は南側の残りが悪かった。

青磁碗、白磁碗 IV 類、V 類、IX 類、白磁高台付皿 I - 2 類、中国陶器 C 群捏鉢、黒色土器、高台付土師器、土師器坏（糸切り・ヘラ切り）、土師器皿（糸切り）が出土した。103は白磁碗 IX 類である。復元口径16.0cm、高台径7.0cm、器高5.9cm。少し黄色味がかった灰白色の釉がかかる。見込みは釉を輪状に掻き取る。104は白磁碗 IV 類の底部である。高台径6.8cm。暗灰白色の釉がかかる。105は青白磁合子身である。井筒内から完存で出土した。径6.5cm、器高2.1cm。青白色の釉を外面上半にかける。106～111は土師器の皿である。すべて底部は糸切りで、底部の残存が悪い110以外は板目压痕が確認できる。111は他と異なり、厚手のつくりで

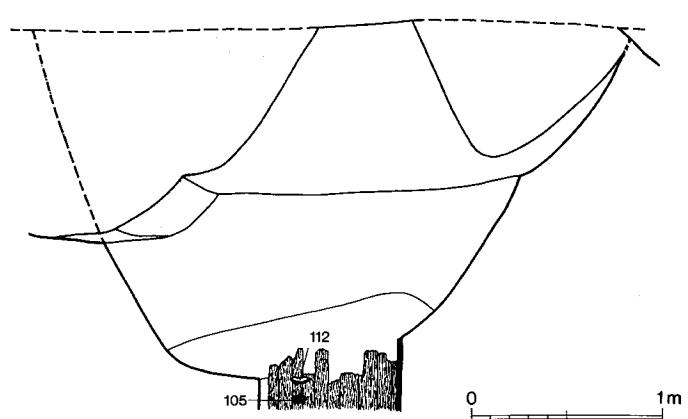
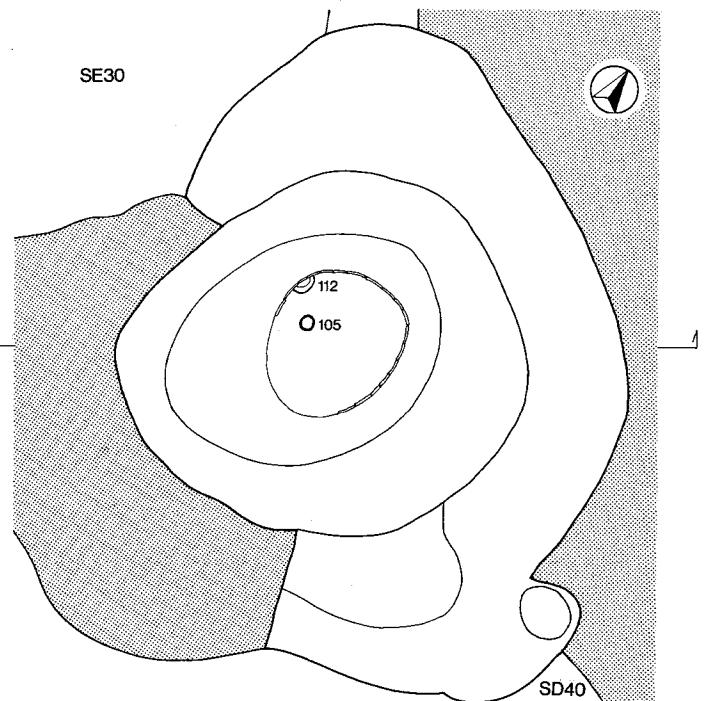
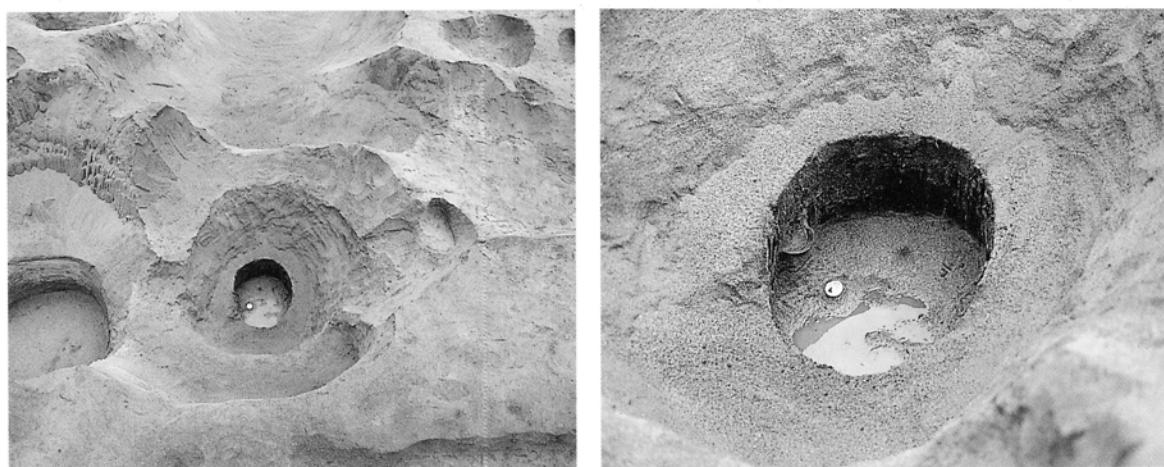


Fig.23 SE41 実測図 (1/40)

白っぽい。106は復元口径9.0cm、復元底径6.6cm、器高1.1cm。107は復元口径9.0cm、復元底径7.0cm、器高1.0cm。108は復元口径9.4cm、復元底径8.0cm、器高1.1cm。109は復元口径9.4cm、復元底径7.8cm、器高1.0cm。110は復元口径9.4cm、復元底径7.4cm、器高1.3cm。111は復元口径9.4cm、復元底径7.0cm、器高1.2cm。112は土師器の坏で底部はヘラ切りで板目压痕がつく。口径16.0cm、器高3.0cm。113はガラス玉で半分を欠損している。径は1.5cm。中央に片側より穿孔している。深青色から暗青白色を呈し、表面に氷列がみられる。側面に残存部分だけで3列7ヶ所の小さな窪みがある。



PL.13 SE41 (左：南から・右：井筒 南から)

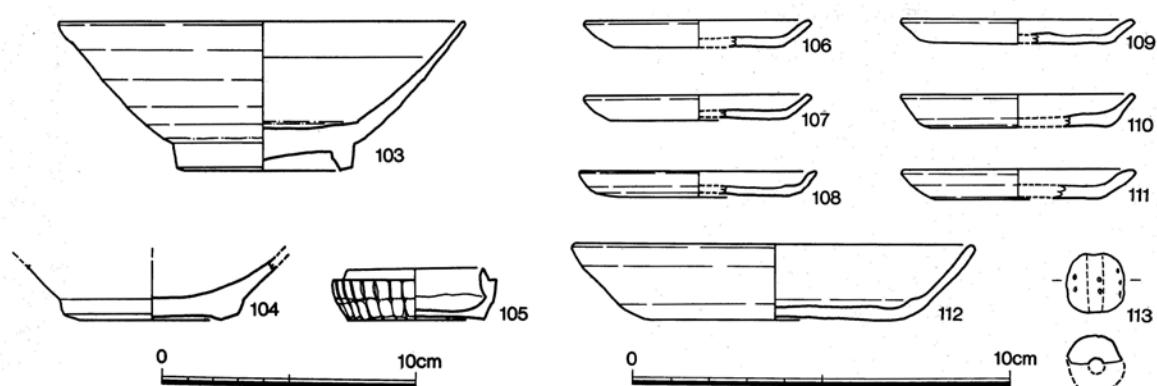
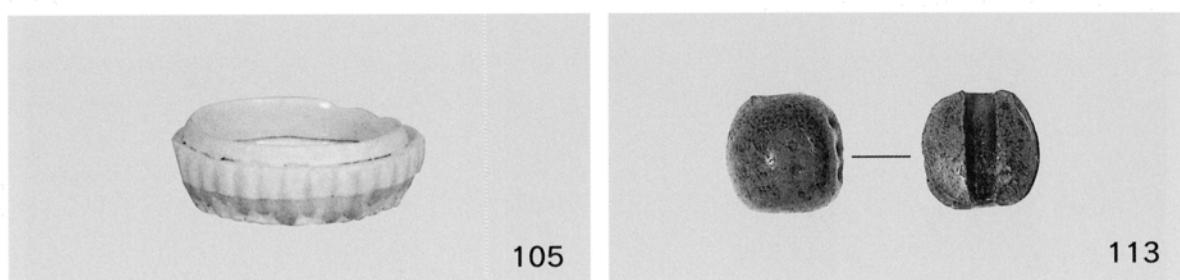


Fig.24 SE41 出土遺物実測図 (113: 1/2・他: 1/3)



PL.14 SE41 出土遺物 (105: 約1/2・113: 約1/1)

(3) 土坑

SKO 1

B-1・2に位置する。発掘区の隅で形態は不明だが、円形か楕円形の土坑である。底部まで達せず、深さは不明。SKO 3を切る。覆土は黒色土混じりの黄褐色砂である。

白磁碗、土師器皿、石製品、古墳時代の土師器甕が出土した。114は白磁碗の底部である。復元高台径6.0cm。灰白色の釉がかかる。115は滑石製の石製品である。2ヶ所に穿孔があり、上端部に擦れた痕跡がある。黒斑があるので石鍋の転用品であると思われる。

SKO 2・03

A・B-1・2に位置する。2つの遺構を同時に掘り下げてしまった。発掘区壁の土層の観察から北側のSKO 2の方が新しいことがわかった。SKO 3はSKO 1に切られる。SKO 2は深さ0.4m。覆土は黄褐色砂混じりの暗褐色土。SKO 3の覆土は黒色土混じりの黄褐色砂。

青磁皿、白磁碗IV類、IX類、瓦器椀、高台付坏、土師器坏（ヘラ切り）、土師器皿（糸切り）、古墳時代土師器甕、飯蛸壺が出土した。116は瓦器椀の底部で、高台内側に十字を刻む。高台径6.2cm。117は湯釜である。復元口径15.6cm。

SKO 4

A-2・3に位置し、北側は発掘区外へ伸びる。深さ0.2m。覆土は黄褐色砂混じりの暗褐色土。

土師器の小片が1点出土したのみである。

SKO 5

B-3で検出された楕円形土坑である。長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.1m。覆土は黒色土の混じりが多い黄褐色砂である。SKO 7に切られる。

出土遺物はない。

SKO 7

B-3に位置する平面三角形の土坑である。長辺は1.1m、深さは0.2m。覆土は黒色土である。SKO 5を切り、SKO 6に切られる。

青磁の破片が1点出土したのみである。



PL.15 SKO1・02・03 (東から)

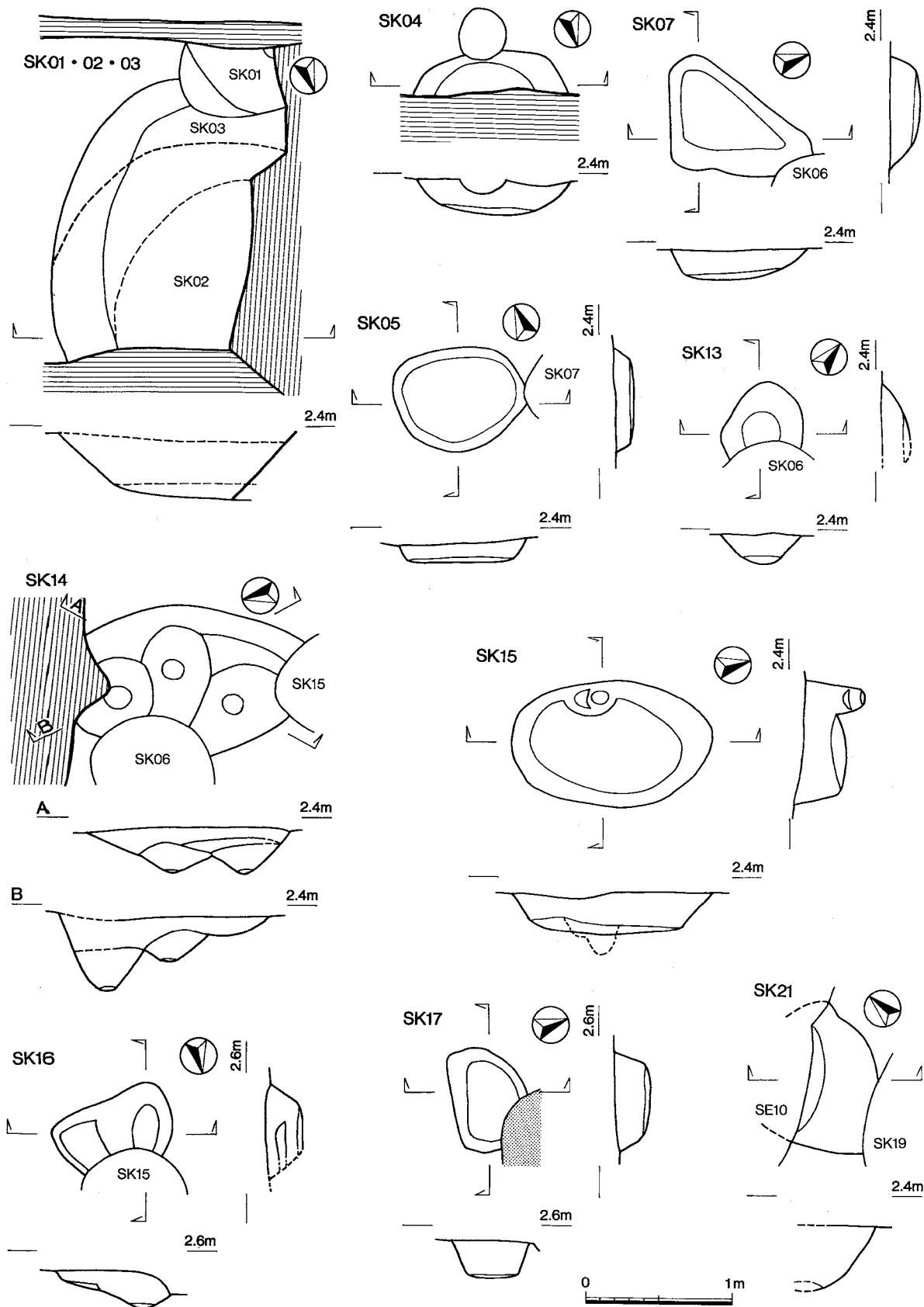


Fig.25 中世の土坑実測図 1 (1/40)

S K 1 3

A・B-3に位置する楕円形の土坑である。長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.2m。S K 0 6に切られる。出土遺物は少ない。118は道具瓦と思われる破片である。径1.6cmの穴があいている。そのほか中世の土師器と思われる破片が少量出土した。

S K 1 4

A・B-4に位置する楕円形土坑である。3つのピットの集合のような形態である。北側は発掘区外に伸びる。長軸は1.5m残存しており、1.7mぐらいに復元できる。短軸1.0m、深さ0.5m。S K 0 6、S K 1 5に切られる。覆土は部分的に黒色土が混じる暗黄褐色砂である。

出土遺物はない。

S K 1 5

B・C-4に位置する楕円形土坑である。長軸1.4m、短軸0.9m、深さ0.3mで、西側にピット状の窪みがあり、深さは0.4mである。S K 1 4、S K 1 6を切る。覆土は黒褐色土である。

瓦器椀、高台付坏、土師器坏（糸切り）、古墳時代の土師器甕が出土した。

S K 1 6

C-4で検出した土坑である。長軸0.8m、短軸0.5m、深さ0.2m。東側にテラスがある。S K 1 5に切られる。

土師器の小さな破片が少量出土したのみである。

S K 1 7

B-5・6に位置する楕円形土坑である。長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.2m。S C 3 6を切り、現代の井戸に切られる。

中国産陶器、高台付坏のほか、重複している古墳時代の堅穴住居S C 3 6からの混入と思われる古墳時代の土器が多く出土した。

S K 2 1

D-3・4に位置する土坑である。S E 1 0を切り、S K 1 9に切られる。S E 1 0との切り合いがはつきりしないまま掘り下げてしまい、平面形が押さえられなかった。深さ0.4m。覆土は黒色土である。

白磁碗IV類、V類、瓦器椀、高台付椀、土師器坏、皿（ヘラ切り）、土師器坏（ヘラ切り・糸切り）が出土した。119は筑前型瓦器椀である。復元口径16.8cm、復元高台径6.8cm、器高5.3cm。粗いヘラ磨きを内外面に施す。120は土師器の皿で口径8.6cm、底径6.4cm、器高1.4cm。完形である。底部は糸切りで板目圧痕がつく。121・122は土師器の坏で底部はヘラ切りである。122には板目圧痕が残る。121は復元口径15.6cm、器高3.1cm以上。

S K 2 2

D・E-3に位置する。西側は発掘区外に伸びる。深さ0.5m。S E 1 0に切られる。覆土は黒色土である。

白磁碗、陶器、瓦質鉢、瓦器椀、土師器坏（糸切り）が出土した。

S K 2 6

F-5に位置する楕円形土坑である。長軸1.1m、深さ0.1m。S D 1 2に切られる。覆土は黒色土である。

土師器皿（ヘラ切り）、古墳時代の土師器甕が出土した。

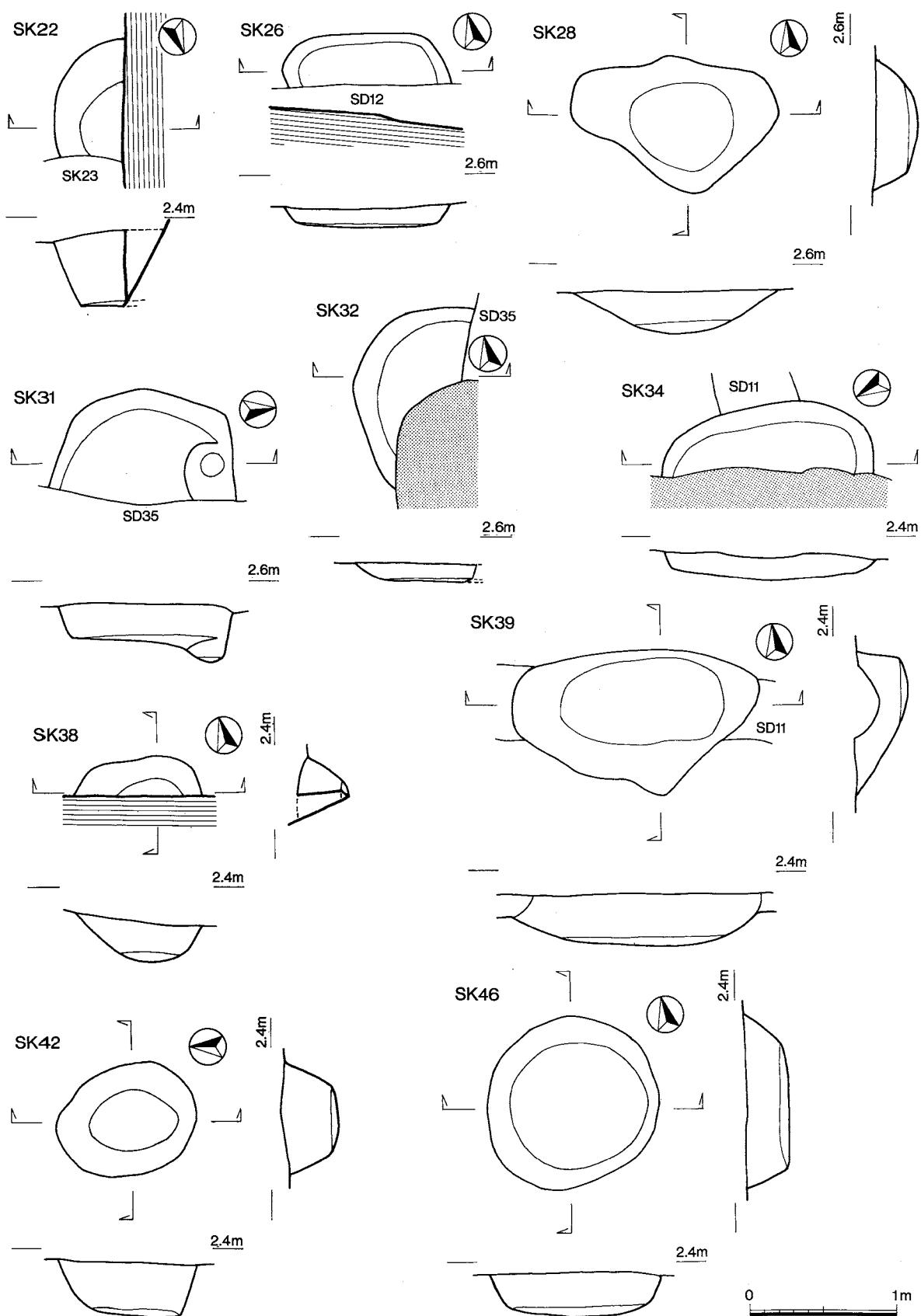


Fig.26 中世の土坑実測図 2 (1/40)

SK28

B・C-8・9に位置する不定形土坑である。長軸1.4m、短軸0.9m、深さ0.3m。覆土は褐色の砂質土である。

須恵質甕、高台付土師器、土師器坏（糸切り）、古墳時代の土師器甕が出土した。

SK31

B・C-9で検出した土坑で、SC58を切り、SD35に切られる。径は1.2m、深さは0.3mで、北側一部がピット状になり、0.4m。覆土は黄白色粘土ブロックを含む黒色土である。

陶器甕、瓦器椀、土師器坏・皿、古墳時代の土師器甕が出土した。123は古墳時代前期の甕である。SC58からの混入であろう。

SK32

C-9に位置する。南側は攪乱で破壊され、東側はSD35に切られる。深さは0.1m。覆土はSK31と同じく、黄白色粘土ブロックを含む黒色土である。

須恵質甕、土師器皿が出土した。

SK34

E・F-5に位置する楕円形土坑である。長軸1.4m、深さ0.2m。SD11、SE33に切られる。
出土遺物はない。

SK38

F-4・5に位置する楕円形土坑である。南側は発掘区外に伸びる。長軸0.9m、深さ0.3m。覆土は黒褐色の砂である。SD12に切られる。

土師器の破片が少量出土した。

SK39

E・F-6・7に位置する楕円形土坑である。長軸1.7m、短軸1.0m、深さ0.4m。覆土は黒色土である。SD11に切られる。

龍泉窯系青磁碗、白磁碗IV類、須恵質甕、古墳時代の土師器甕、飯蛸壺が出土した。

SK42

C-5で検出した楕円形土坑である。長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.4m。覆土は黒褐色の砂である。
高台付坏、土師器坏が出土した。

SK46

D-11・12で検出した径1.2m、深さ0.3mの円形土坑である。覆土は暗褐色砂質土である。SK47を切る。

土師器坏（糸切り）が出土した。

SK47

C・D-11・12に位置する楕円形土坑である。長軸は1.8m残存。短軸0.9m、深さ0.1m。覆土は黒色土粒混じりの暗黄褐色砂である。SK46に切られる。

出土遺物はない。

SK48

B-12で検出した。SD45に切られており、深さ不明。残存径0.8m。覆土は黒色土である。
出土遺物はない。

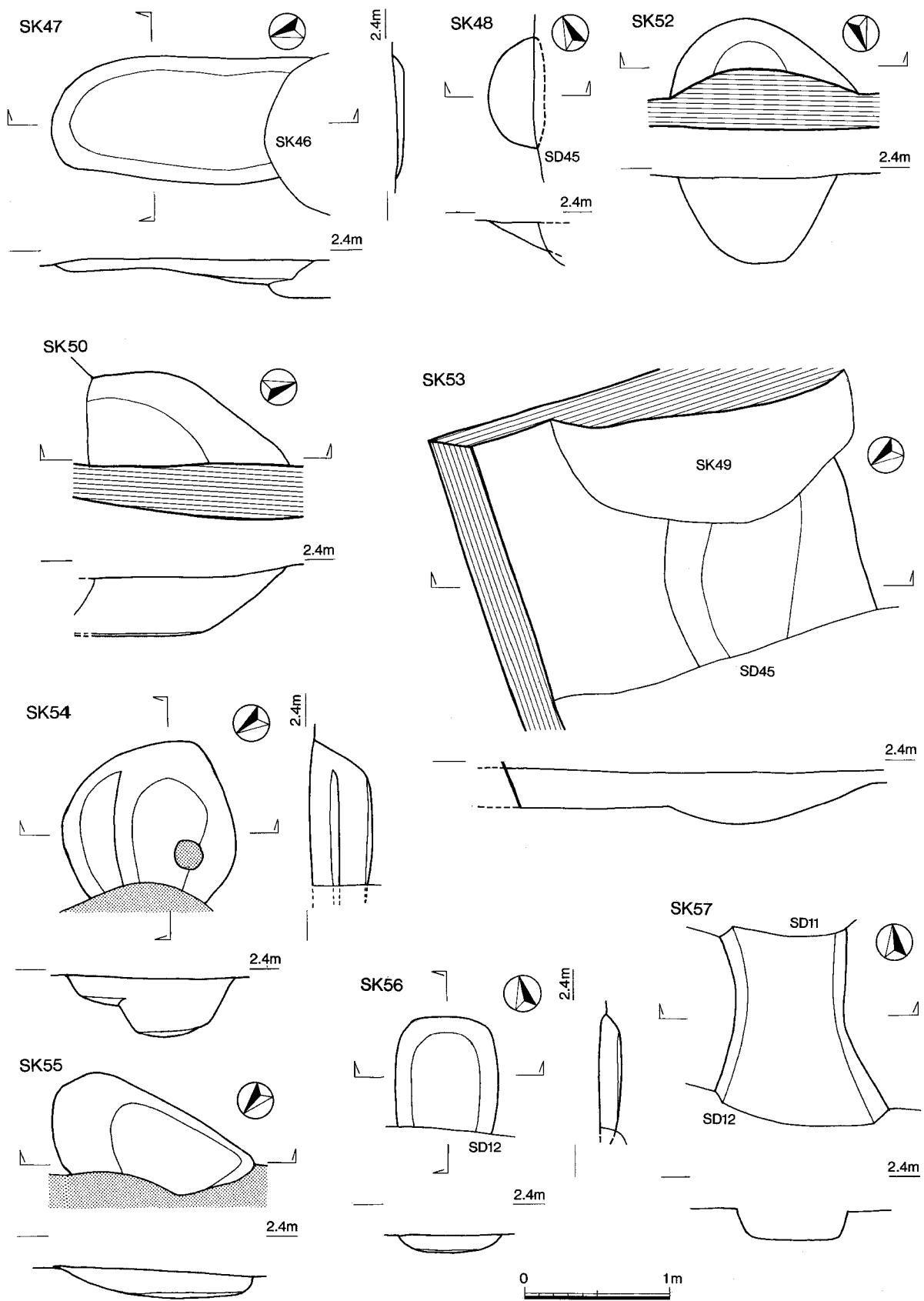


Fig.27 中世の土坑実測図 3 (1/40)

SK50

D・E-13に位置する。東側は発掘区外に伸びる。SD61に切られる。覆土は黒色土である。深さ0.5m。

高台付土師器、土師器壺が出土した。

SK52

A・B-10に位置する。北側は発掘区外に伸びる。深さ0.6m。覆土は黒色土である。SC58を切る。

白磁碗IV類、須恵質甕、瓦、瓦器椀、高台付土師器、土師器皿が出土した。

SK53

B・C-13に位置する。北側、東側は発掘区外に伸び、西側はSD45に切られる。さらにSK49に切られ、形態不明。深さは北側が0.3m、南側は少し深く0.4mである。覆土は暗褐色砂質土。

出土遺物はない。

SK54

B・C-11・12で検出した径1.2m、深さ0.4mの円形土坑である。北側にテラスがある。覆土は暗褐色土である。SC58を切り、現代の井戸に切られる。

白磁碗、瓦、高台付壺、土師器皿（糸切り）と重複する古墳時代の竪穴住居SC58からの混入である古墳時代の土師器甕が出土した。**124**は土師器の皿である。底部は糸切りで板目圧痕がつく。復元口径9.0cm、復元底径6.8cm、器高1.0cm。

SK55

C・D-10・11に位置する楕円形土坑。SX64の下で検出した。西側は攪乱を受ける。長軸1.4m、深さ0.2m。覆土は黒色土。SK62を切る。

土師器の壺・皿（糸切り）が出土した。

SK56

F-11に位置する楕円形土坑。SX64の下で検出した。残存長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.1m。覆土は黒色土。SD12に切られる。

遺物は出土しなかった。

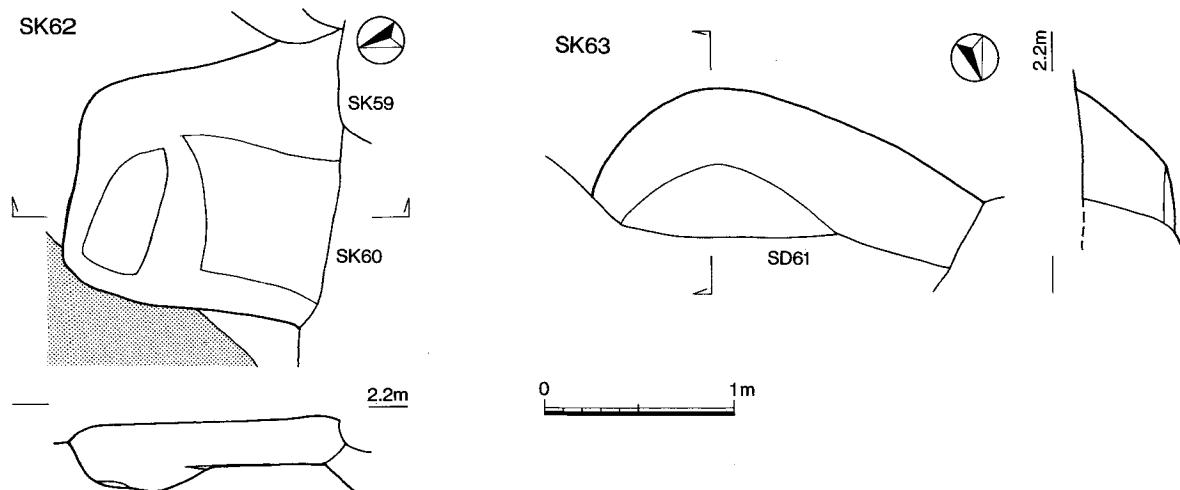


Fig.28 中世の土坑実測図 4 (1/40)

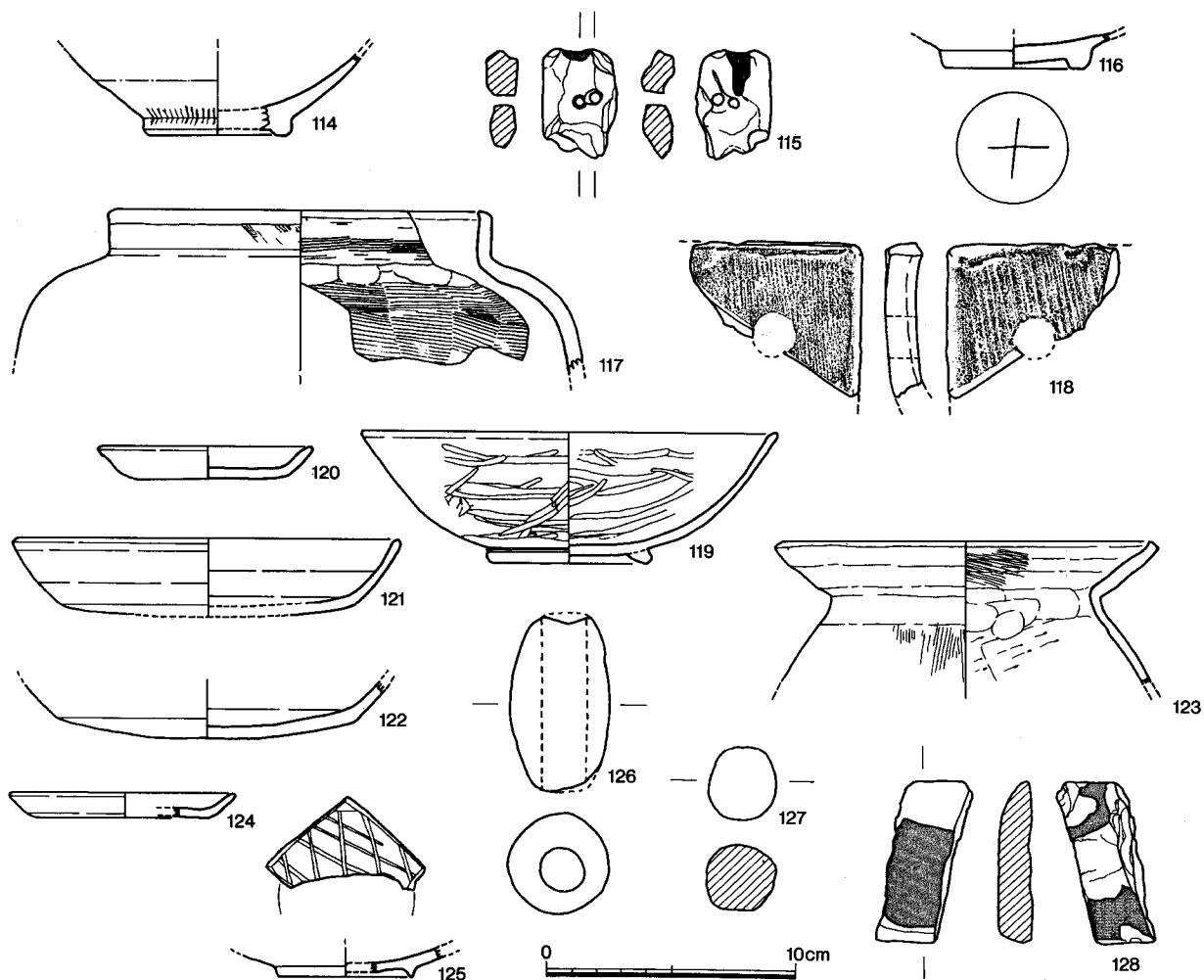


Fig.29 中世の土坑出土遺物実測図 (1/3)

SK 5 7

F-11に位置する土坑である。SX 6 4の下で検出した。深さ0.2m。覆土は黒色土。SD 1 1、SD 1 2に切られる。

瓦器椀と土師器片が少量出土した。

SK 6 2

D-10・11に位置する土坑である。SX 6 4の下で検出した。残存長軸1.4m、短軸1.5m、深さ0.4m。南側にテラスがある。覆土は黒色土である。SK 5 5とSD 6 0に切られる。

陶器、瓦器椀、土鍋、高台付土師器、土師器坏（糸切り・ヘラ切り）、土錐が出土した。125は和泉型瓦器椀である。高台は筑前型に比べ非常に小さく細い。格子目のミガキが内面に施されている。復元高台径5.4cm。126は土錐である。長さ7.1cm、幅4.0cm、重量91g。

SK 6 3

E・F-11・12に位置する。SX 6 4の下で検出した。SD 1 1、SK 5 9、SD 6 1に切られ、規模不明。深さ0.5m。覆土は黒色土である。

出土遺物は多くない。127は石球である。砂岩を細かく敲打して球形に形を整えている。径2.6~3.0cm。重量24g。128は砂岩製の砥石。両面に磨面がある。そのほか土師器片が少量出土した。

5. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、前期の竪穴住居2軒、土坑3基がある。遺構の覆土は地山砂が若干黒っぽくなつた程度で、遺構の壁がわかりづらく、少し掘りすぎている部分もあると思われる。竪穴住居から出土した土器群は良好なセット関係を示し、数多く出土した飯蛸壺は当時の生業の一端を示している。

出土土器の観察表は遺構ごとにまとめた。器種の他に技法的な系統で分類している。V様式系とは庄内式以降の伝統的V様式系のこと、庄内系・布留系とは畿内周辺以外で受容された形態のものであり、畿内周辺の庄内式・布留式とよく似ているが同一のものでなく、独自の変化をする。また、精製器種B群とは庄内式から布留式の特殊な精製器種の一群の土器を指す。飯蛸壺については遺構ごとでなく、すべてをまとめて計測表を作成した。

(1) 竪穴住居

SC36

A～C－4～6に位置する。南北2.8m、東西3.1m以上の規模を持つ方形竪穴住居である。残存壁高は0.2mである。東側は攪乱を受けており、壁は残っていない。また、北壁の一部は現代の井戸で破壊されている。SK17、SK18が一部掘り込んでいる。北東部分が張り出したようになっているが、砂地のため壁が壊れたのか、もしくはもう1軒の住居が切り合っていたのかもしれない。住居中央部に東西1.4m、南北1.1m、深さ0.7mの隅丸方形の土坑がある。この土坑の南東際と、住居の南東部にピットがあるが、規模から柱穴とは考えられない。

出土遺物は甕、壺、高坏、鉢、器台、飯蛸壺、石錘などがある。遺存度の良い遺物は中央部にまとまって出土した。また、屋内の土坑からは飯蛸壺と石錘が出土した。129～144は甕である。129は在来系の大型甕の破片である。外側に刻み目をつけた突帯を貼り付ける。130・131も在来系の甕。132～135は伝統的V様式系の甕。136・137は庄内系の甕。138は畿内からの搬入品と思われる布留式土器の甕である。139～144は布留系の甕。142はきつく外反する口縁部や頸部の強いなで付け、肩部の列点文と極端ななで肩、胎土の特徴などから中部～西部の瀬戸内産の可能性がある。145～147は高坏で、145・146は布留系、147は在来系の高坏である。148は在来系の小型の壺である。149・150は鉢で、149は伝統的V様式系、150は精製器種B群である。151～153は器台で、151

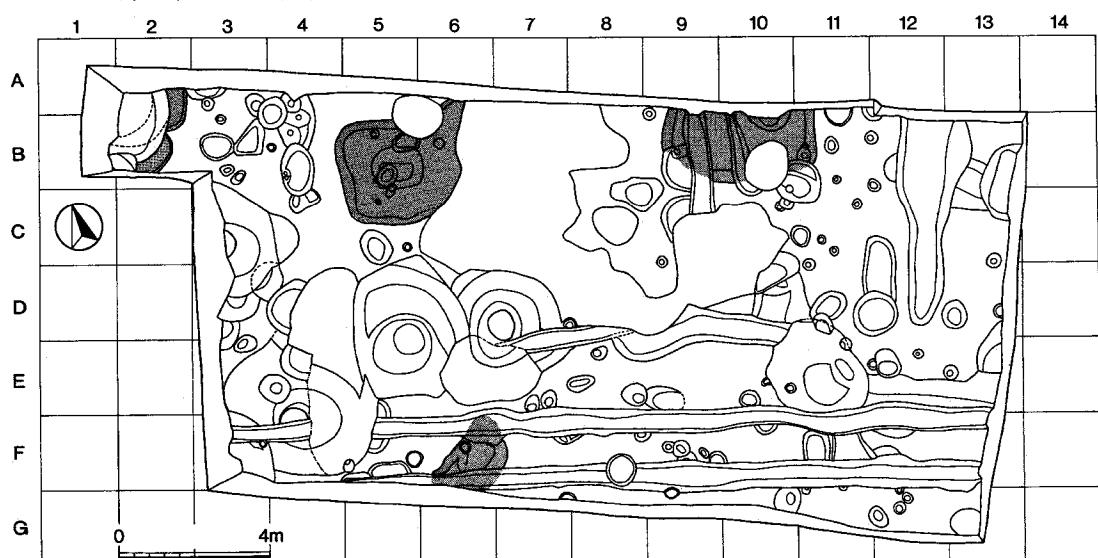


Fig.30 古墳時代遺構分布図 (1/200)

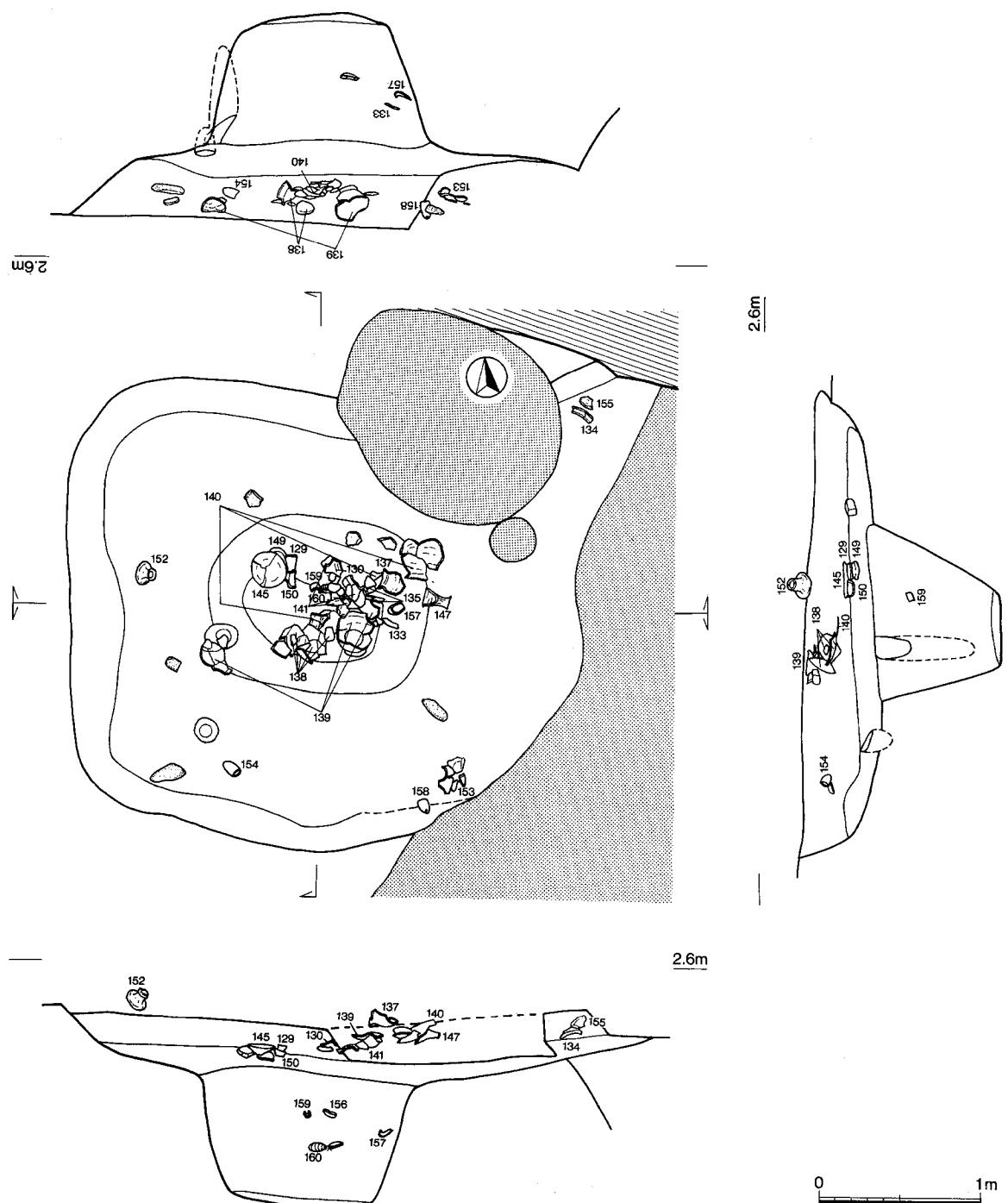
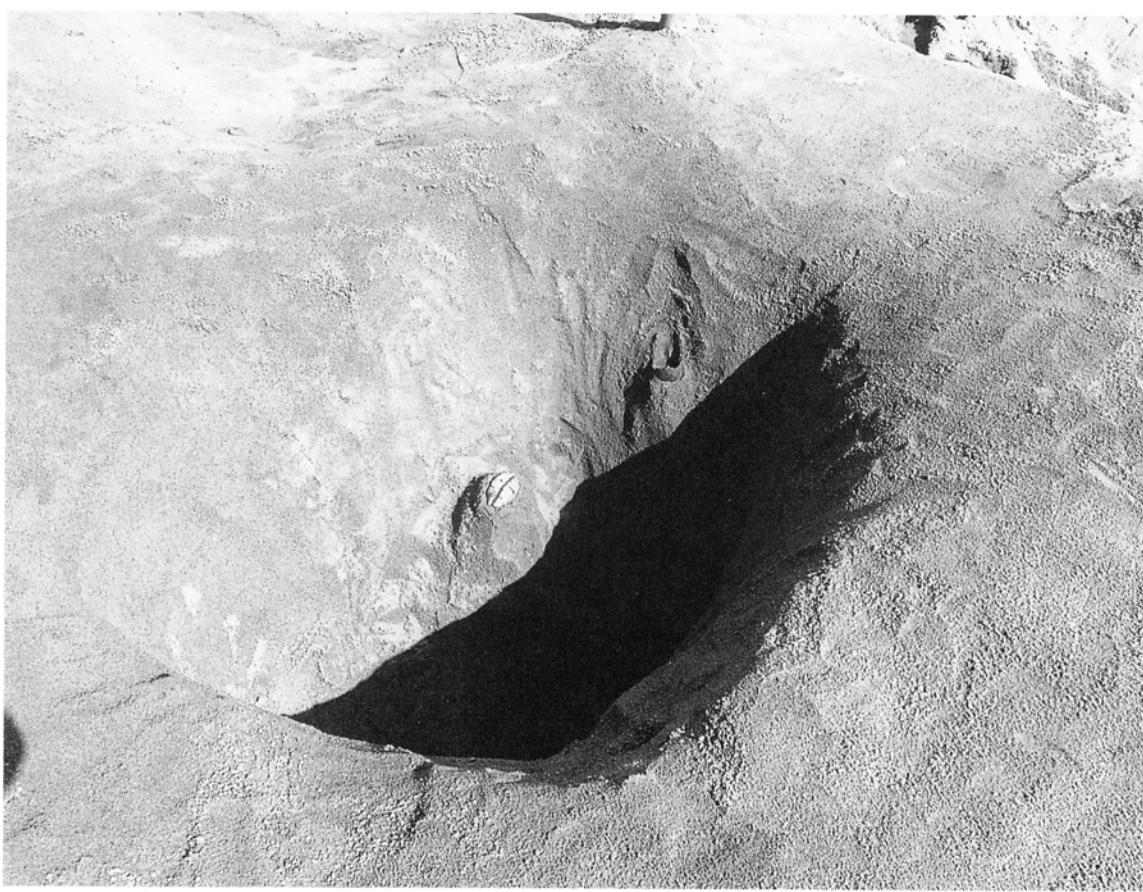


Fig.31 SC36実測図 (1/40)

は畿内系の小型器台、152は在来系の器台、153は山陰系の鼓形器台である。154～159は飯蛸壺である。底部の穿孔の有無で2タイプにわけられる。154は飯蛸壺の特徴である口縁下の孔が無く、コップ形土製品とした方が良いのかもしれない。155・156は底部に穿孔が無いタイプ、157・158は底部に穿孔があるタイプである。159は破片のため底部の穿孔の有無が不明である。160は滑石製の石錘である。長軸に深さ4～5mmの1条の溝、短軸に深さ1.5～2mmの5条の溝をめぐらす。西区今宿五郎江遺跡2次調査で同タイプのものが出土している。長さ10.8cm、幅5.6cm、厚さ4.2cm、重量352g。



PL.16 SC36 1 (上：北から・下：南から)



PL.17 SC36 2 (上：北から・下：屋内土坑 西から)

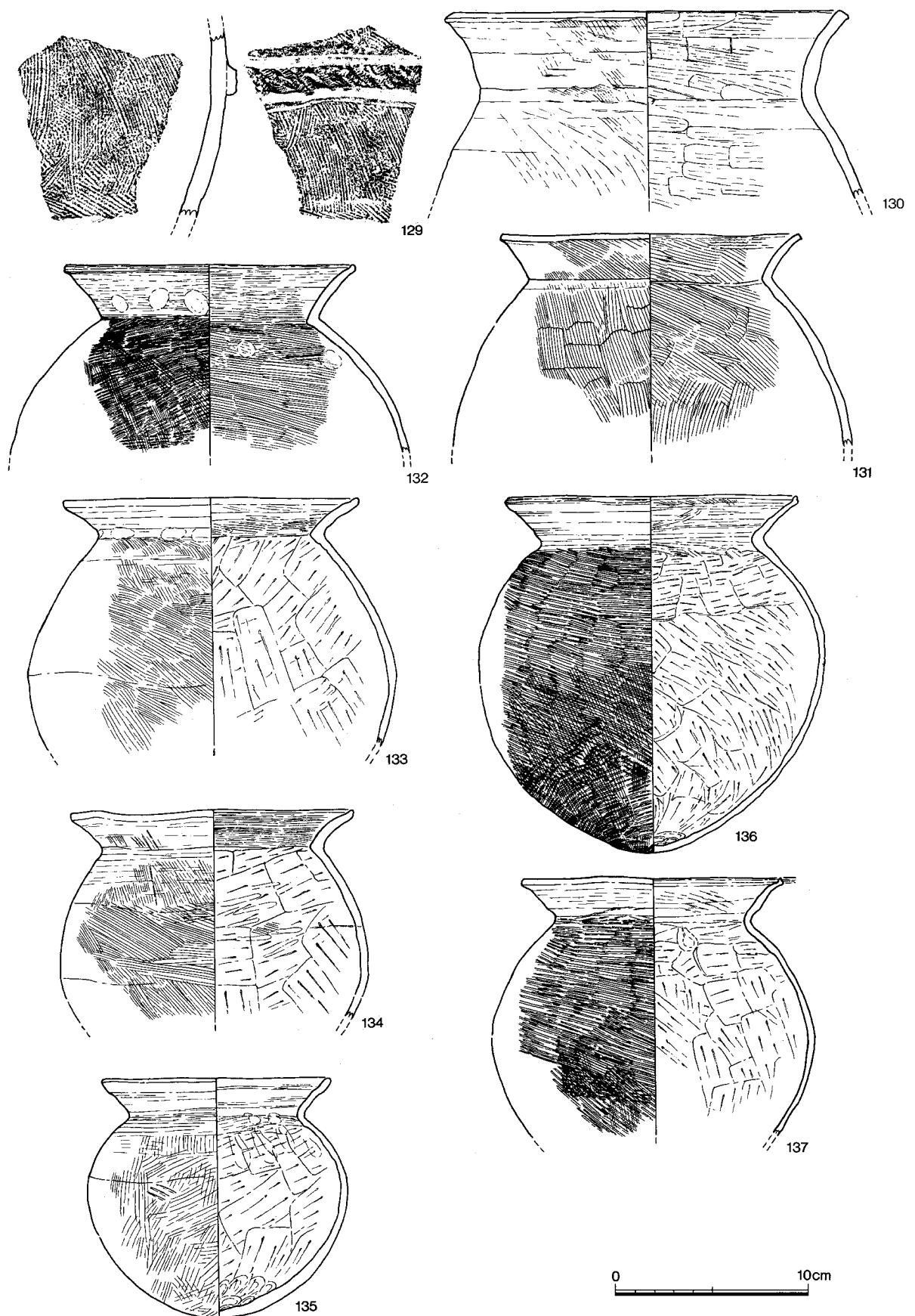


Fig.32 SC36 出土遺物実測図 1 (1/3)

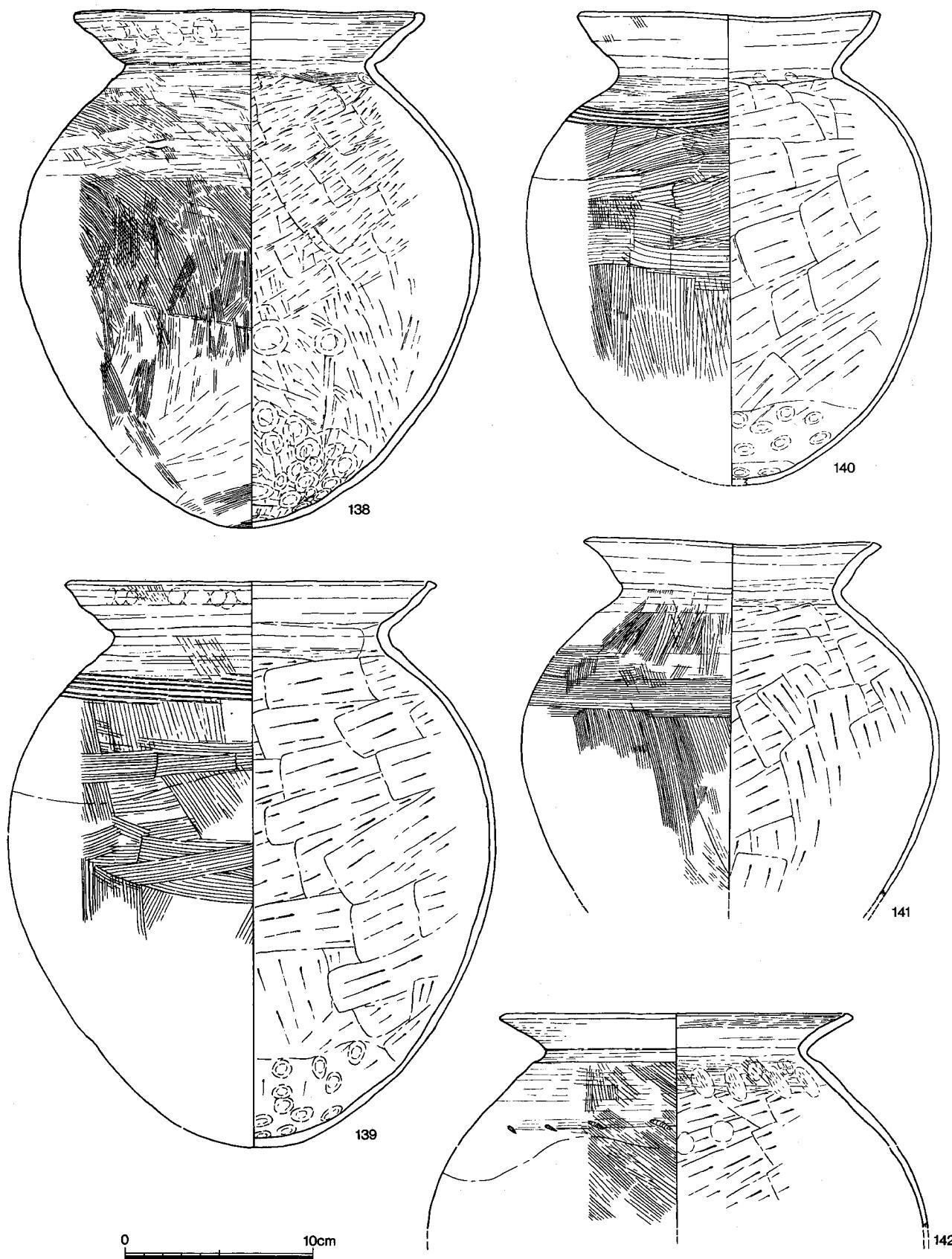


Fig.33 SC36 出土遺物実測図 2 (1/3)

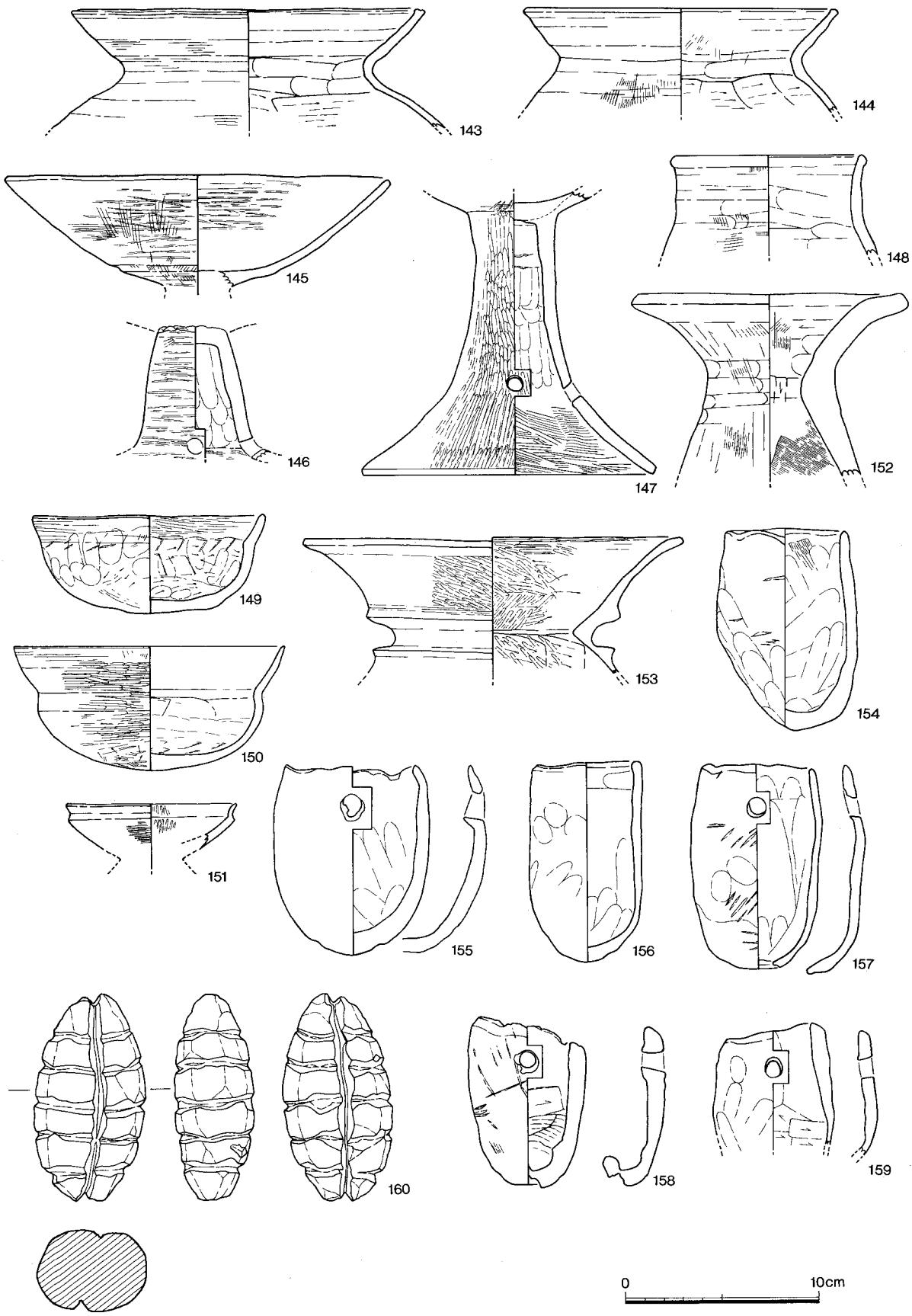


Fig.34 SC36 出土遺物実測図 3 (1/3)

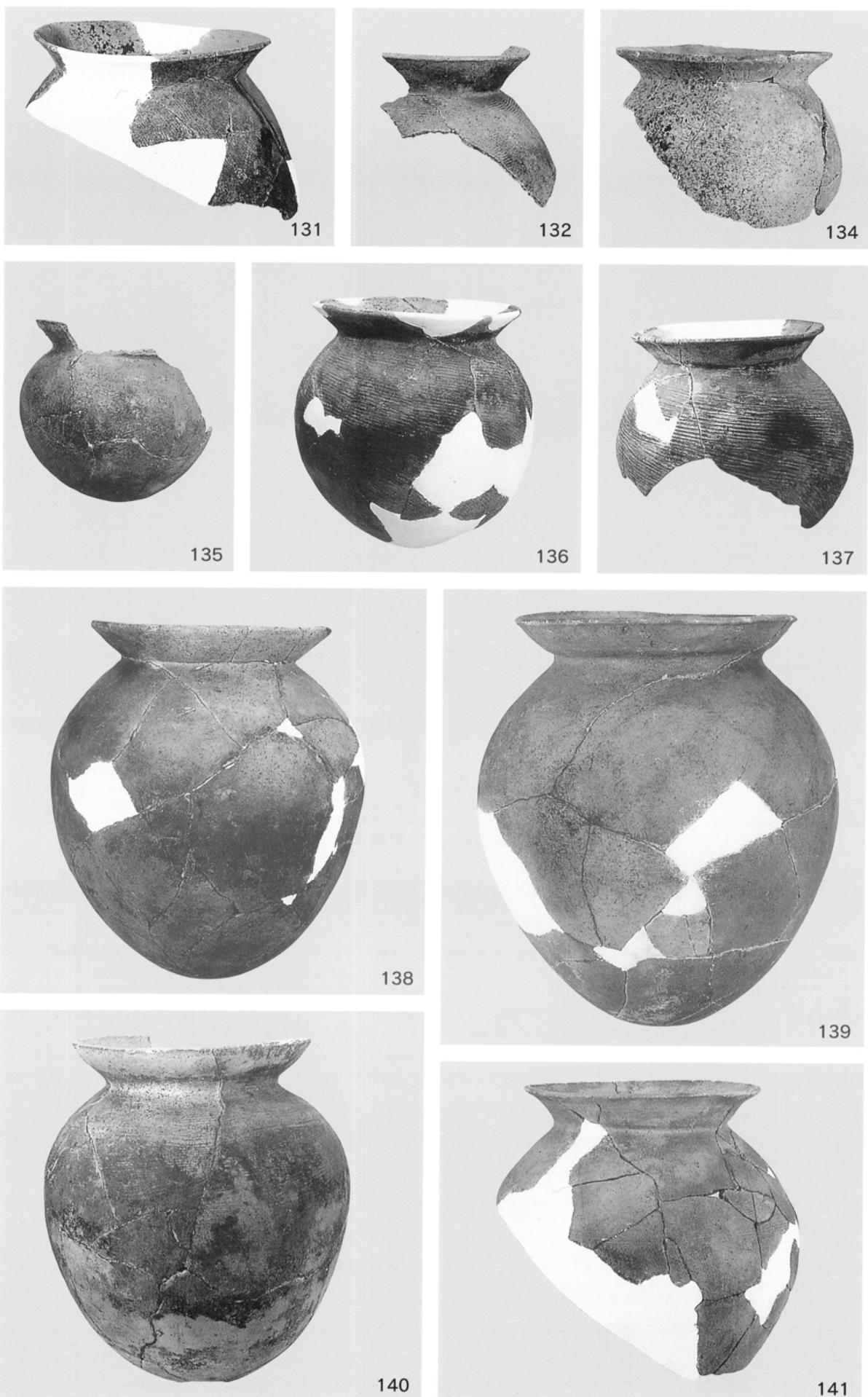


Fig.18 SC36 出土遺物 1 (約1/4)



Fig.19 SC36 出土遺物 2 (約1/4)

Tab.2-1 SC36 出土土器観察表

No.	系統 器種	口径 胴部径 器高 底径	遺存度	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
129	在来系甕 (大型甕)	— [9.6] —	胴部の一 部	外：ハケ 貼付突帯に刻目をいれる 突帯の上下ナデ 内：ハケ	1 ~ 2 mm 程度の 花崗岩と長石、雲母 の細粒を若干含む	にぶい黄橙色～ 橙色	普通	
130	在来系甕	(21.0) [22.2] [9.5] —	口縁部～ 肩部1/10	外：口縁部板ナデ→ナデ 胴部ナナメハケ (板ナデ) 内：口縁部ナデ・ヨコナデ 胴部板ナデ	1 mm 程度の花崗 岩と長石、雲母の細 粒を若干含む	外：にぶい黄橙 色～明黄褐色 内：にぶい黄橙 色～暗灰黄色	普通 II B 期	
131	在来系甕	15.7 [20.6] [11.0] —	口縁部と 胴部上半 1/4	外：口唇部面取り 口縁部ナナメハケ→軽いヨコナデ 胴部 (タタキ？→) タテハケ 内：口縁部ナナメハケ→ヨコハケ 胴部ナナメハケ	密 2 mm 程度の 花崗岩をわずかに、 石英、長石、雲母の 細粒を若干含む	橙色 良好 黒斑 あり	II B 期	
132	V様式系 甕	(15.2) [20.8] [9.9] —	口縁部～ 胴部上半 1/3	外：口縁部指押さえ→ヨコナデ 肩部タタキ(5条/cm) 胴部タタキ→ナナメハケ 内：口縁部ヨコハケ→ヨコナデ 胴部ヨコハケ (ナナメハケ)	密 長石、石英、雲 母の細粒を若干含む	外：にぶい黄色 ～黒褐色 内：にぶい黄色 ～にぶい黄橙色	良好 黒斑 あり II B 期	
133	V様式系 甕 (布留 模倣)	(15.4) (19.2) 13.1 —	口縁部～ 胴部上半 1/6	外：口唇部面取り 口縁部ヨコナデ 頸部ナデ 胴部 (おそらく タタキ→) ナナメハケ 内：口縁部ナナメハケ→ヨコナデ 胴部ケズリ (雑なケズリ)	粗 2 ~ 3 mm の 花崗岩を比較的多く、 長石、雲母の細 粒を多く含む	にぶい黄橙色～ にぶい黄褐色	普通 形態の み布留 系を模 倣	
134	V様式系 甕 (布留 模倣)	14.8 (16.0) [11.0] —	口縁部と 胴部1/3	外：口唇部面取り 口縁部ナナメハケ→ヨコナデ 胴部タテハ ケ→ナナメハケ (断続的なヨコハケ) 内：口縁部ヨコハケ 胴部ハケ→ケズリ (雑なケズリ)	1 ~ 2 mm 程度の 花崗岩を比較的多く、 長石、雲母の細 粒を若干含む	外：黄橙色～浅 黄橙色 内：にぶい黄橙 色	普通 布留系 技法の 表面的 模倣	
135	V様式系 甕 (布留 模倣)	(11.9) (13.5) 12.6 —	口 縁 部 1/12と胴 部2/3と 底部	外：口縁部強いヨコナデ (肩部ヨコナデ) 胴部タテハケ→ナ ナメハケ・断続ヨコハケ 内：口縁部強いヨコナデ 胴部強いナデ→ケズリ 底部ケズリ 指押さえ・ナデ	密 1 mm 程度の 花崗岩と長石、雲母 の細粒を若干含む	にぶい黄褐色～ 灰褐色	普通 布留系 技法一 部習得	

Tab.2-2 SC36出土土器観察表

() は復元値 [] は残存値

No.	系統 器種	口径 胴部径 器高 底径	遺存度	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
136	庄内系甕 (筑前型)	15.3 18.0 13.8 —	全体 3/4	外: 口縁部ヨコナデ 胴部タテキ 胴部下半タタキ(4条/cm) → 内: 口縁部ナメハケ → ヨコナデ 頸部ヨコナデ 胴部ケズリ(→一部ナデ)	花崗岩、石英、長石 少量と雲母を微量含む	外: 明黄褐色～ 灰色に近いにぶ い黄橙色 内: にぶい黄橙 色～黄橙色	良好	II B 期
137	庄内系甕 (筑前型)	13.7 16.5 [13.5] —	口縁部と 胴部上半 3/4	外: 口唇部面取り→沈線 口縁部ヨコナデ 胴部タタキ(4条/cm) → 下半一部タテハケ 内: 口縁粗いハケ → ヨコナデ 頸部横方向のナデ 胴部丁寧な ケズリ	密 花崗岩、長石、 雲母の細粒を若干含 む	にぶい黄色～浅 黄色	良好 黒斑 あり	II B 期
138	布留式甕	(13.6) (24.3) 27.7 —	口縁部～ 胴部 1/2 と底部	外: 口縁部ヨコナデ 肩部タテハケ・ナメハケ → ヨコナデ 胴部タテハケ 胴部下半ハケ → ナデ 内: 口縁部ヨコハケ → ヨコナデ 胴部ケズリ 胴部下半ケズリ → ナデ・指押さえ	密 流紋岩、石英、 長石を少量、角閃石、 雲母を微量含む	にぶい黄橙色～ 明黄褐色	畿内産 ？布留 0～布留 1式	
139	布留系甕	19.6 25.7 28.1 —	口縁部～ 胴部 1/2 と底部	外: 口唇部面取り 口縁部ナメハケ → 強いヨコナデ 胴部タ テハケ → ヨコハケ 肩部にヨコハケが1周する(粗い条痕) 内: 口縁部ヨコナデ 頸部ナデ 胴部ケズリ 底部指押さえ	密 長石、雲母の細 粒を若干含む	明黄褐色土	普通 黒斑 あり	II B 期
140	布留系甕	(16.1) 21.5 25.3 —	口縁部 1/4と底 部の一部 欠損	外: 口唇部面取り 口縁部ナメハケ → ヨコナデ 胴部タテハ ケ → ヨコハケ 肩部に回転的なヨコハケ(粗い条痕) 波状文に 近い文様 内: 口縁部ヨコナデ 頸部ナデ 胴部ケズリ	密 長石、雲母の細 粒を若干含む	黄橙色～にぶい 黄橙色 部分的に 褐灰色	焼成	II B 期
141	布留系甕	16.0 (22.4) [18.8] —	口縁部と 胴部 1/3	外: 口唇部面取り 口縁部おそらくナメハケ → ヨコナデ 胴 部タテハケ → ヨコハケ(回転的) 内: 口縁部ヨコナデ 胴部ケズリ	1 mm 程度の花崗 岩と長石の細粒を若 干含む 雲母をわず かに含むか	浅黄橙色～暗灰 黄色 部分的に 黒褐色	普通 黒斑 あり	II B 期
142	布留系甕	(18.9) (26.6) [11.4] —	口縁部～ 胴部上半 1/6	外: 口唇部面取り 口縁部ヨコナデ 肩部ハケ → ヨコナデ 胴 部ナメハケ 肩部に列点文 内: 口縁部ヨコナデ 頸部下ハケ → ナデ・押さえ → ケズリ 胴 部ケズリ	1～2 mm 程度の花 崗岩と角閃石、流 紋岩、石英、長石、 雲母の細粒を若干多 く含む	外: 明黄橙色 内: 橙色	良好 黒斑 あり	中～西 部瀬戸 内産？ 布留 1 式併行
143	布留系甕	(18.4) [20.5] [6.2] —	口縁部～ 肩部 1/3	外: 口唇部面取り → 弱い沈線 口縁部一部頭部擦痕強いヨコナデ 肩部摩滅して不明だがヨコハケか(ないしヨコナデ) 内: 口縁部ヨコナデ 頸部ナデ 肩部ケズリ	1 mm 程度の花崗岩 と長石、雲母の細粒 を若干多く含む	にぶい黄橙色	普通	一時期 新相か
144	布留系甕	(16.4) [16.2] [5.2] —	口縁部～ 肩部 1/4	外: 口縁部(おそらくナメハケ →) 丁寧なヨコナデ 肩部タ テハケ → 弱いヨコナデ 内: 口縁部(ナメハケ →) ヨコナデ 頸部ナデ 肩部ケズリ	1 mm 程度の花崗岩 と長石、雲母の細粒 を若干含む	外: 浅黄色 内: 淡黄色～灰 白色氣味	良好 黒斑 あり	一時期 新相か
145	布留系高 环(精製 器種 B 群)	20.0 — [5.8] —	環部	基部の下部は丸み 外: 口唇部摩滅して不明だがおそらくヨコナデ 体部摩滅して 不明だがケズリ → タテハケ → 細密なヨコミガキ 基部タテハケ → 細密なヨコミガキ 内: 摩滅して不明だが細密なヨコミガキが残る	密 長石、雲母の細 粒を若干含む	外: 明黄褐色 内: 橙色	良好 黒斑 あり	中～西 部瀬戸 内産？ 布留 1 式併行
146	布留系高 环(精製 器種 B 群)	— — [7.0] —	脚部 裙 部欠損	脚部 3 方向に穿孔 外: タテハケ → 横方向の細かいミガキ 内: 柱部上半シボリ → ナデ 柱部下半おそらくヨコハケ → ナデ 裙部ヨコハケ	1 mm 程度の花崗岩 と長石、雲母の細 粒を若干含む	橙色	普通	
147	在来系高 环	— — [14.5] [15.3]	脚柱部と 裙部 1/6	脚部 3 方向のうち、2ヶ所に穿孔残存 孔径 0.8cm 外: 縦方向のミガキ 裙部はストロークが長い 脚端部面取り 内: 坏部底部ミガキ 脚部上部シボリ → 板状工具による回転ナ デ? 中位おそらくタテハケ → ナデ 下部ヨコハケ	1～3 mm 程度の花 崗岩と長石、雲母 の細粒を若干含む	外: 明黄褐色 内: 橙色	普通	II B 期
148	在来系小 型壺	(10.2) [11.0] [5.2] —	口縁部 1/4	外: 口縁部ヨコナデ 頸部ナメハケとタテハケ 胴部ヨコハ ケ → 横方向のナデ 内: 口唇部ヨコナデ 頸部摩ヨコハケ → ナデ	1～2 mm 程度の花 崗岩と長石、雲母 の細粒を比較的多く 含む	外: にぶい黄 褐色 内: にぶい褐色	良好	
149	V様式系 小型丸底 鉢	12.0 — 5.1 —	完存	外: 口縁部ヨコナデ 体部タタキ → 指押さえ・ナデ 底部ケズ リ → ナデ 内: 口縁部ヨコナデ 体部ケズリ → ヨコハケ → ナデ さえ → ケズリ	0.5～1 mm 程度の花 崗岩と雲母を比較 的多く含む	外: 橙色 内: にぶい黄橙 色	普通 150の タイプ を模倣	
150	小型丸底 鉢(精製 器種 B 群)	(14.0) — 6.4 —	口縁部 1/8 と 体 部	外: 口縁部ヨコナデ 下半横方向の細かいミガキ 体部ハケ → 横方向の丁寧な細かいミガキ 底部ケズリ → 不定方向の細かい ミガキ 内: 摩滅している 口縁部ヨコナデ 体部ナデ (体部～底部 規則的なヨコハケ → ナデ) 底部ハケ → 強いナデ	密 1 mm 程度の花崗 岩と長石、雲母の細 粒をわずかに含む	橙色	良好	II B 期
151	小型器台 (精製器 種 B 群)	12.0 — 5.1 —	受部 1/6	外: 口縁部ミガキに似たヨコナデ 受部タテミガキ → 横方向の 細かいミガキ 内: 口縁部ヨコナデ → 若干ミガキ 受部ミガキ	密 長石、雲母の微 細粒を若干含む	橙色	良好	II C 期
152	在来系器 台	14.4 — [9.4] —	受部と脚 部上部	外: 受部上部ヨコナデ 以下全体的にタテハケ → 縦方向のナデ 基部横方向のナデ 脚部ハケ → 縦方向のナデ 内: 受部上部ヨコナデ 以下ハケ → 横方向のナデ 基部縦方向 のナデ 脚部斜め方向のハケ	粗 1～5 mm 程度 の花崗岩と石英、長 石、雲母の細粒を比 較的多く含む	明黄褐色～橙色	普通	
153	山陰系鼓 形器台	(19.6) — [7.0] —	受部～基 部 1/2	外: 全体的にヨコナデ → 受部中位にナナメミガキ 内: 口縁部ヨコナデ 受部ケズリ → 丁寧なミガキ(単位不明に 反復) 脚部ケズリ → 雜なミガキ	密 1 mm 程度の石 英を若干、長石、石 英の細粒をわずかに 含む	にぶい黄橙色	良好	II B 期

SC58

B-9～11で検出された。北側は発掘区外へ伸びる。東西4.0m、南北は2.0m調査した。残存壁高は0.7m。南壁の一部を現代の井戸が破壊している。また、SD35、SD51、SK31、SK52、SK54が住居を切っている。床面はレンズ状に窪んでいる。東よりの発掘区際に土坑があり、深さ0.4m以上ある。しかし土層断面図をみるとSK52の直下にあるため、地山が汚染されていた可能性がある。南東隅と南西隅に柱穴を検出した。深さは南東隅が0.6m、南西隅が0.3mであるが南東隅の柱穴は掘りすぎた感がある。土層は1層が表土で、3層がSD35、5層がSK52の覆土である。7～9層が住居で、10層は屋内土坑の覆土である。1層：暗褐色土 2層：黒褐色土 3層：暗茶褐色砂質土 4層：暗褐色土 5層：暗褐色砂質土 6層：暗茶褐色砂質土 7層：暗黄色砂 8層：暗茶褐色砂 9層：暗黄色砂 10層：暗褐色砂 11層：暗黄色砂である。

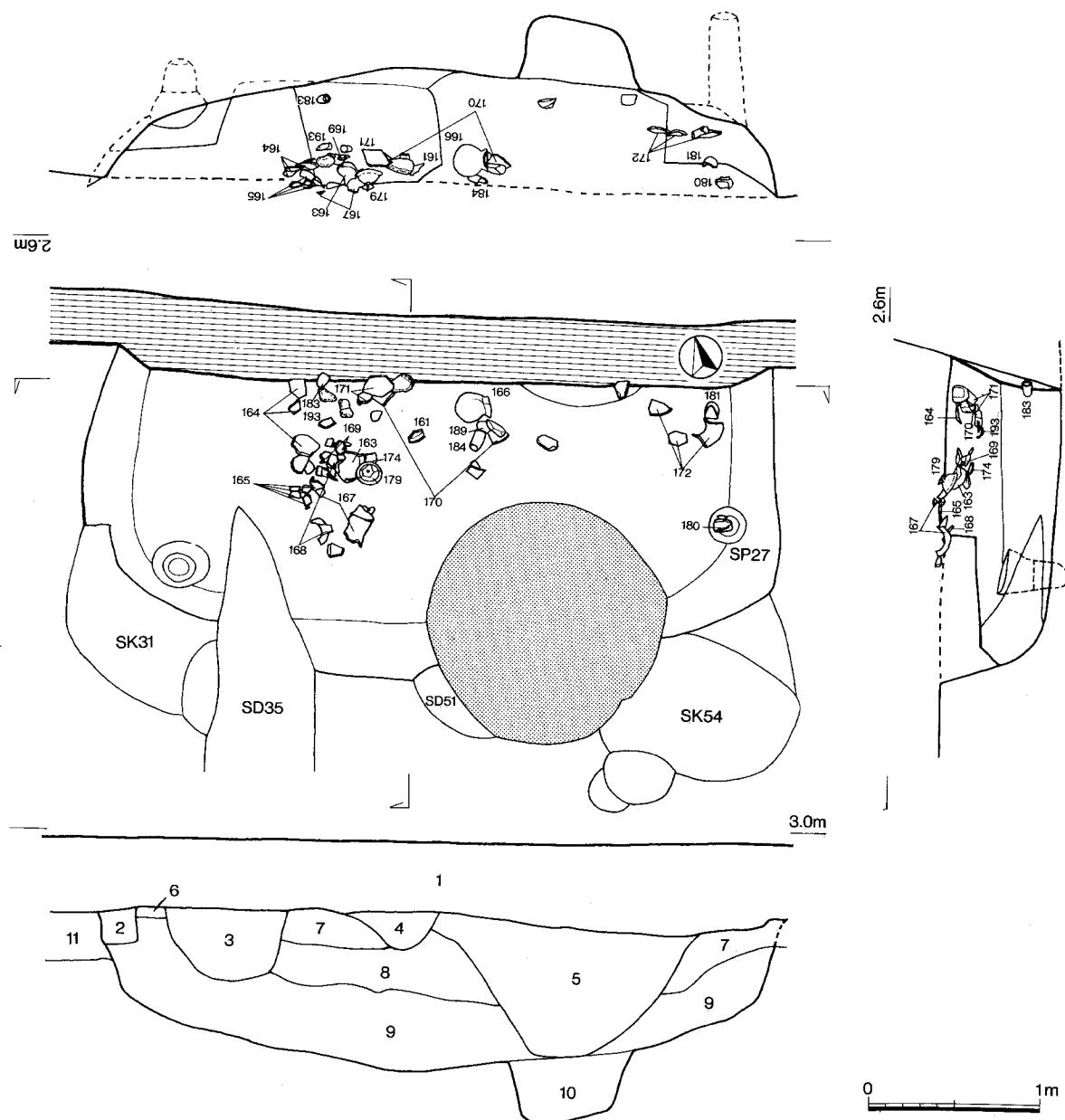
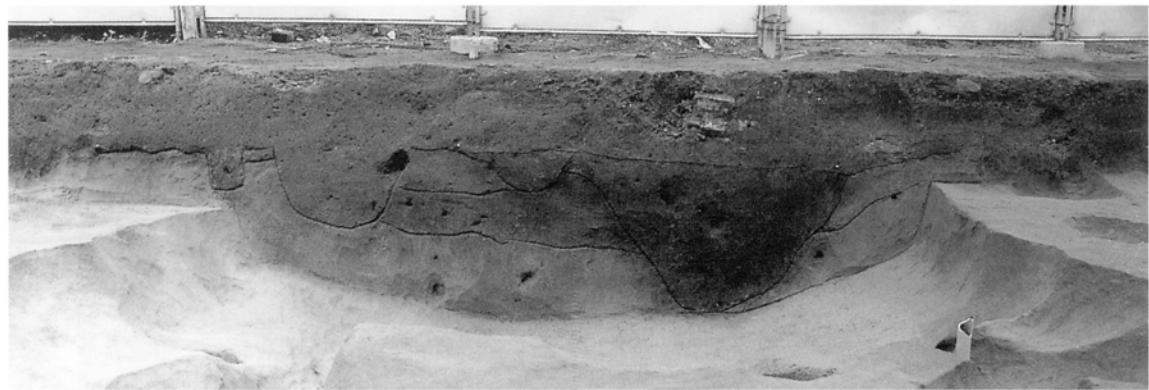


Fig.35 SC58 実測図 (1/40)



PL.20 SC58 1 (上：北から・下：南から)



PL.21 SC58 2 (上：西から・中：北から・下：土層 南から)

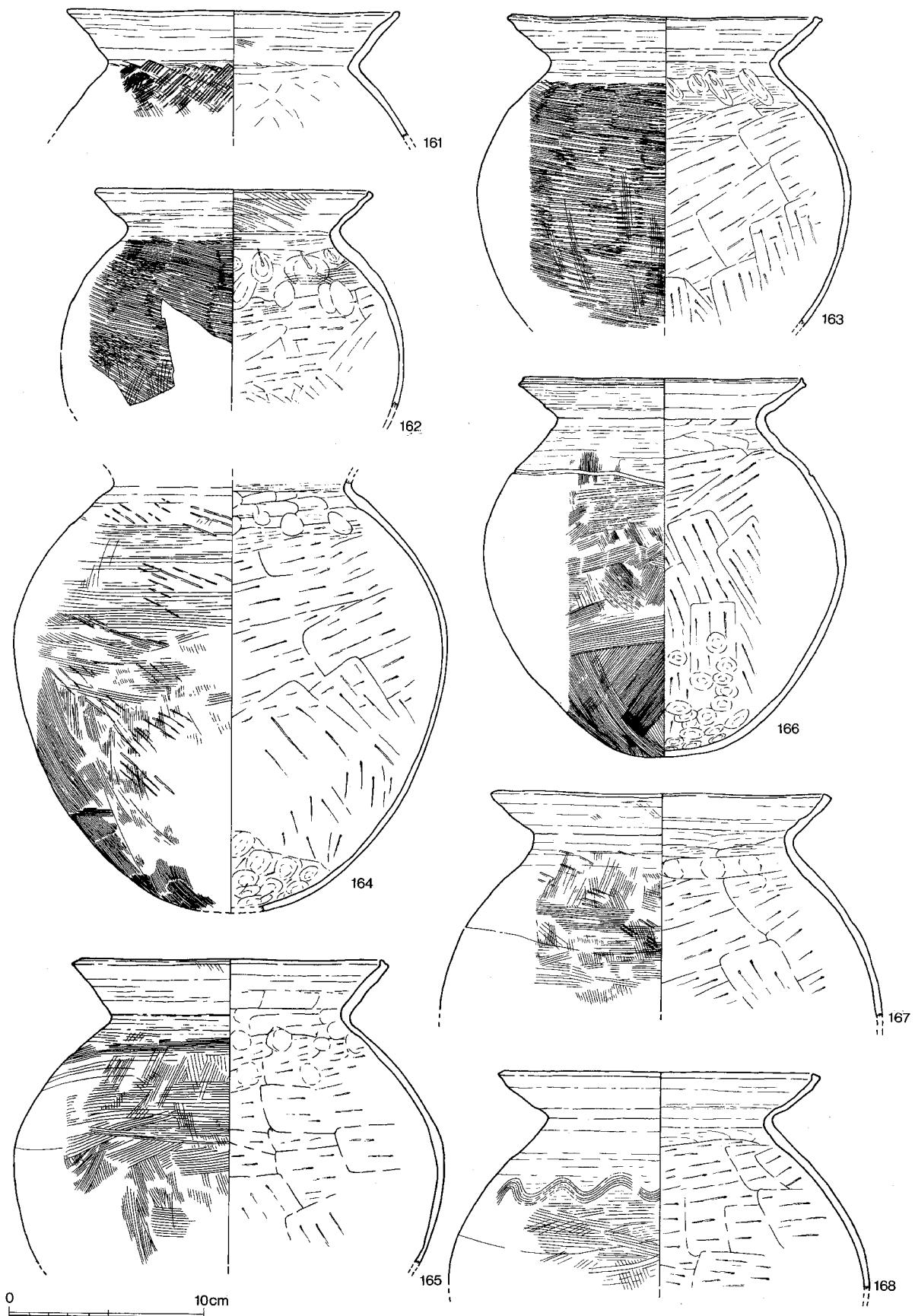


Fig.36 SC58 出土遺物実測図 1 (1/3)

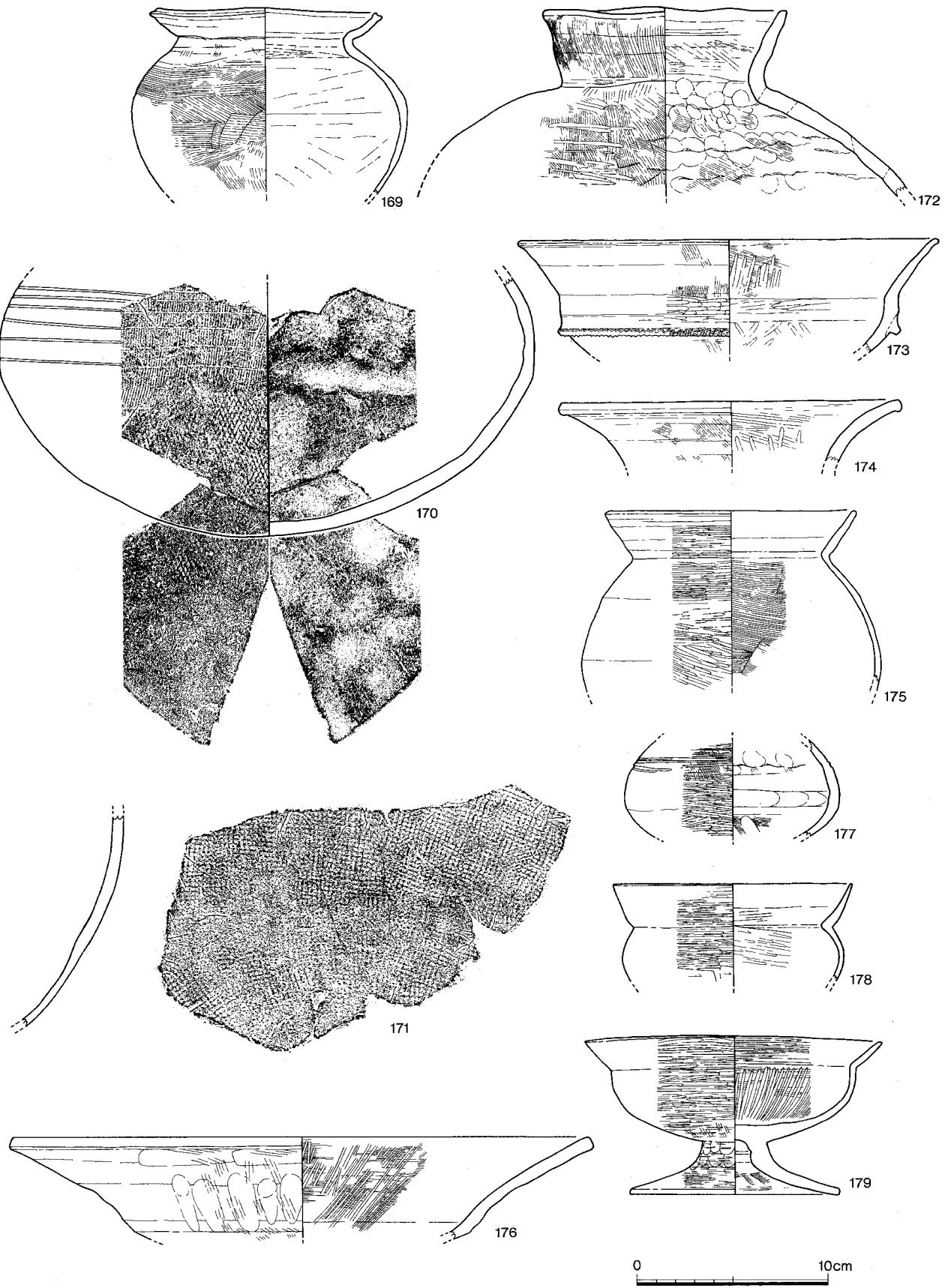


Fig.37 SC58 出土遺物実測図 2 (1/3)

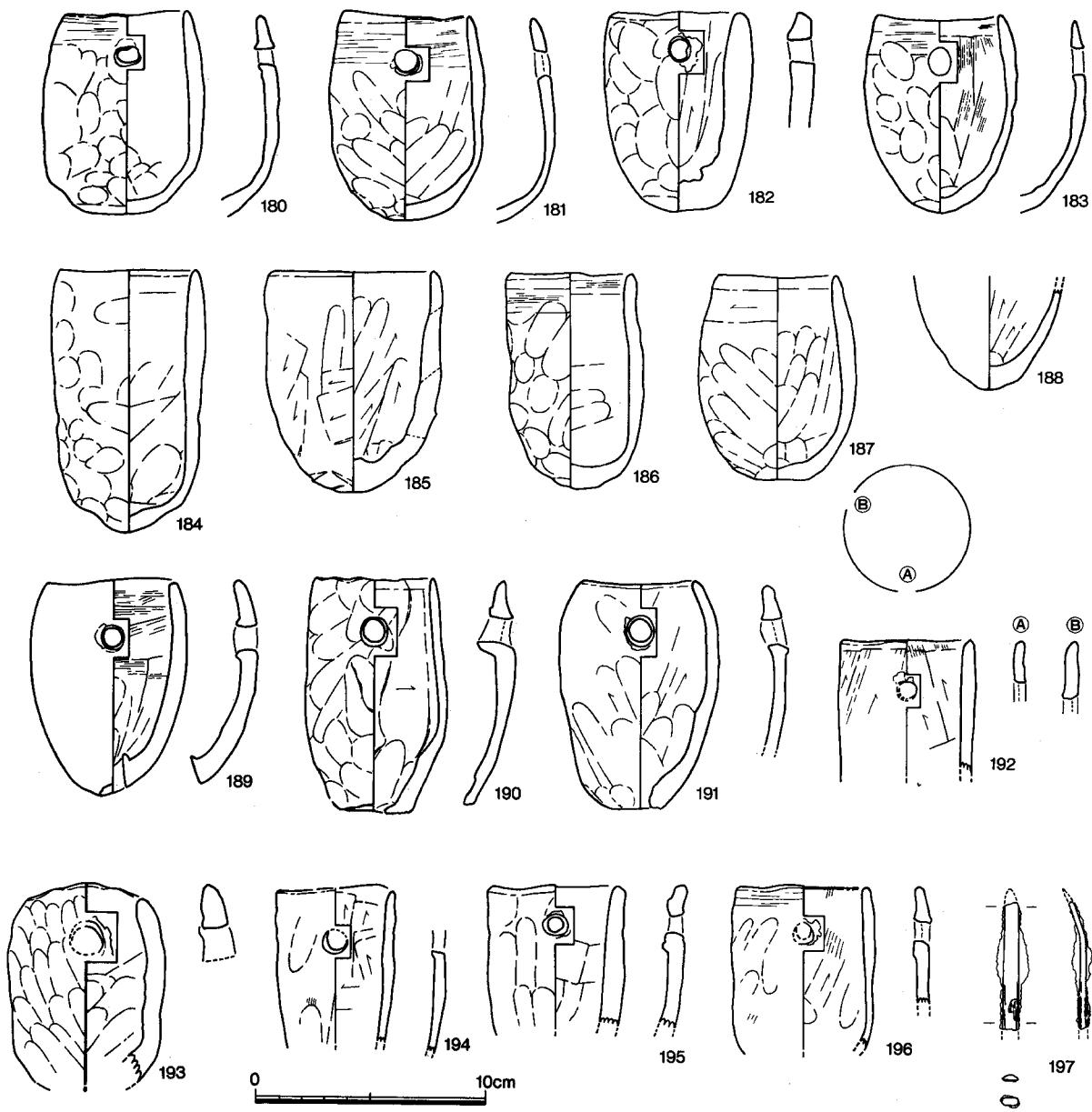
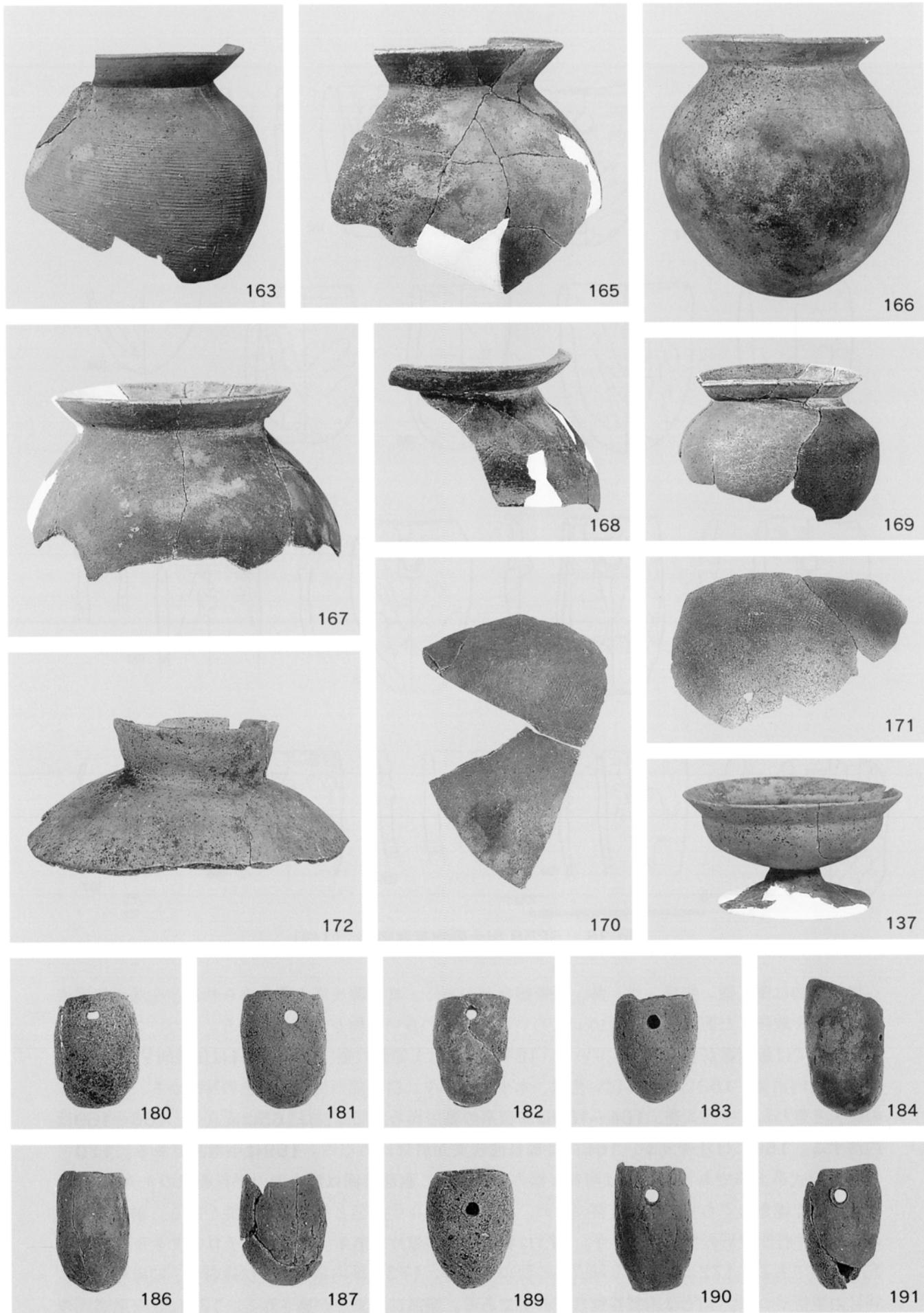


Fig.38 SC58 出土遺物実測図 3 (1/3)

出土遺物は甕、壺、高坏、咙、鉢、飯蛸壺などがある。また韓式系土器もみられる。住居西側寄りの、住居を確認した面の前後、幅30cmぐらいに遺存度の良い遺物が集中している。また、この集中部より下層では飯蛸壺が多く出土している。161～169は土師器の甕である。161は伝統的V様式系甕、162は庄内系甕、163は黄色っぽい色調、水平のタタキ、口唇部の沈線、胎土の特徴から、播磨からの搬入と思われる庄内式甕、164～169は布留系の甕である。口縁部は165は直立し、166～169は内湾する。166には沈線文が、168には櫛目波状文が肩部にめぐる。169は小型品である。170・171は韓式系土器である。170は陶質土器の短頸壺で、胴部外面は縦方向の平行条線のタタキの後、らせん横沈線をめぐらす。破片資料のため、横線の傾きは実測図と異なる可能性がある。胴部下半から底部は平行四辺形の格子目タタキ。171は軟質土器の破片である。外面に格子目のタタキ。172～174は壺である。172は伝統的V様式系の短項直口壺。173は畿内系の二重口縁壺で、口縁屈曲部に刻目の突帯がつく。175は精製器種B群の咙である。胴部にミガキが施される。176は在来系高坏の口縁部である。177は精製器種B群の短頸壺である。178は精製器種B群の小型丸底壺である。179



PL.22 SC58 出土遺物 (約1/4)

Tab.3 S C 58出土土器観察表

()は復元値 []は残存値

No.	系統 器種	口径 脣部径 器高 底径	遺存度	成形・調整	胎土	色調	焼成	備考
161	V様式系 壺	(17.3) [18.4] [6.6] —	口縁部～ 肩部1/3	外:口縁部擦痕の残る強いヨコナデ 肩部右上がりタタキ (5~6条/cm タタキに似せた櫛状のハケの可能性もある)→ハケ 内:口縁部ナナメハケ→擦痕の残る強いヨコナデ 脣部ケズリ→丁寧なナデ	密 2~3mmの花崗岩 をわずかに、長石、雲母の細粒を若干含む	にぶい黄橙色～ 灰黄褐色	普通	
162	庄内系壺 (筑前型)	(14.6) (17.9) [11.4] —	口 縁 部 1 / 1 2 と 脣部上半 1/3	外:口唇部面取り→丸くする 口縁部ヨコナデ 脣部タタキ (5条/cm) 内:口縁部ナナメハケ→ヨコナデ 頸部横方向のナデ 脣部ハ ケ→ケズリ→上半部にナデ・指押さえ	比較的密 1 mm 程度の花崗岩と石 英、長石、雲母の細 粒をわずかに含む	外:にぶい黄橙 色～明黄褐色 内:にぶい黄褐色 ～にぶい黄橙色、 黄褐色	良好 黒斑あり	
163	庄内式壺	(16.4) 19.5 16.1 —	口 縁 部 1/3と脣部 1/2	外:口唇部沈線 口縁部ヨコナデ 脣部タタキ(4~5条/cm) 内:口縁部ヨコナデ 肩部シボリ→指押さえ→擦りナデ 脣部 ケズリ	密 石英、長石、角 閃石の細粒を若干含 む 角閃石、流紋岩、 火山ガラスも含む	外:にぶい黄褐 色～浅黄橙色 内:橙色～にぶ い黄橙色	良好 黒斑あり 拂磨産 布留1式併行	
164	布留系壺	— (22.5) [22.6] —	脣部1/6と 底部	外:頸部ヨコナデ 肩部タタキ(3~4条/cm)→タテハケ→ヨコハケ 内:指押さえ→ナデ 脣部ケズリ底部(ケズリ)→指押さえ・ナデ	比較的密 1 ~ 2 mm程度の花崗岩と 雲母をわずかに、石 英、長石の細粒を比 較的多く含む	外:灰白色 下 半部にぶい黄橙 色 内:灰黄褐色～ 黄灰色	普通 筑前型 庄内壺と同胎 土、同 技法	
165	布留系壺	(16.5) (22.3) [15.9] —	口縁部～ 脣部上半 1/2	外:口唇部面取り 口縁部擦痕残る強いヨコナデ 脣部タテハ ケ→ヨコハケ(一部さらに不定方向のハケ) 内:口縁部擦痕残る強いヨコナデ 頸部ナデ・指押さえ 脣部 ケズリ	比較的密 石英、長 石、雲母の細粒を若 干多く含む	鈍い黄橙色～浅 黄色	良好 黒斑あり	II C期
166	布留系壺	15.1 18.9 19.7 —	口 縁 部 1/6欠損	外:口唇部面取り 口縁部～頸部ヨコナデ 脣部上半タテハケ ナナメハケ→ヨコハケ→沈線 下半タテハケ→ナナメハケ 内:口縁部ヨコナデ 頸部ナデ 脣部ケズリ 底部指押さえ	1 mm 程度の花崗 岩と長石と雲母の細 粒を多く含む	にぶい黄橙色 一部橙色	普通	II C期
167	布留系壺	(17.8) (23.0) [11.5] —	口 縁 部 3/4と脣 部上半 1/2	外:口唇部面取り 口縁部ヨコナデ 脣部(タタキ痕跡5条/ cm)タテハケ→ヨコハケ 内:口縁部ヨコナデ 頸部ナデ 脣部ケズリ	1 ~ 3 mm 程度の 花崗岩と石英、長石 を多く、雲母の細粒 と角閃石微量含む	にぶい黄橙色～ 浅黄橙色	普通 黒斑あり	II C期
168	布留系壺	(16.1) (22.1) [11.2] —	口 縁 部 1/3と脣 部上半 1/4	外:口唇部面取り 口縁部～肩部上半ヨコナデ 脣部タテハケ とヨコハケ 肩部に波状文 内:口縁部ヨコナデ 頸部ナデ 脣部ケズリ	1 ~ 2 mm 程度の 花崗岩と石英、長石 の細粒を比較的多く 含む 雲母はほとん どない	外:黄橙色～灰 黄褐色 内:明黄褐色～ にぶい黄橙色	普通 黒斑あり	II C期
169	布留系壺	12.3 (14.5) [9.8] —	口 縁 部 7/8と脣 部5/6	外:口唇部沈線 口縁部～頸部ヨコナデ 肩部ヨコハケ→下半 タテハケ 脣部ナナメハケ→不定ヨコハケ 内:口縁部ハケ→ヨコナデ 頸部ナデ 脣部ケズリ	1 ~ 3 mm 程度の 花崗岩と石英、角閃 石、雲母を含む	浅黄橙色～灰黃 褐色	良好	II C期
170	陶質土器 短頸壺	— (28.0) [13.6] —	脣部1/8と 底部	外:脣部中位縱方向の細かい平行条線のタタキ→ラセン横沈線 (破片のため沈線の傾き不明) 下半格子目タタキ 下部摩滅 内:無文當て具痕跡→ナデ 中位直線的な横方向のナデ	1 ~ 5 mm 程度の 花崗岩を若干含む	灰黄色 底部は 黄橙色に変色	あるいは瓦質 土器	
171	軟質土器 壺	— — — —	脣部片	外:格子目タタキ 内:(無文當て具?→)丁寧なナデ	1 ~ 2 mm 程度の 花崗岩を多く、雲母 をぐくわずかに含む 雲母は付着物か	外:にぶい黄 橙色 内:橙色	普通	
172	V様式系 短頸直口 壺	12.8 (25.5) [9.9] —	口縁部～ 肩部	外:口縁部ヨコナデ→タテハケ 頸部横方向のナデ 肩部不定 方向のハケ・粗いタテハケ 一部に暗文状のヘラナデ(ミガキ) 内:口縁部ナナメハケ→ヨコハケ→ヨコナデ 肩部ナデと指押 さえ→ハケ	やや粗 1 ~ 2 mm の花崗岩と石英、長 石、雲母の細粒を比 較的多く含む	外:橙色～黄褐 色 内:橙色～灰黃 褐色	普通 黒斑あり 二重口 縁壺の 作りかけ	
173	畿内系?	(22.1) [6.0] —	口 縁 部 1/12	外:口縁部上部ヨコナデ 以下タテハケ→ミガキ 擦りナデ 刻目を入れた貼付突堤 口縁下部摩滅して不明だがミガキか 内:口縁部上部ナナメハケ→縦方向のミガキ 以下摩滅して不 明だがタテハケ→ミガキか	比較的密 1 ~ 5 mm程度の花崗岩と 長石の細粒を若干含 む 雲母は付着物か	橙色	普通 黒斑あり 形態が 異形	
174	在来系壺	(18.0) [3.4] —	口 縁 部 1/7	外:ナナメハケ→擦痕の残る強いヨコナデ 内:口縁上部ヨコナデ 以下ナナメハケ→ミガキ	1 ~ 2 mm 程度の 花崗岩と流紋岩? 長石、雲母の細粒を若干 含む	外:橙色 内:橙色～赤褐 色	良好	
175	埴(精製 器種 B 群)	(13.2) (15.7) [9.7] —	口 縁 部 1/3と脣 部1/12	外:口縁部上部ヨコナデ 以下脣部までミガキ(上半細密ヨコ ミガキ 中位ナナメミガキ) 内:口縁部ハケ?→ヨコナデ 脣部細かい条痕のハケ(擦痕が 残る板ナデ)	比較的密 石英、長石、 雲母の細粒を若干含 む	橙色	普通 黒斑あり	
176	在来系高 壺	(30.7) [5.4] —	壺部上半 1/10	外:口唇部面取り 壺部上半ナナメハケ→ヨコナデ 下半タテハケ 成形時の凹凸残る 内:ヨコハケ→暗文風のタテミガキ	比較的密 1 mm 程度の花崗岩と長石 雲母の細粒を若干含 む	外:にぶい黄 橙色 内:にぶい 黄褐色	良好	
177	短頸壺? (精製器 種B群)	— (11.3) [5.1] —	脣部1/4	外:脣部タテハケ→細密なヨコミガキ 肩部に一周する暗文風 のミガキ 内:脣部上半(ハケ?→)横方向のナデ 中位横方向のナデ 下半ヨコハケ→縦方向のナデ	密 石英、長石、雲 母の細粒をわずかに 含む	外:橙色 内:明赤褐色	良好	
178	小型丸底 壺(精製器 種B群)	(12.6) (11.7) [5.2] —	口 縁 部 1 / 1 6 と 頸部～脣 部1 / 6	外:(おそらくハケ?) 細密なヨコミガキ 脣部下半ミガキの 痕跡(ナナメミガキ) 内:口縁部ヨコナデ 脣部摩滅 ヨコハケ→ケズリ→ミガキ	密 長石、雲母の細 粒を若干含む	赤褐色～橙色	良好	
179	脚付鉢 (精製器 種B群)	15.7 — 8.3 11.0	脚 瓶 部 1 / 2 欠損	外:体部タテハケ→細密なヨコミガキ 脚部(おそらくハケ?) 細密なヨコミガキ 上部ナデ→細密なヨコミガキ 内:口縁部ヨコハケ→細密なヨコミガキ 体部横方向のミガキ →縦方向(放射状)のミガキ 脚部 ヨコハケ→ヨコナデ	密 石英、長石の細 粒をわずかに含み、 雲母を比較的多く含 む 雲母は付着物か	橙色	良好 小型丸 底鉢に 脚部	

は外反する口縁の鉢に脚がついている。小型精製器種B群。**180～196**は飯蛸壺である。**180～188**が底部に孔がないタイプで、**189～191**が底部に孔があるタイプ、**192～196**は底部を欠損するためどちらか不明である。**192**は口縁下に2孔ある。**197**は鉈である。先端部と茎部を欠損する。現存長5.6cm、刃部幅6.4mm、茎部幅7.8mm、茎部厚3.8mm。樹皮らしきものを帯状に巻いた痕跡と木質が残る。

(2) 土坑

SK08

B-1・2で検出した土坑である。北側は発掘区外に伸びる。深さは0.1m。覆土は暗黄褐色砂である。SK02、SK03に切られる。

古墳時代の土師器の破片が3点出土した。

SK09

B-2に位置する土坑である。南側は発掘区外に伸びる。深さは0.1m。覆土は暗黄褐色砂である。SK01、SK02、SK03に切られる。

出土遺物はないが覆土の状況から古墳時代の土坑と考えられる。

SK44

F-6・7で検出した不定形土坑である。南側は発掘区外に伸びる。長軸2.1m残存、短軸1.3m、深さ0.7m。しかし、覆土が黄褐色砂で、ほとんど地山砂と区別が付かなかったので、壁が不明瞭でプランはかなり不明確である。

出土した遺物は飯蛸壺のみであり、多くが完形品である。東西方向に2列並んでいるようにみえ、紐にくくられた状態であったと思われる。特に北側の列は遺存状態が良い。蛸壺の形態はバラエティに富む。器高は最小のもので8.5cm、最大のもので11.9cmである。最小のものは球形に近く、最大のものは細長いコップ状を呈する。底部に孔があるものとないものがあり、また、口縁下の孔が1孔のものと2孔のものがある。2孔の位置はほぼ反対側にあるものから、90°以内に位置するものまである。全容が判明する16点をみると、底部孔なしで口縁下1孔のもの4点、底部孔なしで口縁下2孔のもの1点、底部孔ありで口縁下1孔のもの3点、底部孔ありで口縁下2孔のもの8点である。**198～205**は底部に穿孔がないものである。そのうち、**198～201**は口縁下に1孔を穿つ。**202**は口縁下に2孔を穿つ。**203～205**は口縁下が欠損しており、孔の数は不明。**203**は残存部に1孔確認できる。**206～218**は底部に穿孔があるものである。そのうち、**206～208**は口縁下に1孔を持つもの、**209～210**は残存部に1孔確認できるが、欠損部分があり、1孔か2孔か確認できないもの。**211～218**は口縁下に2孔あるものである。**219～221**は欠損により底部の穿孔の有無、口縁下の孔の数が不明のものである。**213**にはヘラ状工具により刻み目がつくが、意図的かどうか不明。**214**にはクシ状工具で条痕をつけている。

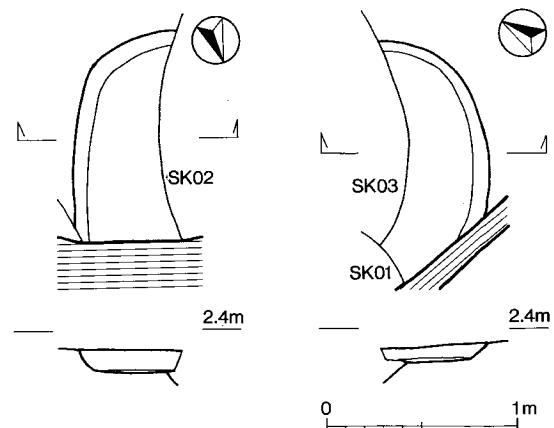


Fig.39 SK08・09 実測図 (1/40)

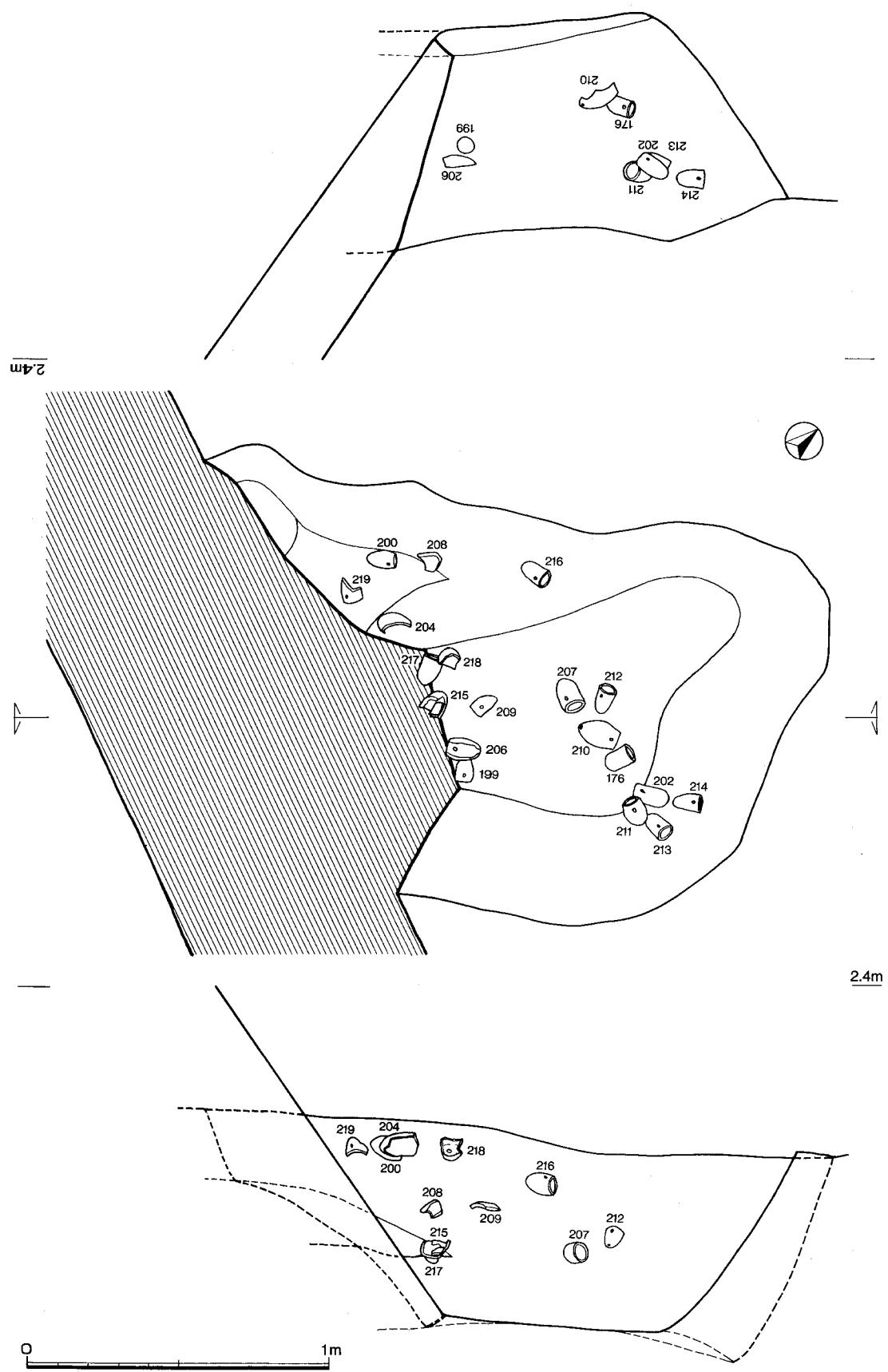
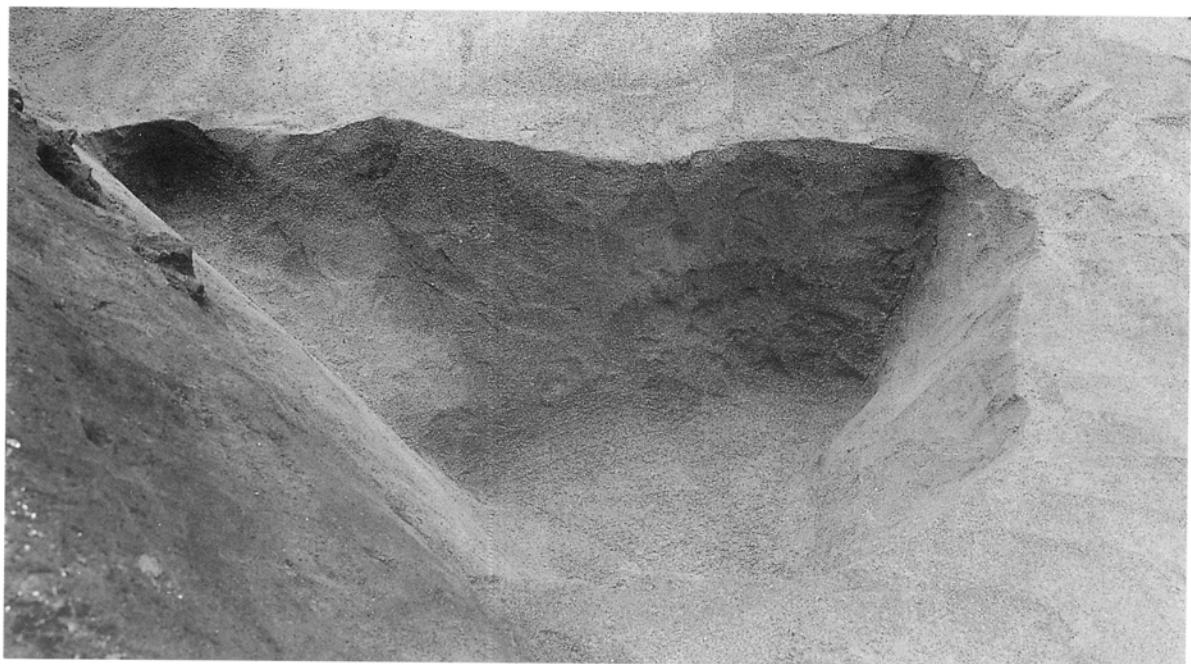


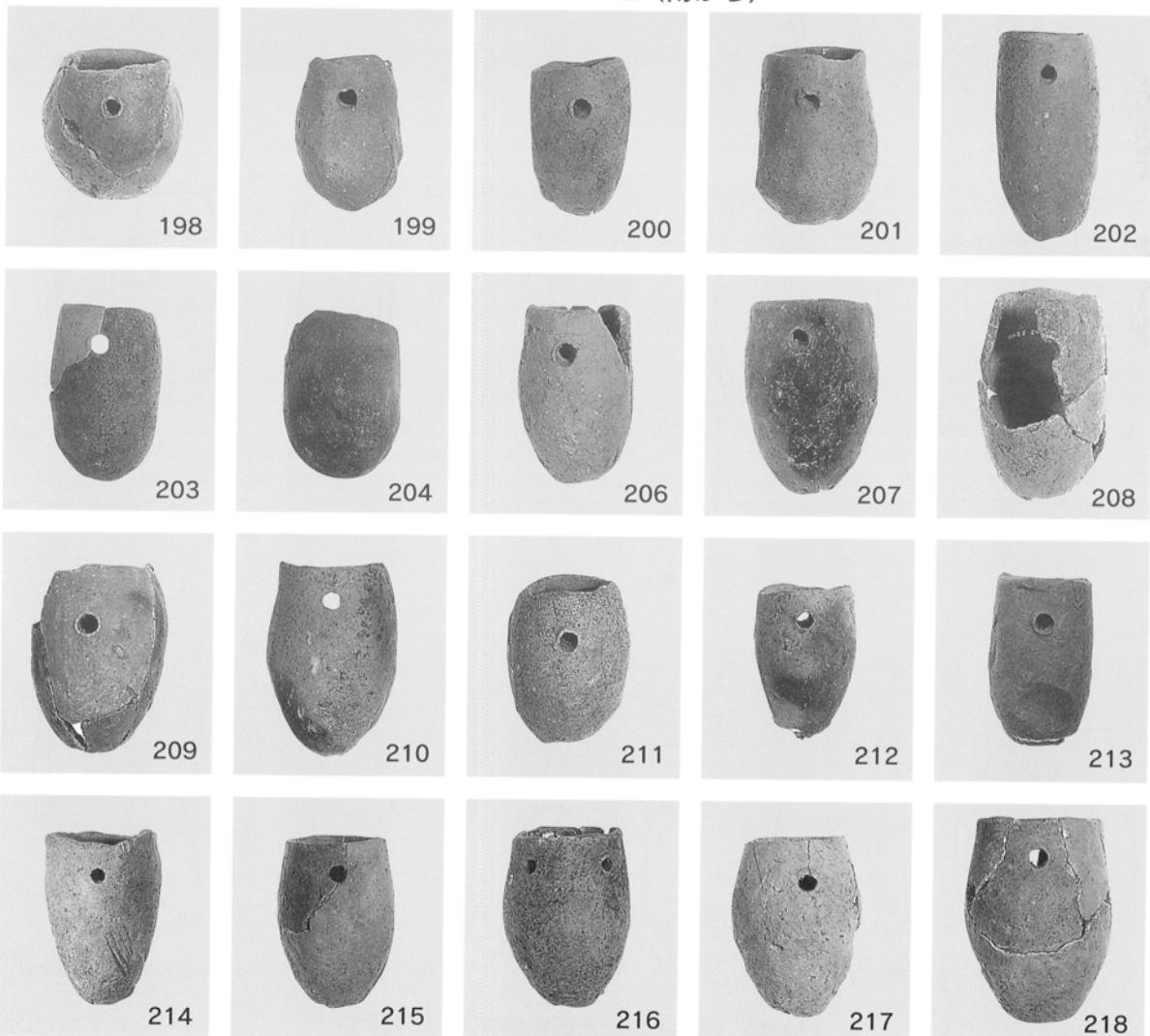
Fig.40 SK44 実測図 (1/20)



PL.23 SK44 1 (上：南から・下：北から)



PL.24 SK44 2 (南から)



PL.25 SK44 出土遺物 (約1/4)

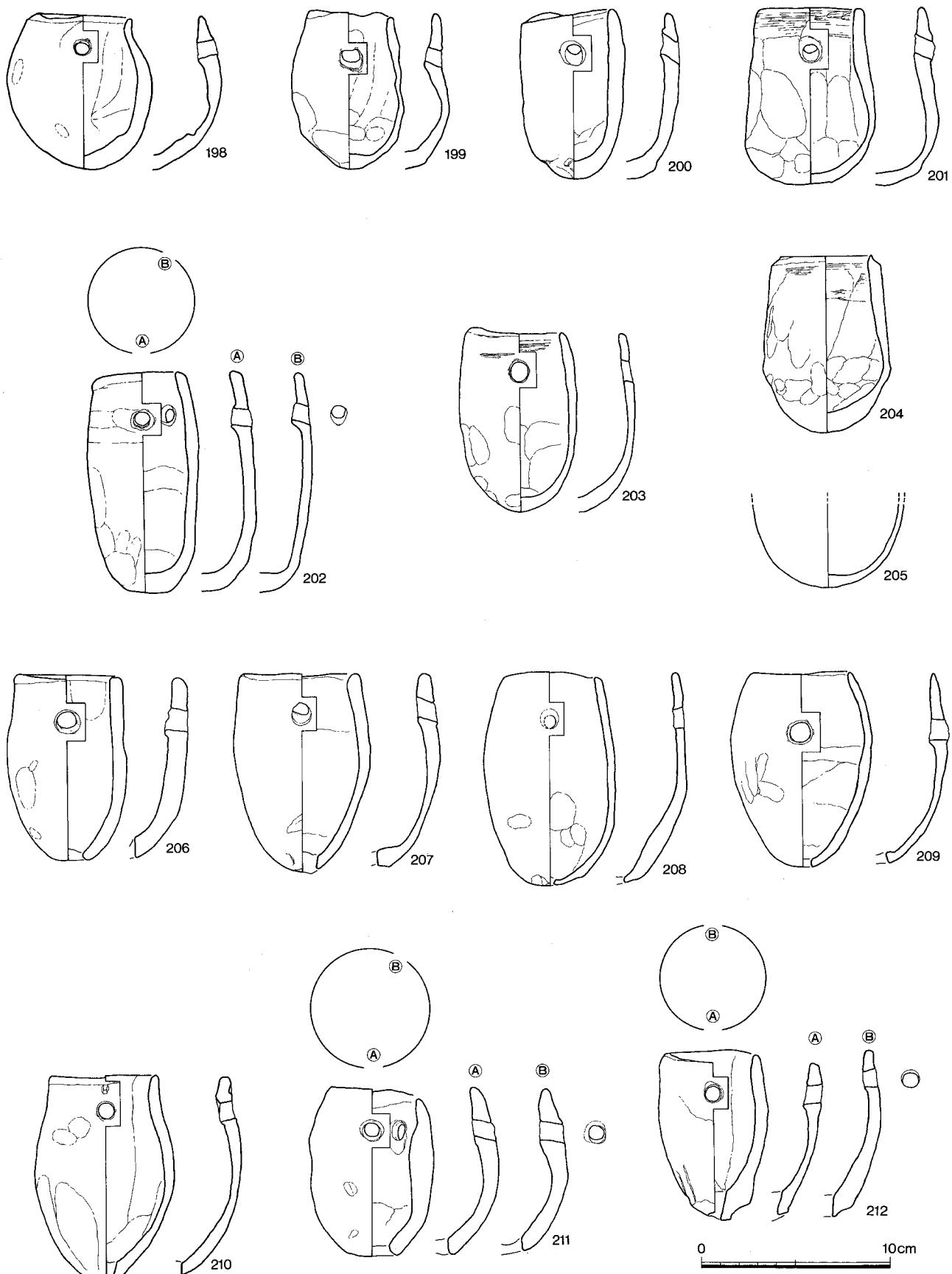


Fig.41 SK44 出土遺物実測図 1 (1/3)

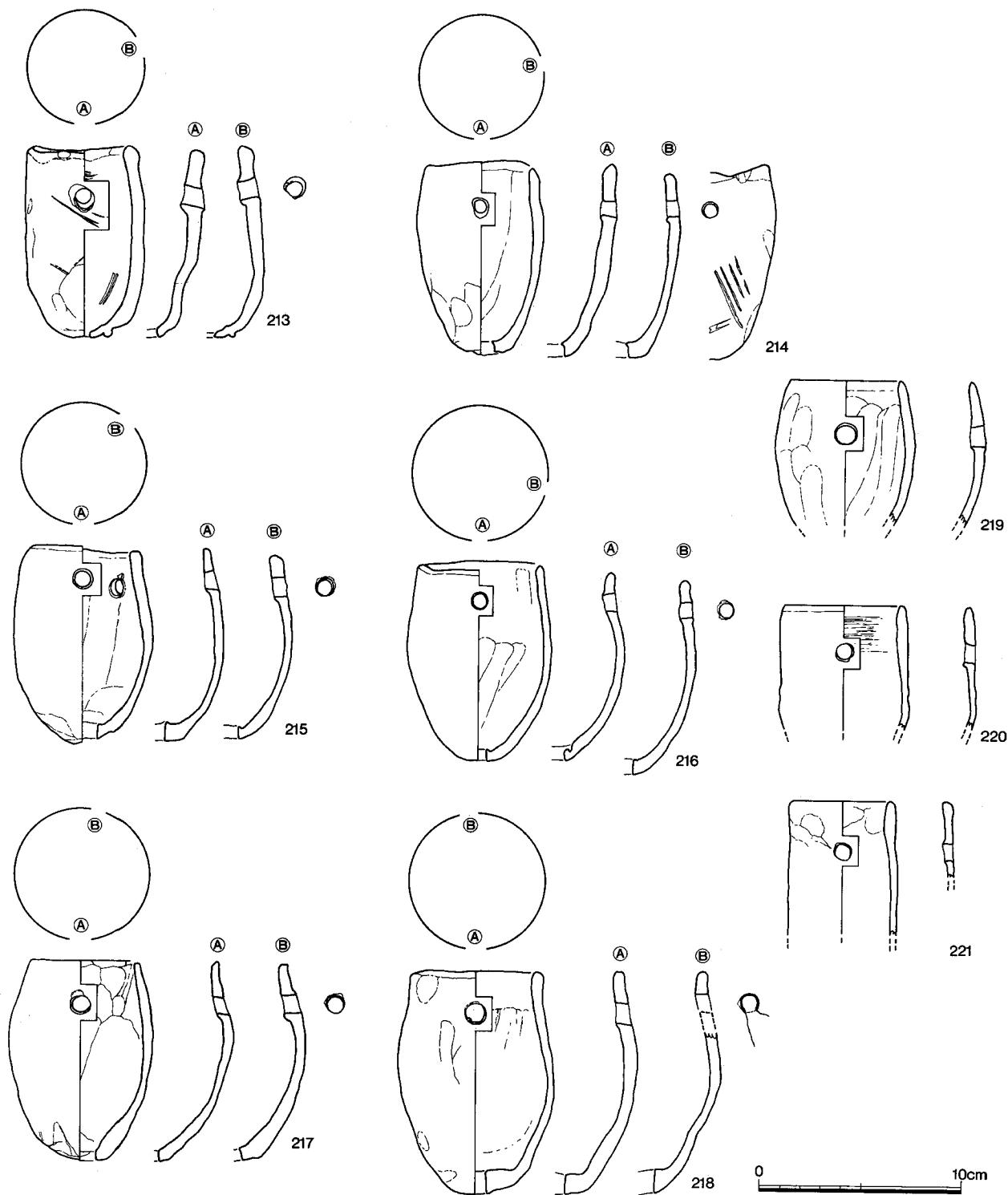


Fig.42 SK44 出土遺物実測図 2 (1/3)

Tab.4 飯蛸壺計測表

() は復元値 [] は残存値

No.	出土遺構	口径	胴部径	器高	重量	口縁下孔		底部孔		遺存度	備考
						数	孔径	有無	孔径		
154	SC36	6.3	7.3	10.5	223	無		無		完存	
155	SC36	7.0	8.1	9.9	258	1	1.4	無		完形	
156	SC36屋内土坑	(5.7)	(5.9)	10.5	[80]	—		無		全体の1/2	
157	SC36屋内土坑	5.9	6.8	10.7	[184]	[1]	0.9	有	1.3	胴部5/6と底部	クシ状工具による擦痕
158	SC36	5.8	6.2	9.0	153	1	1.2	有	1.0	完存	ヘラ状工具による条痕
159	SC36屋内土坑	5.3	6.3	[6.5]	[53]	[1]	0.9	—		胴部1/2	
180	SC58	5.4	6.9	8.9	[110]	[1]	1.0	無		胴部2/3と底部	
181	SC58	5.6	6.7	9.1	[91]	[1]	1.0	無		胴部1/2と底部	
182	SC58	(6.0)	(6.4)	8.7	[109]	[1]	1.1	無		胴部1/3と底部	
183	SC58下層	5.5	6.7	8.7	121	1	1.1	無		完存	
184	SC58	(5.9)	(6.6)	11.5	[90]	—		無		全体の1/2	
185	SC58下層	(7.5)	(7.8)	9.6	[96]	—		無		胴部1/6と底部	
186	SC58下層	(5.6)	6.0	9.4	[119]	—		無		胴部3/4と底部	
187	SC58下層	5.2	6.9	9.0	[94]	—		無		胴部1/2と底部	
188	SC58	—	[6.3]	[4.4]	[35]	—		無		底部	
189	SC58	5.6	6.7	9.6	197	1	1.1	有	1.2	完存	
190	SC58下層	5.4	6.2	10.2	[128]	[1]	1.2	有	2.5	胴部3/4と底部	
191	SC58	(5.3)	7.0	9.9	[99]	[1]	1.2	有	1.5	全体の1/2	
192	SC58下層	5.9	6.1	[5.9]	[40]	2	0.9/-	—		胴部1/2	
193	SC58	(5.1)	(6.7)	[8.7]	[75]	[1]	—	—		全体の1/3	
194	SC58下層	5.2	(5.2)	[6.7]	[39]	[1]	1.1	—		胴部1/3	
195	SC58下層	(6.0)	(6.0)	[6.0]	[32]	[1]	1.1	—		胴部1/4	
196	SC58下層	(5.9)	(6.2)	[7.1]	[38]	[1]	1.0	—		胴部1/2	
198	SK44	5.5	7.7	8.5	[196]	1	0.8	無		略完形	
199	SK44	4.6	5.9	8.6	105	1	1.1	無		完存	
200	SK44	5.2	5.6	9.1	142	1	1.1	無		完存	
201	SK44	5.7	6.8	9.5	187	1	0.9	無		完存	
202	SK44	5.0	6.0	11.9	191	2	0.9/1.0	無		完存	
203	SK44	5.2	6.3	10.0	[100]	[1]	1.1	無		胴部1/2と底部	
204	SK44	(5.0)	6.6	9.5	[108]	—		無		胴部1/2と底部	
205	SK44	—	[8.0]	[4.4]	[51]	—		無		底部	
206	SK44	5.8	6.3	10.0	[227]	1	1.2	有	1.4	略完形	
207	SK44	6.4	7.4	10.8	231	1	1.0	有	1.2	完形	
208	SK44	5.3	7.0	11.5	[168]	1	1.1	有	0.6	胴部2/3と底部	
209	SK44	5.4	7.5	10.5	[158]	[1]	1.0	有	1.0	胴部上半1/6欠	
210	SK44	5.8	7.3	11.0	[134]	[1]	1.0	有	1.2	胴部1/2と底部	
211	SK44	5.2	6.6	9.2	240	2	1.0/1.0	有	2.0	完存	
212	SK44	5.2	5.8	9.2	141	2	0.9/0.9	有	1.0	完存	
213	SK44	5.4	5.7	9.5	165	2	1.0/1.0	有	1.4	完存	ヘラ状工具による擦痕
214	SK44	5.6	6.2	9.6	169	2	0.8/0.8	有	1.3	完存	クシ状工具による条痕
215	SK44	5.4	6.8	9.8	[119]	2	0.9/0.9	有	0.9	略完形	
216	SK44	6.2	7.2	9.9	160	2	0.7/0.8	有	1.0	完形	
217	SK44	5.3	7.0	9.9	163	2	1.0/0.9	有	0.8	完形	
218	SK44	6.5	7.6	11.1	[197]	2	1.0/1.0	有	1.2	胴部一部欠損	
219	SK44	(5.6)	(7.0)	[7.2]	[52]	[1]	1.1	—		胴部1/2	
220	SK44	(6.2)	(6.5)	[6.1]	[21]	[1]	0.9	—		胴部1/6	
221	SK44	(5.3)	(5.5)	[6.6]	[33]	[1]	0.9	—		胴部1/3	
229	F-5	(4.8)	(7.6)	[8.8]	[72]	[1]	1.1	—		胴部1/2	

6. ピットと遺構外の遺物

最後にピットと遺構外出土の遺物について説明する。ピットは遺物が出土したものに番号を付けた。S P 0 1 から S P 2 7 まであり（14・19は欠番）、S P 2 7 は S C 5 8 の柱穴である。その他は建物としてまとめることはできなかった。遺構外では F - 6 周辺で古式土師器が少量出土している。

222 は肥前の染付碗である。口径 10.0cm、高台径 4.1cm、器高 5.4cm。コンニャク印判による菊花文と草文を 3 単位めぐらす。完存品であるが被熱している。S P 2 6 出土。223 は瓦質の火鉢である。外面にスタンプで文様帯をつくり、その上下は丁寧にみがいている。E - 7 出土。224 は龍泉窯系青磁碗である。高台径 7.0cm。暗緑白色の釉を全面に施した後、外底部を蛇の目に搔き取る。14世紀後半～15世紀前半。S P 2 5 出土。225 は排土にまぎれていた越州窯系青磁碗で、全面に施釉してあり、外底部に 4ヶ所の目跡がある。11世紀前半代の製品。226 は布留系の甕。復元口径 15.9cm。B - 9 出土。227 は壺の底部で、径 2.5cm ほどの底を削りだしている。畿内系の二重口縁壺のものと思われる。F - 7 出土。228 は小型器台で精製器種 B 群である。復元口径 9.0cm。B - 11 出土。229 は飯蛸壺である。F - 5 出土であり、S K 4 4 の遺物であろう。230～232 は土錘で、すべて攪乱からの出土。230 は長さ 5.4cm、幅 1.0cm、重量 5 g。231 は長さ 4.9cm、幅 1.4cm、重量 9 g。232 は残存長 3.1cm、幅 1.8cm、残存重量 7 g。233 は滑石製石製品で堅耳の石鍋の転用品である。つまみに石鍋の蔓取手穴が残る。長さ 7.5cm、高さ 3.7cm。S E 3 0 のプラン確認時出土。S E 3 0 か S X 6 4 の遺物である。

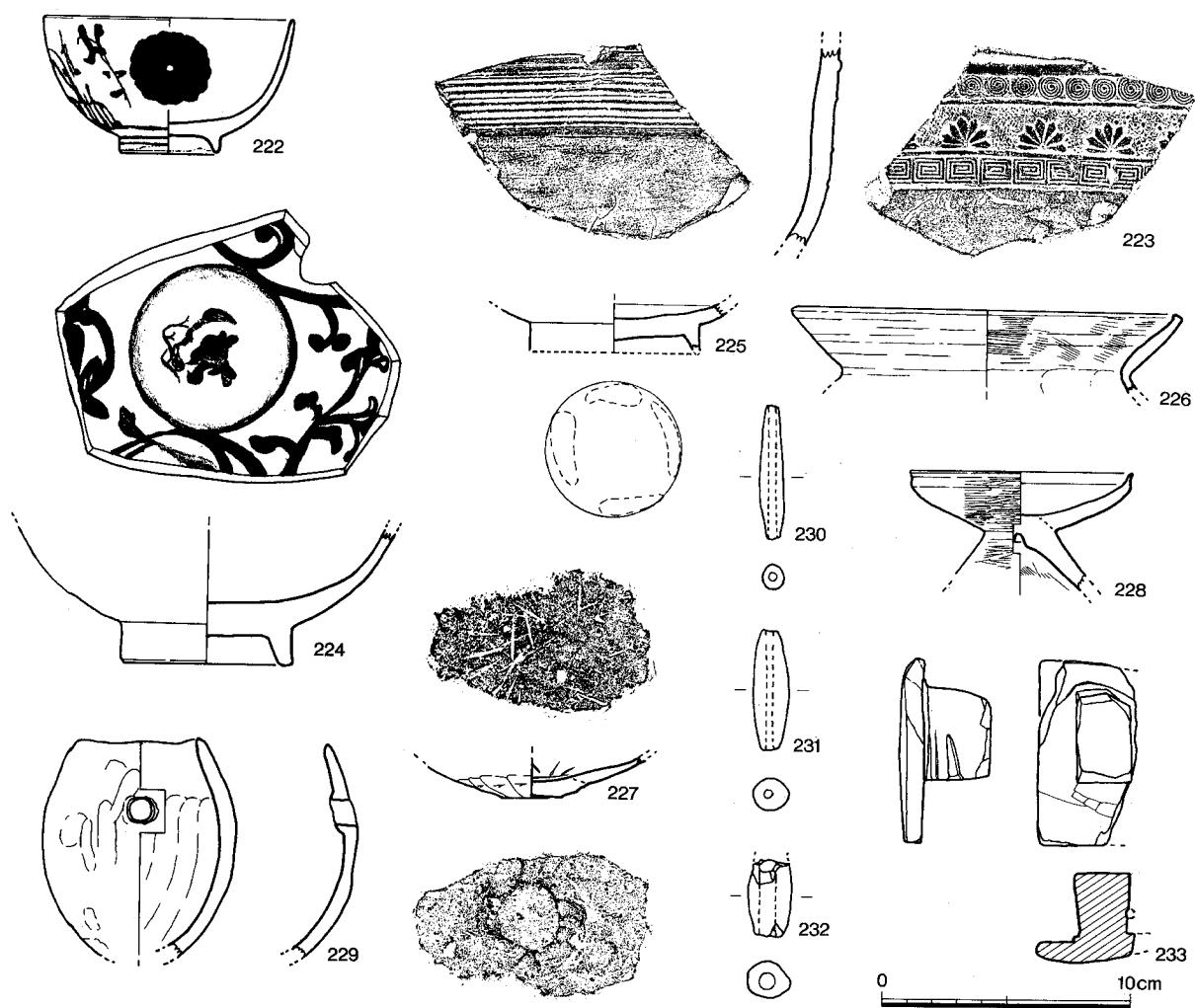


Fig.43 ピット・遺構外の出土遺物実測図 (1/3)

III まとめ

1. 箱崎遺跡群の古墳時代前期について

中世期の筥崎宮の門前町、対外貿易港として知られる箱崎遺跡群であるが、今回の8次調査では初めて古墳時代の遺構を検出した。博多湾岸の古砂丘上の微高地という同様な立地を持つ堅粕遺跡や吉塚遺跡でこの頃の集落が検出されており、箱崎遺跡群に存在してもおかしくはない状況であったが、これまで7次にわたる調査では未発見であった。8次調査以降、箱崎遺跡群がのる砂丘の尾根線より東側の10次調査地点・15次調査地点においても古式土師器が出土している。中世期には現在の多々良川の河口から海が大きく湾入しており、古墳時代においても同様であったと思われる。この入り江に面して、集落が広がっていたようである。ところで10次・15次調査での古式土師器の出土は砂層中からであり、今後の周辺での調査では砂層の中の遺物の有無に注意を払う必要があろう。

2. 出土した古墳時代前期の土器について

S C 3 6 と S C 5 8 では、古墳時代初頭の古式土師器の良好な一括資料が出土した。大半は外来系を含めて北部九州（玄界灘沿岸）において製作されたものであろうが、胎土や型式的特徴から地域外からの搬入品と推定されるものも含まれ、以下に検討する。なお記述の基本となる編年は、筆者（久住）独自のものを用いる（1998年10月、第18回庄内式土器研究会発表資料「北部九州における庄内式併行期の土器様相」、近く論文化予定）。従来の編年との対応関係を示せば（柳田康雄の編年を用いる。柳田1991参照）、II A 期が I b 式の一部と II a 式の大半、II B 期が II a 式新相と II b 式の古相、II C 期が II b 式の大半に対応するものである（系統や遺跡間の跛行性があり、単純対応ではないが）。

まず S C 3 6 の資料は、II B 期の指標資料としてもよい内容である。多くは覆土上層出土で、130、138～141、147は一括廃棄状況で、これとやや離れて129、145、149、150が一括出土、153は住居の端より出土した。133、134は屋内土坑出土（上層とも接合）である。他の多くは覆土中（主に上層）出土である。型的に143、151はやや新相と思われるが、他は時期的に同一でよい。136、137の庄内甕は、外反気味の口縁部、頸部内面ケズリの状況、左上がりのやや細かいタタキ、および胎土から大和型庄内甕の系統を引くが北部九州在地の「筑前型」とるべきものである。比恵遺跡9次S E 1 5 出土の庄内甕と似る（II B 期）。138は、口縁端部内側の肥厚、頸部内面ケズリ、肩部外面の調整、胎土から近畿地方のどこかの初期の布留型甕と判断でき、布留1式の古相であろう。142はその形態・調整などの特徴から、備後の瀬戸内沿岸の神辺御領遺跡（嶋田編1980）出土の布留系甕に酷似し、布留0式新相～1式に併行しよう。153の鼓形器台は、胎土からは玄界灘沿岸の製作（西新町遺跡のものに類似）であろうが、型的には山陰と同一で、筒部内面が即屈曲し、器高と口縁部径の比から布留1式併行のものであろう。130、131の在来系甕は、調整の粗雑化（130）、胴部が長胴というよりは卵形状に丸みを持つ（131）、などからこの時期の型式である。132の伝統的V様式系甕は、タタキを残し一見古相だが、胴部は球胴化し、タタキも庄内甕の影響で細筋化した新しい型式である。133、134は、口縁部の形状、ケズリを施すも厚い器壁、口縁部内面のハケメ（回転的ヨコナデが無い）、肩部に回転的なヨコハケないしヨコスリナデが無いことから、伝統的V様式系技法保持者が布留系甕を模倣したものであろう。ケズリの方向から、134の方がより布留系甕に近づいている。135は布留系甕としてもよいが、肩部ヨコハケの不完全さや、胴部下半の器壁の厚さなど、全体の雰囲気が139～141のような布留系甕とは違和感がある。なお149の鉢も、133、134のような甕の製作者が150のような精製器種B群の鉢を模倣したものであろう。139～141の布留系甕は、口縁部がやや長く伸びる特徴（頸部のしまり

が甘い点で古相)、倒卵形胴部、クシ状に近い粗い条痕のヨコハケ(139、140)などから博多遺跡群の甕に類似する。口縁部が内湾気味のもの(139、140)と、やや外反気味のもの(141)があるが、製作者系統の違いと思われ(前者が博多遺跡群では主流)、後者を庄内系甕とするのは誤りである。北部九州における布留系甕は、「北部九州型布留甕」とでもすべきか)、口縁部は畿内と異なりかつ多様性があり、胴部外面ハケ仕上げ、胴部上半外面と口縁部の回転的調整、胴部内面ヘラケズリによる器壁の薄化、底部内面押し出し丸底化技法をもって定義すべきである。なお144はⅡ C期に下る可能性があるが、西新町遺跡のものに酷似する。SC36出土のこれら布留系甕や、鼓形器台、145、146、150などの精製器種B群などは周辺他遺跡からの搬入品と思われ、残りは在来系とV様式系となるが、前者は調整や胎土に統一が見られず客体的で、これらも周辺からの搬入であろう。残る後者の一群は、箱崎遺跡の狭義の在地品と見られ、飯蛸壺の型式の多様性とあわせて集団の出自を示唆するかもしれない。

SC58はⅡ C期に比定できるが、布留系甕の特徴はSC36の一部と同様であり、その差は少ないが、以下のような相違がある。布留系甕は、より胴部が張り、球胴化が進む点と、頸部のしまりが胴部径・口縁部径に比してきつくなる、口縁端部の面が水平に近いものが現れる(167、168)などから新相である。頸部内面ケズリの稜が曖昧なものが増えるのも特徴である。なお微妙な諸特徴から、164、166は比恵・那珂遺跡群の、167は西新町遺跡の、165、168は博多遺跡群のものである可能性が高い(169は不明)。なお161~171、174、179は覆土上層で一括廃棄状況の出土である。172のみ単独でやや下層出土、他は覆土上層で主に出土している。161の伝統的V様式甕はタタキ?を残すが、口縁部が長く延びることや、内面にケズリを施すことから新しいものでよい。162の庄内甕は「筑前型」であり、頸部(~肩部)内面ケズリの状況や口縁部の回転ヨコナデから最も新しい型式である。163は「播磨型」庄内甕の搬入品で、布留系甕的な回転ヨコナデの口縁部や、曖昧な頸部ケズリの状況、球胴化の進行から新相の型式で、布留1式併行であろう。172の壺は、畿内系でもより粗製な伝統的V様式系範型によるもので、器壁が厚く、内面が雑な調整で、外面のミガキも粗い。口縁部は一応ここで終わるようだが、雑な仕上げであり、二重口縁壺を作ろうとしてその頸部でやめたものの可能性がある。173も技法的には伝統的V様式系的だが、形状が異形で類例を知らない。176の在来系高坏は、溝口孝司のAV型式で(溝口1988)、共伴してよいものである。170の陶質(ないし瓦質)土器は胴部扁球形の短頸壺ないし甕で、171の軟質土器の甕とともに、韓国南部の嶺南地方(伽耶)の製品であろう。申敬澈の編年(申1993)のⅡa~Ⅱb段階のものに類似するが厳密な時期比定は難しい。今後日韓双方の共伴資料の増加と、韓国側の編年の整備を待ってその併行関係を考えたい。

以上解説したSC36とSC58の土器群は、当地域の編年の指標となるもので、かつ韓国南部から瀬戸内・近畿地方との併行関係を明らかにする上で重要な位置を占める資料と言える。(久住猛雄)

3. 飯蛸壺について

今回の調査ではSC36で5点、SC58で17点、SK44で24点、F-5で1点、飯蛸壺を報告した。この他にも図示できない破片が多数出土している。

飯蛸壺漁は弥生時代中期前葉、大阪湾南部沿岸地域で発生した漁法で、弥生時代中期中葉から後期に大阪湾沿岸一帯と播磨灘沿岸に広がった。飯蛸壺の形態は第I形態:コップ形で口縁下に紐孔と思われる一孔があるもの 第II形態:第I形態の器形に底部にも水抜きと思われる一孔があるもの 第III形態:釣鐘形のもの、のIII形態に大きく分類されている。第I形態は弥生時代中期中葉、第II形態は弥生時代後期、第III形態は古墳時代後期からそれぞれみられる。(眞野1990)。

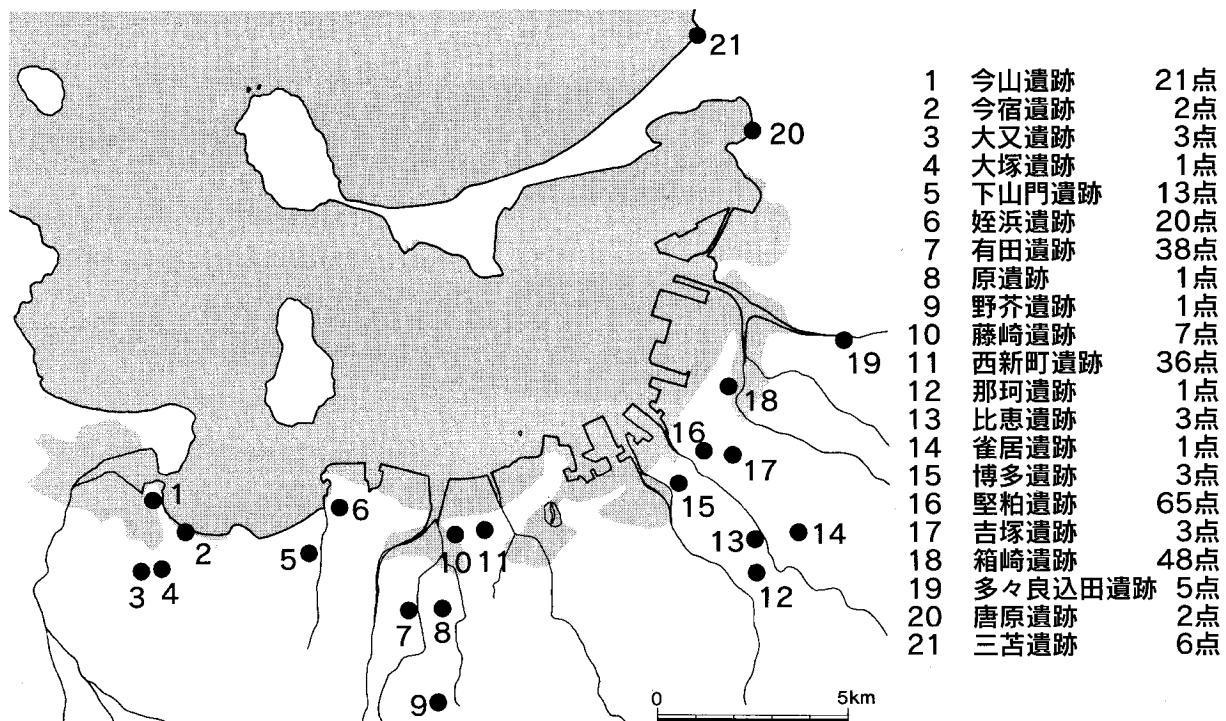


Fig.44 博多湾沿岸の飯蛸壺出土遺跡 (1/200,000)

この漁法が博多湾沿岸に伝わったのは弥生時代後期後半から終末で、比恵遺跡、那珂遺跡、雀居遺跡などでこの頃の発見例があり、古墳時代初頭になると多くの遺跡で発見例がある。古墳時代後期までみられ、福岡市内で21遺跡290点の飯蛸壺が報告されている。大阪湾岸、播磨灘沿岸に比べるとその出土量は多くない。これまで報告された例をみると博多湾岸沿いの砂丘上の今山遺跡、姪浜遺跡、藤崎遺跡、西新町遺跡、堅粕遺跡、吉塚遺跡などから比較的まとまって出土している。これらの集落は目前の海で活発な漁をおこなっていたと考えられる。海岸まで2km程度ある有田遺跡と多々良込田遺跡は河川を利用して博多湾内へ漁に出かけたものと思われる。

形態は、今回報告した箱崎8次を除くと、第I形態がほとんどで、第II形態が姪浜遺跡3次調査で1点報告されたのみである。発掘品以外では西公園東側の福岡港の浚渫時や大濠公園修造時に第II形態が（中山1932）、今宿、志賀島で第III形態が（大内1994）報告されているが多くはない。

ところが今回報告した箱崎遺跡群8次調査では、第I形態が20点、第II形態が18点と約半数近く第II形態がある。この第II形態の蛸壺の使用が箱崎遺跡に進出した集団の出自を示す手がかりになるのではなかろうか。水抜きの孔を持つ第II形態は第I形態の改良型と考えられるが、博多湾岸の他地域では広がりを見せておらず、なぜ広まらなかったのかも箱崎遺跡の集団と他地域の集団の関係を考える上で興味深い。また、口縁下の孔が2孔のものが10点ある。真蛸壺には口縁下に2孔あるものもあるが、飯蛸壺の例は聞いたことがなく、今後の類例の増加を待ちたい。

4. SK44について

今回の調査で飯蛸壺を納めた土坑が検出された。このような土坑は播磨灘沿岸の神戸市玉津・田中遺跡で完形品に近い形の70数個体がまとめて出土した例が知られ、一時的な収納と考えられている。神戸市池上・口ノ池遺跡、加古川市溝之口遺跡では住居址内のピットからそれぞれ24個体、9個体が出土している。博多湾沿岸では土坑中ではないが、堅粕遺跡で土坑の脇から32個体の飯蛸壺と11個の土錐が集積した状態で出土した例がある。これらは操業時の飯蛸壺の単位を考える上で貴重な発掘例である。今回の検出例も一時的な収納と考えても良いが、出土した蛸壺の形態から祭祀の土坑である可能性を指摘しておきたい。本文中でも述べたが、この土坑から出土した飯蛸壺の形態はバラエティに富み、同一単位の飯蛸壺と考えるには違和感がある。いくつかの家族がそれぞれの飯蛸壺を持ち寄り、豊漁を願って土坑に納めたものではないかと考えている。

引用・参考文献

- 池辺元明編 1997 『堅粕遺跡群 一千代1丁目遺跡』 福岡県文化財調査報告書 第130集
- 大内土郎 1994 「今宿・今山遺跡及び周辺遺跡の表採資料」 『今宿遺跡・今山遺跡第1・3次発掘調査報告』 福岡市教育委員会
- 川添昭二編 1988 『よみがえる中世』 1 東アジアの国際都市 博多 平凡社
- 申敬 澄 1993 「伽耶成立前後の諸問題 一最近の発掘成果から一」 『伽耶と古代東アジア』 新人物往来社
- 次山 淳 1993 「布留式土器における精製器種の製作技術」 『考古学研究』 第40巻 第2号
- 中山平次郎 1932 「一種の有孔小土器」 『考古学』 第3巻 第1号
- 鳴田滋編 1980 『神辺御領遺跡 一神辺農業協同組合御野支所建設にかかる一』 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター
- 眞野 修 1990 「播磨灘沿岸における弥生時代の飯蛸壺縄漁」 『今里幾次先生古希記念播磨考古学論叢』
- 溝口孝司 1988 「古墳出現前後の土器相 一筑前地方を素材として一」 『考古学研究』 第35巻 第2号
- 柳田康雄 1991 「土師器の編年 九州」 『古墳時代の研究』 6 土師器と須恵器 雄山閣

そのほか福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書を参考にした。

〈追記〉

1999年3月17日付西日本新聞朝刊によると大分県中津市の定留(さだのうみ)遺跡で奈良時代の飯蛸壺焼成坑が発見され、出土した飯蛸壺には口縁下に2ヶ所ひもを通す孔があるという。

箱崎 7

—箱崎遺跡群第8次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第591集

1999年3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1

☎092-711-4667

印 刷 大同印刷 株式会社
福岡市中央区今泉1-13-30

☎092-761-1021

HAKOZAKI 7

— Results of the 8th excavation of the Hakozaki sites —
Report of Archaeological Investigations of Fukuoka city, Vol.591



1999

THE BOARDS OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY